



神秘学ポエジー 風遊戯
mediopos
112

【神秘学ポエジー～風遊戯 第 229集】 media-poesieヴァージョン
mediopos 2776-2780

2022.6.24～ 2022.7.18

神秘学遊戯団



「競争主義」と「勝利至上主義」は
同じ根から生えてくるものだが
その果実が異なっている

「競争主義」の目的は
「勝つこと」ではなく
「全体の質を高めること」にある

「勝利至上主義」の目的は
なにがなんでも「勝つこと」である
勝たなくては意味がない

そうしたとらえ方は
とくに理解しがたいものではないが
むずかしいところがある

向上心を効果的に働かせるためには
競争が必要である場合が多い

ニンジンが目の前にぶら下がっていると
それに向かって走ろうという気にはなるのだ

競争によって得られるものはさまざまだが
最も大きなニジンは「勝つ」ということそのものであり
それにともなって得られるものがあれば
それも大きなニンジンとして機能する

競争は他との比較の世界である
比較できなければ
じぶんの立ち位置がわかりにくい
その点でスポーツや勝負の世界
それから点数で評価する世界は
そのアウトプット（結果）で
じぶんがどこにいるのかを見定めることができる

そしてその勝つという営為が
向上心を効果的に働かせることができる

しかしむずかしいのは
その競争による比較は
だれかから与えられたものを基準にした
向上心でしかないということだろう
たとえじぶんが望んだ競争と比較であったとしても
その競争の場はどこかから与えられている
そのなかでの競争なのだ

その競争の場が
多くの人たちに共有された場であるとき
競争において勝つということに
価値があると信じていることができる
組織における昇進というのと同じことだ

それぞれの場における価値観を信じていることで
その競争に勝つことを目的として生きることができる
もちろんその営為において
「全体の質を高めること」に寄与することもあだろうが
その場そのものの意味づけを盲信したとき
その競争は「勝利至上主義」に飲み込まれてしまう
政治の世界の権力闘争などをみてもよくわかる

しかしそれらの価値が信じられなくなったとき
「競争」そのものは意味を失ってしまう

まったく競争のない世界は想像しにくいし
なんらかの競争原理は働かざるをえないけれど
競争でしかみずからの価値を見出すことができないとき
人は「勝利至上主義」に向かっていくか
競争に敗れた人間としてしか生きられなくなってしまう

競争はあくまでも手段でしかない
手段を目的にしたとき向かう道は明らかなのだ

その意味でいえば
重要なのは「全体の質を高めること」というよりも
競争を離れたところで
自分の価値観を見つめ直すことができるかどうかではないか
おそらくそこからしかほんとうは
なにもはじめたことにはならない

手段は手段であって
目的や主義とすることはできないのだから

スポーツのこれから 平尾剛

第14回

「競争主義」と「勝利至上主義」

平尾剛「スポーツのこれから」

第14回「競争主義」と「勝利至上主義」2022.06.23

(「みんなのミシマガジン」所収)

<https://www.mishimaga.com/books/sportskorekara/004411.html>

平尾 剛「スポーツのこれから」

第14回「競争主義」と「勝利至上主義」2022.06.23

(「みんなのミシマガジン」所収)

<https://www.mishimaga.com/books/sportskorekara/004411.html>

「勝ったらうれしい、負ければ悔しい。だから勝利を目指す。

そのなにかいけないのか。そんなの、当たり前じゃないか。

至極、もっともである。

空は青いし、海も青い。川には水が流れ、地球は丸い。これと同じように、スポーツは勝負だ。だから勝つためにプレーするのは、自ずとそうなる自然である。

スポーツは勝利を目指す。

これはなにも競技スポーツだけに限らない。自己との闘いを含めれば健康を目的とするスポーツもそうだし、他者との交流を目的とするレクリエーションスポーツでさえ、勝敗をめぐる揺れ動く感情をもとにコミュニケーションを図る。なにも血眼になって勝利を目指せといっているわけではない。負けることにささやかな抵抗さえあれば、それがエッセンスとなって活動そのものが充実する。その意味でスポーツは、健康の維持増進にも人間関係の構築にも資するわけだ。

すべてのスポーツはすべからず勝利が目指される。これが原点だ。

つまりスポーツには「競争主義」があらかじめセットされている。個人や集団の競い合いを通じて全体の質を高めようとする考え方が、組み込まれている。「勝利至上主義」をめぐる議論がいまいち噛み合わないのは、ここにある。「勝利至上主義」を、スポーツに内在する「競争主義」と混同しているのである。」

「競争的環境から恩恵を受けた身として、私は勝利への飽くなき追求は認める。「競争主義」は否定しない。冒頭で述べた通り、「競争主義」はそもそもスポーツに内在しているのだから、その否定はそのままスポーツの存在価値を揺るがすことになる。手放しでの礼賛は憚られるにしても、個人や集団の競い合いを通じて全体の質を高めようとする考え方そのものには相応の効果があるし、スポーツ経験者ならほぼ例外なくその恩恵に預かっているはずだ。ヒリヒリするような勝負の場面で、みずからのからだがバージョンアップするときの、あの快感情はたまらない。

だが、「勝利至上主義」となれば話が違ってくる。

「至上」とは、この上もないこと、最上、最高という意味である。たとえば「至上者」は、様々な民族の宗教に見られる万物の創造主・全知全能者としての霊的存在を、「至上命令」は、絶対に服従すべき命令を意味する。

ここから「勝利至上主義」とは、勝利を最上の価値と認め、他のなにかを差し置いてでも手にすべきであるという考え方になる。これは、そこに自ずとあるはずの勝利を過剰に意味づけるという考え方で、いわば「競争主義」から派生した亜種である。

繰り返すが、「競争主義」とは、個人や団体の競い合いを通じて全体の質を高めようとする考え方である。目的は勝つことではなく、「全体の質を高めること」にある。この目的を手放さない限りにおいて「競争主義」は機能する。」

「個人や団体が成熟を果たすための方便にすぎなかった競争が、いつのまにか目的化する。競争原理の導入がその効力を失うデッドラインの先に、「勝利至上主義」は出来するのである。

えてして競争は過熱しやすい。勝利はわかりやすく、それを手にすることで得られるものも瞬間的なよるこびにすぎないとはいえ、それがもたらす恍惚は計り知れない。とくに成長途上の子供にとっては、自己肯定感を高める成功体験として深く記憶に刻まれる。その様子を目の当たりにした指導者や保護者は、自ずと勝たせてあげたいと望むようになる。このささやかな欲望がいつしか勝たねば意味がないと先鋭化してゆく。ふと気がついたときには、勝利を最たる目的とする「勝利至上主義者」になっている。

試合に負けた我が子の胸ぐらを掴んで叱責する保護者、2位では意味がないと準優勝の賞状を部員の前で破り捨てる指導者も、よくよく初心を思い出せば、当初はもっと冷静に子供たちの将来を考えていたはずだ。それがいつしか過激な態度で子供に接するようになる。これは競争がどれだけ加熱しやすいかを物語っている。「競争主義」は、競争が加熱しないようにその都度ブレーキをかけ続けなければ、坂道を転げ落ちるように「勝利至上主義」へと墮してしまうのである。

勝利とは、到達目標にすればそこに至るまでのプロセスが豊かになるという方便に過ぎない。他のなにかを差し置いてでも優先する至上の価値ではないというのが、勝ったり負けたりを繰り返して辿り着いた私の結論である。競争を通じてつかんだ勝利は、その瞬間はよるこびに満ち溢れるものの、いざ手にした途端にまるで陽炎のように霧消する儂いものだ。それよりも勝利を目指すプロセスで身につくものの方が確実に、はるかに価値がある。」

1938年10月30日にアメリカで放送された
オーソン・ウェルズによるラジオドラマ『宇宙戦争』

実際に火星人が襲来したとリスナーが信じ込み
全米がパニックに陥った...
という話は有名だが

そういえばその中身が実際どういう内容なのかは
H.G.ウェルズが1898年に発表した長篇『宇宙戦争』が
原作であることくらいしか知らなかった

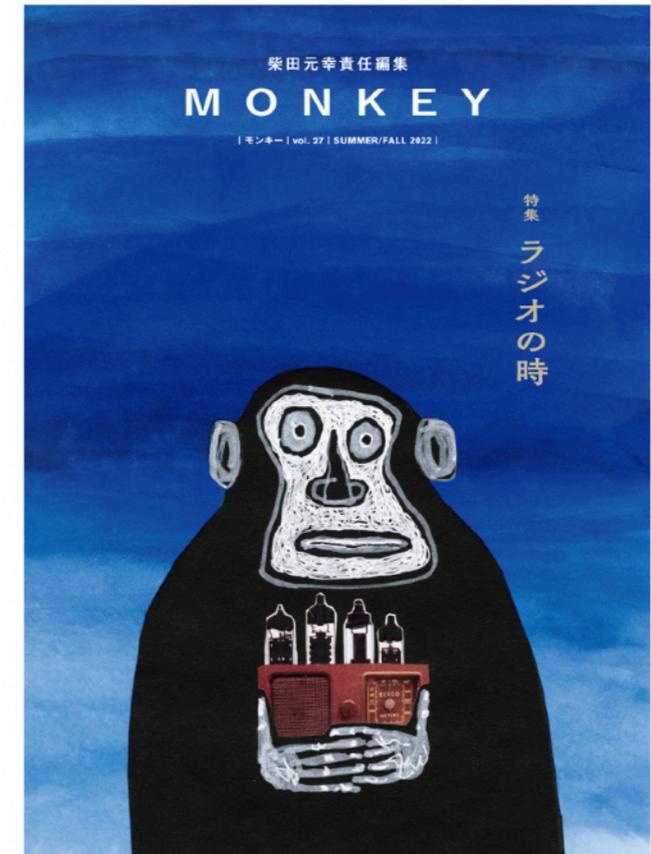
『MONKEY vol.27／特集 ラジオの時』には
そのシナリオ全訳が掲載され
さらに1930～40年代アメリカの
「ラジオドラマの黄金時代」の話や
「ラジオの出てくる物語」など
ラジオと物語の関係について光が当てられている

ラジオといえば中高生の頃は
ラジオで育ったというほどラジオ漬けだったが
その後しだいにラジオから遠ざかっている

テレビに主役を奪われ
いまやテレビもインターネットに主役を奪われているが
このところカセットテープやレコードが復権するように
ラジオメディアがあらためて注目されたりもしている

仕事の関わりでも
かつてはラジオ生中継とかいうことで
いろんなイベントで
ラジオメディアを使うことも多かった

その後その数はずいぶん減ってきていたが
そういえばちょうど今かかわっている仕事でも
イベント会場でのラジオ中継の提案を
久しぶりに企画書に入れたりしたところだったりするように
ラジオメディアはラジオメディアなりに
その特性が見直されているところもあるようだ



- 『MONKEY vol.27／特集 ラジオの時』
(スイッチパブリッシング 2022/6)

これからラジオメディアがどうなっていくかはわからないが
インターネットばかりが肥大していくなかで
それはそれとしながらも
かつてのメディアはメディアなりに
その特性を活かした使い方のなかで
それなりの地図を描いてゆくのだろう

さてラジオドラマ『宇宙戦争』が
大きな影響を及ぼしたことからわかるように
メディアから流される情報は
それを真に受ける人が一定数存在する

ドラマでさえそうなのだから
現実のニュースとしてメディアから流される情報は
オーソン・ウェルズの『宇宙戦争』どころの騒ぎではない
にもかかわらず騒ぎにならないということこそが恐ろしい

ニュースにのほとんどは大きなバイアスがかかっている
とくに世論の形成に拘わる情報に関しては
フェイクニュースが過剰に流されたりもする
学校教育をはじめとして
教えられ与えられたことに疑いをもたない場合
それが真実として理解されてしまうことになる

メディア・リテラシーは
情報そのもののバイアスもふくめ
それを読みとる力のことであるにもかかわらず
ほとんどのばあい教科書を読むようにしか
理解できていないことがほとんどのようだ

教科書も細部まで吟味して
書かれていないところまで読みとれば
そこに嘘や誤魔化しなどがあることは明らかなのだが
それを最初から信じ込んでいれば
それにインプリンティングされてしまうことになる
そしていちどインプリンティングされると
そこから逃れることはむずかしくなる

- 『MONKEY vol.27／特集 ラジオの時』（スイッチパブリッシング 2022/6）

（柴田元幸「ラジオドラマの時代」より）

「今日の人々が何はなくともスマホをオンにするように、人母とが何はなくともラジオのスイッチを入れ、大統領も国民に語りかけるためにラジオを利用した。アメリカの一九三〇-四〇年代はそういう時代だったのであり、その中でラジオドラマは多くの人にとって生活の中の大きな一部だった。」

「一九三八年十月三十日の晩、アメリカの人々は、「侵略」に反応する態勢ができていた。

この年、ナチス＝ドイツはさらに領土を拡げていた。三月、ヒトラーはオーストリアを併合し、九月のミュンヘン会議でチェコスロバキアのズデーテン地方を獲得。いまだ「対岸の火事」ではあったけれど、ヨーロッパでのこうした展開はアメリカでも逐一報道され、世界規模の戦争が始まるのではと多くの人々が懸念していた。invasionという言葉は、いつにない切迫感をもって聞こえていたのである。

実際、放送の翌日、何も知らずに街を歩いていた、『宇宙戦争』の脚本を書いたハワード・コッチは、人々が興奮した様子で、“invasion”“panic”という言葉を口にしているのを聞いて、ドイツがまたどこか新しい地域に侵略したのか、とうとう世界大戦が始まったのだろうか。と思ったという。

十月三十日の夜八時から何人の人々が『宇宙戦争』を聴き、そのうちの何人が本当に火星人が攻めてきたと思ったか、其れについては諸説があるようだが、たとえば一九四〇年に『火星からの侵入ーパニックの社会心理学』を出版した世論研究者ハドリー・キャントリルは、およそ六〇〇万人のリスナーが番組を聴き、うち一七〇万人が事実だと思ひ込み、一二〇万人がパニックに陥ったと推定している。これらの数字には批判もあるようだが、翌日の全米の新聞第一面にこの「事件」に関する記事が大きく載ったことから見て、相当数の人々が異様な精神状態に至ったことは間違いあるまい。

「だって番組の最初に、これはH・G・ウェルズの小説のラジオドラマ化ですっていうアナウンスがあるじゃないか」と思う人もいるかもしれない。だが当時からザッピングの習慣は存在していた。八時から別番組を聴いておたリスナーが八時十分ごろダイヤルを回したら、いきなり「ラジオをお聴きの皆さん、ここでダンス音楽を一時中断し……」と聞こえてくるーしかもそれは、きわめてリアルな、完璧にラジオ番組を模したラジオ番組なのだ。「これはドラマじゃないか」と疑うようなメディアずれした感性は、おそらく当時まほど強くなかった。しかもすでに述べたように、人々の思考はあらかじめ「侵略」にチューニングが合っていた。そもそも途中から聞けば、火星からの襲撃の話だということもすぐにわかるとは限らない。ある調査によれば、恐怖に陥った人々のうち、これがエイリアンによる侵略だと理解した人は三分の一以下で、ドイツ軍侵略のことだと思ったり、あるいは侵略ということすらわからず何か大きな自然災害の報道だと思った人が大半だったという。いずれにせよ、多くの人々がパニックして家を飛び出し、闇雲に駆け回り、信号もスピード制限も無視して車を疾走させた。騒ぎをいち早く察したニューヨークの警察が、放送をやめさせようとコロンビアのスタジオに入ろうとしたが、番組はもうほぼ終了していて、結局放送は最後まで予定どおり行なわれた。

そしてすでに述べたように、翌日の各紙の一面には、この番組が引き起こした騒動を伝える記事が大々的に載った。「フェイクのラジオ『戦争』が全米を恐怖に「ラジオのリスナーらパニック 戦争のドラマを事実と勘違い」「上院議員電波検閲法を立案」……要するに世論は非難轟々、番組のディレクターでありプロデューサーのオーソン・ウェルズは謝罪を余儀なくされた。」

地図を描くという視点は
地上を上から見るものであり
実際に見えてはいないとしても
その視点で多くの地図は描かれる

地上を見て描く場合
高い所から見下ろせば
見える範囲の地図は描けるが
それが世界ということになると
それなりの高さが必要になる

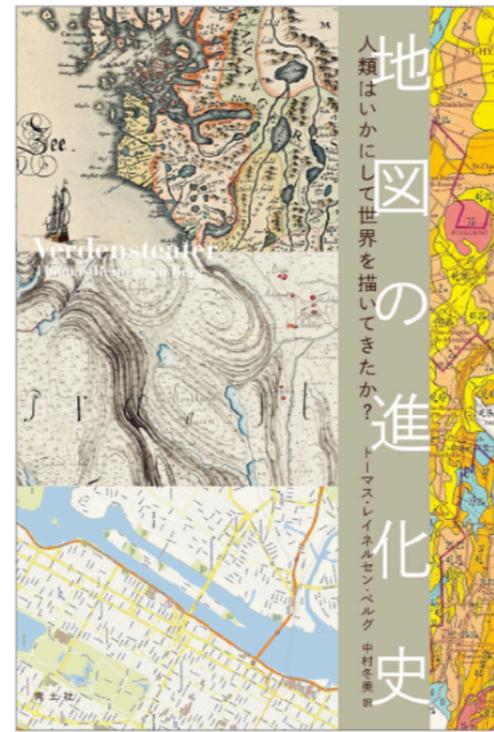
鳥瞰図という鳥の目線の名のついた言葉があるが
空から地上を見るという点では
翼をもって空を飛翔できる鳥が
象徴としても使われることは理解しやすい

「最古の世界地図」と呼ばれている
紀元前六世紀ごろのバニロニアの粘土板には
大地の不在の徴としての飛ぶ鳥が記されているという

古代において鳥は死者の靈魂を運ぶものとされ
またノアのハトなどのような役割をもって描かれてもいたように
鳥と大地の関係は地図と人間の関係と深く関わってきたようだ

プラトンの『パイドン』には
ソクラテスが地球の上から
地上を見ている様子が描かれているから
それで地図は描いてはいないとしても
体を離れた状態で地上を離れ
地球をまるごと外から見る事ができていたことになる

それはともかくとして
ノルウェーの作家トーマス・レイネルセン・ベルグの
『地図の進化史／人類はいかにして世界を描いてきたか?』は
古代地図からグーグルマップまでの歴史が紹介され
地図がどのような背景でつくられ使われてきたかなど
「地図」をめぐる興味深い話を読むことができる



そういえば地図といえば
メルワイデ図法・メルカトル図法・正距方位図法など
地図を描くさまざまな図法のことを思い出す
丸い地球を平面で表現しようとするとき
どうしてもひずみがでてしまうので
必要に応じさまざまな図法が考案されたのだ

1570年にオルテリウスによって
世界初の近代的な地図帳が出版された時代から400年以上経ち
現代ではナビゲーションシステムやグーグルマップのように
地上を上からみた世界各地の地図が
日々だれにでも活用できるものとなっている

これから400年後の地図がどうなっているのか
ちょっと想像しがたいところがあるが
ひょっとすればずっと後の時代において
世界の多次元性が常識ようになっていたとして
次元ごとの地図や次元間移動のためのナビゲーションなど
さまざまな地図のシステムができていられるかもしれない
そんなことを夢想してみる

その際にも古代において鳥が象徴的に描かれていたように
ひょっとしたら生の次元と死の次元を導くものとして
あらためて鳥のシンボルが使われることになるのかもしれない

- トーマス・レイネルセン・ベルグ (中村冬美 訳)
『地図の進化史／人類はいかにして世界を描いてきたか?』
(青土社 2022/3)
- 東辻 賢治郎 「地図とその分身たち ⑨鳥」
(群像 2022年 07 月号／講談社 2022/6 所収)

- トーマス・レイネルセン・ベルグ (中村冬美 訳)『地図の進化史／人類はいかにして世界を描いてきたか?』(青土社 2022/3)
- 東辻 賢治郎「地図とその分身たち🐦鳥」(群像 2022年 07 月号／講談社 2022/6 所収)

(東辻 賢治郎「地図とその分身たち🐦鳥」 より)

「「最古の世界地図」と呼ばれている紀元前六世紀ごろのパニロニアの粘土板————その記述にもとづく古代バビロニア的世界像の復元————によれば、世界の中心には海に囲まれたバビロンがあり、海の彼方にはそれぞれの方角に七つの島があった。真西近くにある第三の島は「翼のある鳥が飛ぶことをやめない」場所、すなわち鳥もまた到達できない地であると書かれていた。飛ぶ鳥とは大地の不在の徴であり、同時に目に見えない大地の存在の徴でもあった。鳥たちのはたらきは未知の場所について、あるいは何らかの先に到来するものについて伝えることだった。ノアのハト、オーディンのワタリガラス、吉報であるうが凶兆であるうが報せをもたらす鳥たちの挿話は枚挙に暇がない。

(…)

中世イスラム世界には大地を鳥の形象として理解する世界像があった。紀元九世紀ごろの歴史家イブン・アブド・アルハカムには鳥の頭が中国、右の翼がインド、左の翼が北コーカサス地方、尾が北アフリカにあたるという記述がある。実際に十世紀以降にアラブで描かれた「世界図」を見ると、そこには南を上にした円形の世界の中でアラビア半島を頭、アジアとアフリカを左右の翼、ヨーロッパを尾にもつ巨大な鳥としての大陸の姿がある。なぜ鳥なのかは解釈に委ねられている。ここでは形象の力によって見上げられるものと見下ろされるものが、つまり遠いものと近いものが結ばれている。それは鳥によって見出される世界ではない。鳥こそが世界なのだ。」

「鳥を見上げる人びとは、鳥は大地を見下ろしていると信じていた。それゆえに、さまざまな言語には鳥瞰、すなわち鳥の目に映ったものという言葉がある。しかしあのガラス玉のような、あるいはただの黒い点のような鳥の目を見上げて（パーズアイといえば細かな点の連続する模様のことだ）、そこに自分たちの世界が映しだされていると信じることは、そう信じること以外には根拠のない不合理でしかない。目の前にいる者の瞳の中に自らの姿を探し、相手の姿もまた自らの眼に映し出されていると信じること、それがありうべきことであり、しかも至福なのだと信じること。鳥の目が媒介していたのも、おそらくは信仰や愛と呼ばれるおなじみの虚構に数えるべきなのだろう。

私たちに関心をもたない鳥は、それゆえにモダニズムの詩人や芸術家の特権的な対象にもなりえた。近代の大都市はハトやスズメやカラスやカモメといった、大航海時代の探検家が「発見」するオウムやインコやゴクラクチョウとは対極的な、いわば没个性的な鳥類に執着する————あるいは執着されている。前者は地図に記されることもないが、後者はむしろその背景として地図に描かれさえする。それは、たとえば鳥がしばしばモチーフとして出現するウォレス。スティーヴンズの詩業の代表作とされる「日曜日の朝」の緑のオウム（あるいはインコ）に、その他の「鳥」とは明らかに異なる地位が与えられていることともどこかで通じている。しかしそれがいかなる鳥であれ、たとえば鳥と目を合わせたと信じるときに、あるいは地図に何かを幻視するときに、私たちが天球儀に手を伸ばすようにして鳥の目の内側から私たち自身に触れようとしていることを思い出している。」

(トーマス・レイネルセン・ベルグ『地図の進化史』～「訳者あとがき」より)

「本書は古代地図からグーグルマップまでの発展を描いた、地図にまつわる歴史の本です。多くの美しい地図が載っており、ページをめくり地図を眺めるだけでも楽しめます。地図ごとに描かれた背景と作製者の逸話が紹介されていて、地図とはどれほど通称、文化、宗教、領土の拡張、戦争、それに近代からは広告と結びついていて、明確な目的があって作製されているかがよく分かります。そのひとつひとつのストーリーが、臨場感たっぷりに書かれているので、読んでいると自分が歴史の証人になったように感じます。(…)

学校の世界史で習うような、プトレマイオス、オルテリウス、メルカトル、サーブ、ナンセン、クック船長など有名な人物があちらこちらに登場し、彼らの人物像や活躍について易しい言葉で書いてあるため、どうして彼らが地図や探検の世界で有名になったのかが腑に落ちます。」

(トーマス・レイネルセン・ベルグ『地図の進化史』～「プロローグ 世界は舞台」より)

「人は飛ぶことができるようになるずっと前から鳥瞰的に世界を見わたしていた。有史前より自分のいる場所を把握するため、上空から見ているかのように、周囲を描いていた。家や畑の岩石線画(ペトログリフ)は、人類史の早期から全体図が必要であったことを示す証拠だ。しかし現実には全世界がどうなっているのかを見ることができたのは近代になってからで、もっと詳しく言えば1968年のクリスマスだった。アポロ8号に乗って月の周囲をまわっていた三人の宇宙飛行士は、宇宙から地球を見た最初の人類になった。(…)

ギリシャの女神アポロンは、毎日太陽を後ろに乗せて、天空を馬車で駆けている。アポロ8号が月を周回する約400年前の1570年、フラマン人のアブラハム・オルテリウスが世界初の近代的な地図帳を出版した時、ひとりの友人が賛辞の詩を贈っている。詩の中でオルテリウスはアポロンの馬車に乗り、世界中を見下ろしている。

「光り輝くアポロンが馬車で天空を天翔る時、オルテリウスはその横に乗り、彼らの周りの国々と動物たちとを見下ろす」

オルテリウスの地図帳は一枚の世界地図から始まる。この地図では雲がカーテンのように左右に寄せられていて、世界の全体像が見えている。本を開けば私たちの前にNorugia（ノルウェー）、Barbaria（ベルゲン）、Suedia（スウェーデン）、Aegyptue（エジプト）、Mar di India（インド）、Marnicongo（コンゴ王国）、Iapan（日本）、Brasil（ブラジル）、Chile（チリ）、それにNoua Francia（ヌーベルフランス）が現れる。オルテリウスはこの地図帳を————世界の舞台と名付けた。この中に収録された地図は、私たちの目にちょうど舞台のように映るとオルテリウスが思ったからだ。

『ナルニア国物語』で知られるC.S.ルイスの『悪魔の手紙』（1942）はルイスの著書のうちでもっとも広範な読者を獲得しているという

（キリスト教や教会の影響が少ない日本ではどこか神学的なものの裏返しの思想的な内容はファンタジー的な物語性が希薄なこともあり読者は『ナルニア国物語』よりずいぶん少ないだろうが）

この『悪魔の手紙』は現役を引退した老悪魔のスクルータイプが人間をはじめて誘惑しようとする若い悪魔ワームウッドに手紙で助言を送るという内容である

悪魔を信じない人も
悪魔に過剰に関心を持つ人も
悪魔がいちばん唆しやすい対象であるという

老悪魔は若い悪魔に人間に悪の道を教えることではなく「きみに与えられている役目は、やつを混乱させること」だというように議論をすることでも証明したり論理的に説得することでもなく混乱させいわば中庸の道を辿らせないことを勧める

悪魔はもともと天使だった霊的存在が中庸をうしなってそれに応じた世界に棲みそこからじぶんの世界へと人間を誘う存在である

本書にはキリスト教的な世界観が背景にあるからそこに神秘学的な視点はないがその視点でいえば悪魔には二種類あってルシファー的な存在とアーリマン的な存在がある

ルシファー的な存在は霊的なものに傾斜させる悪魔でありアーリマン的な存在は物質世界に傾斜させる悪魔でありその中庸を図ろうとするのがキリスト存在である

だからイエス・キリストを信仰するといっても霊的なものに過剰に傾斜しすぎればルシファー的な悪魔の唆しを受けやすくなり地上的物質的なものに傾斜しすぎればアーリマン的な悪魔の唆しを受けやすくなる

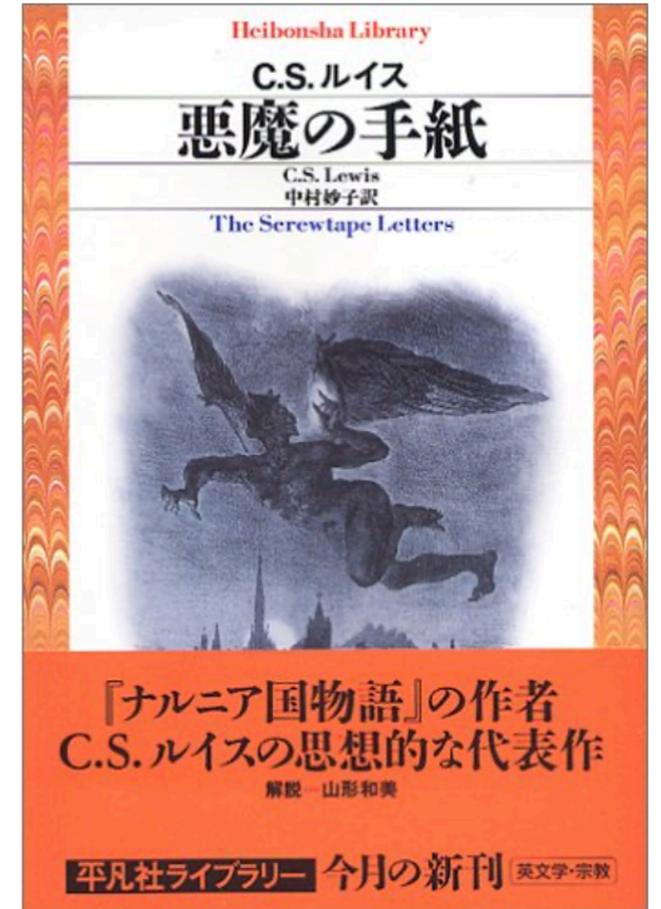
したがって人間を唆して中庸を奪えば悪魔の試みは成功することになる

悪魔の唆しを避けるためには霊的なものに興味をもちすぎるばあいは日々の生活を含む地上をしっかりと歩むのがいいだろうし日常的な実生活のなかに埋もれてしまいやすいばあいは逆に霊性のほうに目をむけるのがいいのだろう

その意味でいえば最初に示唆したように悪魔を信じない人も悪魔に過剰に関心を持つ人もそれだけで悪魔の恰好の餌食になりやすい

その意味ではじぶんが本書の老悪魔になったとしてどうしたら人間を誘惑できるかを考えることでむしろ逆にじぶんが中庸をなくさないでいられる重要なポイントが理解することができる

悪にもなり得る力をもちながらその力から自由でいること現代ではそのことがもっとも重要なことだろう



- C.S.ルイス（中村妙子訳）
『悪魔の手紙』
（平凡社ライブラリー 平凡社 2006/2）

■C.S.ルイス（中村妙子訳）

『悪魔の手紙』

（平凡社ライブラリー 平凡社 2006/2）

（「まえがき」より）

「悪魔について人間が考えようとするときに、おちいりやすい誤りが二つある。正反対の態度なのだが、どちらも間違っている。一つは、悪魔の存在をまったく信じない態度。もうひとつは、それを信ずるだけでなく、過度の、不健全な関心を寄せる態度である。どちらも誤っているのだが、態度としては正反対とっていいだろう。悪魔自身は人間の側のこの二つの誤りを喜んでいて、全社の態度をとる唯物論者をも、後者の、不健全な関心をもつ魔法使いをも、ひとしく歓迎している。」

（「第一信」より）

「ワームウッド君に。

きみはきみの担当の男にたいして読書指導を試み、その一方、例の唯物論者の友人としばしば会うように働きかけているらしいね。だが、それは少しばかり素朴にすぎはないだろうか。やつを論証に明け暮れさせておけば、〈敵〉の魔手から守りおおせる――きみはそう考えているようだが。やつがもう二、三世紀前の人間であれば。そういうことも可能だったかもしれない。そのころの人間はまだ、あることが証明されているときと、いないときとをはっきり区別しており、証明されていれば本気で信じた。彼らはまた思考を行動と結びつけていて、一続きの推論の結果にもとづいて、自分の生き方そのものを変える気が大ありだった。

ところが週刊誌や、それに類する他の武器の力を借りて、われわれはそうした態度をおおかた変えてしまった。きみの担当の男は幼いころから、互いに矛盾するいくつもの哲学が自分の頭のうちに一緒に跳ねまわっているのに慣れっこになっている。やつはいかなる教説についても、まず「真理」であるか、「虚偽」であるかといった観点に立たずに、「アカデミック」か、「实际的」か、「古くさい」か、「現代的」か、「慣習的」か、「非情」かを問う。したがって論証でなく、意味もろくにわからない術後の羅列こそ、この場合、きみの最良の味方なのだ。論証をさせずに、そうした術後を漠然と与えておけば、やつは教会に近づかないだろう。唯物論は真理だと信じさせようとしても時間の無駄だ。むしろ、唯物論は強烈だ、もしくはしたたかだ、勇気ある哲学、未来の哲学だと思わせるのだ。やつが心にかけているのは、そうしたことなのだから。

論証で厄介なのは、自分の議論の正しさを証明しようとしているうちに、戦場が知らず知らず〈敵〉の陣地内に移ってしまうことだ。〈敵〉にも論証はできるからだ。もっとも、わたしが提案しているたぐいの、本当の意味で実際のプロパガンダにかけては。〈敵〉は地獄にいますわれらの父に、はるかに劣っているがね。それは、ここ数世紀の歴史が明らかにしているとおりに。され、きみの担当の男に議論をさせているうちに、その理性がかえって目覚めてしまうことがあるし、いったん目覚めると、どんな結果が生ずるか、わかったものではない。きみはわれわれに好都合なように、特定の一連の思考をねじ曲げることができるかもしれない。しかしきみはまたこの間にやつの中に、普遍的な問題を考えよう、直接的経験の流れにのみ、関心を集中するのをやめようという、致命的といってもよい習慣が強められているのに気づくだろう。きみの任務はそれとは逆に、感覚的経験の流れそのものにやつを注意を引きつけることだ。それこそが生きているということ、「実生活」――リアル・ライフだと考えさせたまえ。「リアル」とはどういうことか、その点について自問させてはならない。

覚えていてほしい。きみの担当の男はきみとは違って、徹底して霊的な存在ではないのだよ。きみ自身はいまだかつて人間であったためしがないから（癩にさわるが、その点、〈敵〉はわれわれにたいして優位に立っている）、彼らがどんなに日常的なものの圧力に屈しやすいかを悟っていない。

（…）

何世紀の前にわれわれが人間のうちに作動させたプロセスのおかげで、人間は見慣れたものが目の前にあるあいだは、見慣れていないものをほとんど信じられなくなっている。彼らがいつも物事の当たり前さを実感するように働きかけたまえ。とりわけ科学を（えせ科学でなく、敵として実在する諸科学を）キリスト教にたいする防衛手段として用いようと試みてはならない。そうした諸科学は人間に積極的な影響を与えて、触ることも、見ることもできない実在について考えることを奨励する。現代の物理学者のうちにも〈敵〉に寝返った悲しむべき実例がいくつかあった。きみの担当の男が科学をかじりやたがるならば、経済学というか、社会学に関心を集中させて、やつらの信奉する「実生活」から離れさせないようにさせるのだ。だが何よりいいのは科学書を真剣に読ませるかわりに、自分は消息通だと思いがらせ、たまさか聞きかじったり、読んだりしたものを、まるで「現代の科学的研究の成果」であるかのように思いこませることだ。

忘れないでくれたまえ。きみに与えられている役目は、やつを混乱させることなのだよ。きみら若い悪魔連中がしゃべるのを聞いていると、悪魔の本務は教えることなんじゃないかという気がしてくるのだがね。

きみを愛してやまない叔父
スクールティプ」

無限の話には終わりが無い
無限について考え始めると終わりが無い
想像力も無限の前では力尽きてしまうが
無限にはやはり終わりが無い

宇宙論における無限の話も
数学における無限の話も
とてもむずかしく
どこまで理解できているか心許ないが
無限の話というだけで
聞き耳をたててしまう

どうしてだろう

もちろん無限なんか関係ないと
気にしないで生きて行くことはできる
簡単なことだ
むしろ無限について考え続け
論争し続け
心を病んだりもする人のほうがずっと少なそう

ぼくのように無限と名がついた本をみつけると
気になって仕方がなくなる人間のほうが少なそうだが
それでもある意味「業」のように
「無限」は「人間の心につきまってきた」

どうしてだろう

おそらく人間は
「意味」にとらわれて生きているからだ

「意味」がどこからくるか
実際のところわからないのだが
「意味」がやってくると
その「意味」は実体化してくるのだ

そしてその「意味」が与えてくれる世界のなかで
生きて行かざるをえなくなる

逆にいえば「意味」を失うと
ひとは「世界」を失ってしまい
ときに「生きる意味」を失って
死を選んだりすることもある
もちろん「意味」に縛られすぎて
死を選ぶこともあるだろうが

ある「意味」を特定しようとする
その「意味」はやがて矛盾を孕んでくることにもなる
「意味」は決して閉じてはいないからだ

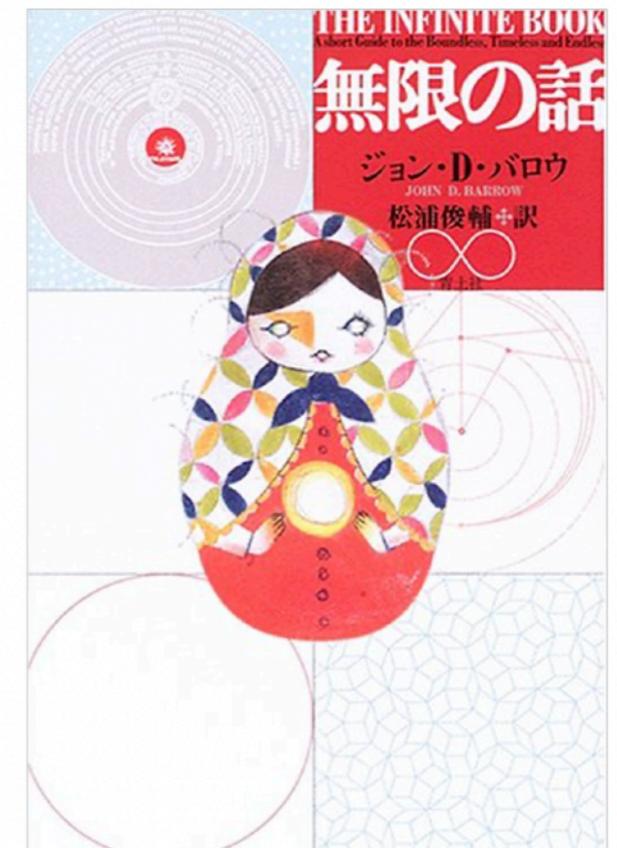
科学者はその探求するテーマにおける「意味」を
さまざまなかたちで理論化し実用化したりもし
それがあつた種のパラダイムとして
ある時代をつくりもするが
やがてどこかで矛盾や限界に突き当たり
それを超えていけるような理論を見出そうと奮闘する

「意味」は意味づけられることで
その世界がつくりだされるが
「意味」はいわばどこか無常なのだ
「意味」は「意味」を超えてゆこうとする

そんなことを考えるとすぐに思い浮かぶのが
「無限」という「意味」だ

以上は本書の論述をほとんど無視した話になっているが
「無限の話」は「意味」との無限の格闘
格闘というよりは遊戯といったほうがいいかもしれない

無限について考え始めると終わりが無い
そのように「意味」について考え始めると終わりが無い
考えるということは「意味」をめぐる遊戯だからだ
「意味」をはなれては生きていけないが
だからこそナンセンスという「無意味」が清涼剤にもなる



■ジョン・D. バロウ（松浦俊輔訳）『無限の話』
（青土社 2006/3）

■ジョン・D. バロウ（松浦俊輔訳）『無限の話』（青土社　2006/3）

「無限は何千年も前から、人間の心につきまどってきた。神学者に対しても、科学者に対しても、それを理解してみると迫ってきた。何かの大きさに切り分けられるか？　いろいろな形や大きさがあるかどうかつきとめられるか？　人間による宇宙の記述から排除したいのか、そこに迎え入れたいのか、はっきりさせてみる――そう迫ってきた。無限は問題なのか、答えの側にあるのか。

それは差し迫った問題でもある。物理学者の万物理論探しは加速しているが、これはそもそも、無限に対する姿勢によって導かれてきた。無限が姿を見せるのは、何かの警報になっていて、答えに向かう道筋で、袋小路に入り込んだことを知らせるものだった。スーパースtring理論が熱烈に歓迎され、支持されたのは、それが以前の理論にふりかかっていた無限大の問題を、巧みに消したことによる。

その刺激的な新試論は、物質が無限に分割できると期待していいかどうかについて、判断をつける仕事を残す。われわれが見つけるどんなものの内部にも、ロシアの入れ子人形（マトリョーシカ）がどこまでも続くように、必ず、もっと小さい、もっと基本的な粒子が見つかるのだろうか。それとも限界があり、最小の「もの」、最小の大きさ、最短の時間があって、そこで分割は打ち止めになるのだろうか。はたまた、世界が織り上げられる元になる根本的な実体は、実はそもそも、小さな粒子ではなかったりするのだろうか。

宇宙論学者にも、それに独自の無限に関する問題がある。宇宙論学者は、何十年も前から、時間と空間をもった宇宙の始まりは、「特異点」という、温度、密度など、ほとんど何もかもが無限の大きさになるところだと考えて満足していた。しかし、重力と量子は、本当に無限大を許容するのだろうか。無限大が現れるのは、成功のしるしなのだろうか、それとも失敗のしるしなのだろうか。無限大は、ジグソーパズルのピースがまだ十分見つかっていないことを知らせる合図なのだろうか。それとも、宇宙の始まりや終わり、ビッグバンやその正反対のビッグクランチの瞬間といった、究極の問題に対する答えに不可欠な部分なのだろうか。

宇宙論学者は他にも奇妙な無限大について考えている。未来が無限に続く可能性だ。宇宙は永遠に続く道筋の上に乗っているのだろうか。「永遠」とは何を意味するのか。性命は、形は変わっても、永遠に続くのだろうか。それから、もっと人間的な水準で言えば、われわれが永遠に生きるとは、何を――社会的、個人的、精神的、法的、物質的、心理的に――意味するのだろう。

現実無限大はあるか、数学者も、この問題にむかわざるをえなかった。この問題点は大きくて、数学者がつきつけられた中でも最大の問題だった。わずか七〇年前、数学者は、無限大の意味をめぐって内戦状態になり、多くの死傷者と怨恨を残した。数学から無限大を追放し、数学の境界を、無限大を現実の「もの」と扱うことをいっさい排除するうように定めなおしたいと願った人々がいた。無限大を数学から追放しようという試みのせいで、廃刊になった雑誌があり、追放された数学者もいた。

あらゆる騒動の元に、ある一人の人物の研究があった。ゲオルク・カントールという天才が、ある無限大の逆説について、その理解のしかたを示した。その三〇〇年前、ガリレオが最初に特定していた問題だった。無限集合の正体とは何か。そこから何かを取り除いても、残りはまだ無限だと言えるのはどういうことか。ある無限大が別の無限大より大きいということがありうるのか。究極の無限大があって、それよりも大きいものは、構成することも考えることもできないということなのだろうか。それとも、無限大はどこまでも進むのだろうか。しかしカントールは、自身の天才の成果が、数学の中に収まって、相応の評価を得る部分となるのを見るまでは、生きられなかった。無限の数学に反対する有力者たちに邪魔され、また足下を危うくされ、長い間数学を断念し、鬱病など精神の病に苦しみ、最後は療養所でひとりで亡くなった。数学の忘れられた英雄の一人、才能ある芸術家で、簡単に言えば天才だった（…）

神学者は、古代も近代も、その教理や信仰に潜む無限大の意味を解そうと、苦労を重ねてきた。神は無限か。神は、すべての正の数の一覧のような世俗の無限大よりも、もっと「大きく」なければならないのではないか。宗教はそれぞれ無限大をどう解しているか、それは脅威と見なされるじよか。それともさらに大きなものがあることの表れなのか。カントールはまったく予想外の答えを出す。

ゼノンに始まる古代の哲学者は、いろいろな方面で、無限大の逆説につきあたった。今日の哲学者はどうだろう。現代の哲学者は、どんな問題で悩んでいるのだろう。本書では、有限の時間で無限回の作業を行うことは可能かという問題を考える、科学と哲学の界面にある活発な議論の対象について、いくつかの例を取り上げる。現実のコンピュータは、スーパータスクという、無限回の処理を含む計算を有限の時間で完了するという課題を実行できるか。もしできたらどうなるか。もちろん、こんな単純な問題は、哲学者の手に入ると、もう少し明らかにしなければならないことがある。「可能」、「課題（タスク）」、「無限」、「数」、「有限」、さらには「時間」とはいったいどういう意味か。

現代科学を広い範囲にわたって巡っていくにつれて、無限に関する奇妙な問題群に遭遇する。宇宙は有限か無限か。われわれは永遠に続いて行くのか。過去は無限なのか。無限の宇宙の中で何かが起きることはありうるのか。コンピュータが解くのに無限の時間がかかる問題はあるのか。その問題はどのようなものか。

たいていの人は、無限と境界がないことを同一のことだと考えている。面白いことに、両者は同じではない。玉突き将球の表面のように、有限でも境界がまったくないものはある。蟻は球の表面をどこまで歩きまわっても、端に遭遇することはない。曲がった空間はいろいろあるが、無限の曲率で曲がると、宇宙はどうなるか。アインシュタインは、宇宙空間は曲がっていることを示したのではなかったか。すると、そのことは宇宙についてどういうことを教えてくれるのか。

時間が有限でも終わりが無いという、変わったこともある。われわれはたいてい、時間を自分の前に延びる直線として考えている。時間はまっすぐに見える。どんな出来事も、何らかの他の出来事の未来にあるか、過去にあるかだ。残念ながら、宇宙はそれほど単純ではない。前後に並んだ兵士が行進しているとしよう。しかしこの兵士の列を円形に行進させれば、誰もが誰かの前であり、かつ後ろとなる。もはや順番は成り立たない。時間がこのような意味で環状になれば、時間旅行が生じうるようになり、いろいろと奇怪な逆説が考えられる。誰かが本書の説を読み、時間をさかのぼって、この本を書いた私に、一語一句、書かれてある通りに教えてくれたとしたら、この本のためのアイデアはどこから来たのだろう。あなたはそれを私から得たが、わたしはそれをあなたから得た。これは無から何かが生まれたように見える――この宇宙と似たところのある話だ。」

ウクライナ戦争について
現在理解していることにいちばん近い内容が
エマニュエル・トッド
『第三次世界大戦はもう始まっている』で語られている

おそらくこうした視点は
たくさんの情報や思考力がなくても
激しく偏ったメディア情報から離れ
さらにじぶんの思い込みを横に置いて
じぶんなりに歴史や地政学等も含め
ある程度調べ理解しようとする気持ちさえあれば
基本線のところでは得られるのではないかと思えるのだが
メディアはここ数年の事象なども含めあいかわらず
「見せない」「考えさせない」「言わせない」
という態度を崩していないようだ

エマニュエル・トッドは現在
フランスメディアが冷静な議論を許さない状況の中
フランス国内ではウクライナ戦争について
公に発言することを控え
トッドにとってまだしも“安全地帯”である
日本で取材を受けることにしたということだ

日本には「まだしも」
耳をひらく読者がいるだろうことに
すこしばかり驚いているが
実際のところひらかれているのではなく
ヨーロッパとはかなり離れた「蚊帳の外」にいるため
ほとんどがバイアスに満ちた報道のなかでも
「冷静な議論」に耳を貸すことも可能だということだろう

ウイルスに関してもそうだが
今回のウクライナのことにしても
それらに対する「思考」の仕方について
いろいろ考えさせられることがたくさんある

人間もある種「関数」のようなもので
なにかをインプットすれば
その人間ならではの「解」が導き出されるところがある

それまですごい知性と感じさせてくれた方も
事件が起こったときのアウトプットを見れば
その人物がどんな「関数」として
「思考」しているかが見えてくるところがある
それまでその知性に驚かされていた人も
そうしたときには驚くほど稚拙になったりもする

これまでエマニュエル・トッドについて
あまり知らずにいたので一年半ほど前にでた
『エマニュエル・トッドの思考地図』という
日本だけで刊行された著書を読んでみることにした

エマニュエル・トッドは
哲学者のような「思考」はしていない
むしろ哲学者のように頭のなかだけで「思考」することを拒み
多くの必要な情報のなかから最適解を見出そうとする

エマニュエル・トッドは知性には
「処理能力のような頭の回転の速さ」
「記憶力」
「創造的知性」
という三つの種類があるというが
創造的知性といっても「無」から創造するようなものではなく
「すでに手元にあるデータを説明する、
あるいはかたちづくるために脳にあるさまざまな要素を
自由に組み合わせ、関連づける」ことを指すという

きわめて実地的な「知性」であり「思考」なのだ
それは往々にして霊的な事象に対しては拒否的に働き
エマニュエル・トッドにしても例外ではなさそうで
こうした「知性」や「思考」が欠けているところでは
実際のところ神秘学的な思考は成立しないところはあるものの
薔薇十字的な態度というのはある意味エマニュエル・トッド的だ
決して机の上で抽象的に概念をこね回すような哲学ではない

哲学的思考が不要だということではない
生きた哲学的思考を可能にするには
実地的な知性・思考もあわせて必要だということだ



- エマニュエル・トッド（大野舞訳）
『エマニュエル・トッドの思考地図』
（筑摩書房 2020/12）
- エマニュエル・トッド（大野舞訳）
『第三次世界大戦はもう始まっている』
（文春新書 文藝春秋 2022/6）

必要なのだが
実際のところその両立は困難なところがある
その両立ができないものかという試みもあり
個人的にも数十年続けている生活のための即物的な仕事と
それとはまったく無関係であるこうした思考訓練を
コンスタントに両立させようとしているものの
まったく別のOSを切り替えながら働かせるようで難しい

もちろんほんらいてきには
その両者は別のものではないはずのだが
それが統合されるようになるまでには
まだまだ果てしなく長い訓練が必要のようだ

しかしときにこうした
じぶんとは少し離れた思考方法をとる有益な視点を知ること
両者の橋が少しだけ架かったような気がするときもある

- エマニュエル・トッド（大野舞訳）『エマニュエル・トッドの思考地図』（筑摩書房　2020/12）
 - エマニュエル・トッド（大野舞訳）『第三次世界大戦はもう始まっている』（文春新書　文藝春秋　2022/6）
- （『エマニュエル・トッドの思考地図』より）

「「思考する」とはいったいどういうことでしょうか。こうした問いは、とても漠然とした抽象的なもので、いかにも答えようのないものに見えます。ある意味ではきわめて「哲学的」な問いかけとも言えるでしょう。

だから、ひょっとしたら「思考する」ことのプロは哲学者だろう、と早合点してしまう人もいるかもしれません。実際、哲学の歴史を振り返ったとき、名だたる哲学者たちが「知性をどう改善するか」「よりよく思考するためにはどうすればいいのか」といったことに思いを巡らせてきました。ちょうど「思考とは自分自身との内的対話である」というプラトンの言葉どおり、哲学者たちは多かれ少なかれ、机に向き合い、「考えるとはどういうことか」と自問自答を繰り返してきたわけです。

しかし私は、このような態度とはまったくかけ離れたところで思考してきた人間です。そもそも私にとって「思考する」とは、そんな抽象的なことではないのです。私は、思考のメカニズムをある意味で自然発生的なものとして捉えてきました。私は自分の頭から真実が生まれるなどとは思っていません。これは哲学的な思考態度とは異なるものです。（…）私は本能的に、そして育った家族の伝統からも、フランスの哲学には最初から疑問を持ち、否定的な立場でした。高校の哲学の授業でさえ、拒否することからスタートしているのです。

世界の名だたる哲学者たち、デカルト、カントなどは、私にとっては言葉遊びをしているだけなのです。なぜそんなに批判的かというと、哲学が現実から完全に離脱してしまっていると考えるからです。（…）

私にとって「思考する」とはプラトンが考えていたようなことではありません。そもそも、私は哲学者などではありませんし、正直に言ってしまうと「思考とは何か」という問いほど、私にとって厄介なものはないのです。」

「私が研究者人生で何をしてきたか。（…）それは他の研究者たちがしてきたことの延長線上にあるわけですが、混沌とした歴史のなかに法則を見いだすということでした。私が最初に見つけた法則は、家族構造の種類と政治思想の関係性です。また、時間の流れのなかで家族システムが複雑化していく法則は、私の研究の柱となりました。」

「私にとって、考える、思考するというのは、座って「よし、考えよう、アイデアが湧くのを待とう」ということではありません。言語とは何かとか、思考とは何かといったことを、椅子に座ってさあ考えようという哲学的な態度とは別のものだと思うのです。

私はそもそも学ぶことが大好きです。ですから、膨大な知識を蓄積する人間です。人々が私についてあまり知らないことは、私がこれまでどれだけ膨大な量の資料を読み込んできたかという点かもしれません。私は専門研究に限らず幅広い文献を読んできました。つまり私は考え込まないのです。

考えるのではなく、学ぶのです。最初に学ぶ。そして読む。歴史学、人類学などの文献をひたすら読み、そして何かを学んだとき、知らないことを知ったときの感動こそが思考するということでもあります。」

「私は知性には大まかに三つの種類があると思っています。まずは処理能力のような頭の回転の速さ、次に記憶力、そして創造的知性です。」

「創造的知性というのがあります。創造的知性とは、すでに手元にあるデータを説明する、あるいはかたちづくるために脳にあるさまざまな要素を自由に組み合わせ、関連づけることができる知性を指します。気をつけていただきたいのですが、創造というのは「無」から何かを生み出すことではないのです。」

（『第三次世界大戦はもう始まっている』より）

「私は、「西側メディアから情報を得ているヨーロッパ人」という立場で話をしています。ロシア語はわからないし、そもそも戦時下の情報は不確かなものばかりで、限られた情報しか持ち合わせていません。にもかかわらず、この戦争勃発の「以前」と「以後」が信じがたいほど“不釣り合い、であることは明らかで、まずそのことに私は驚いています。

この戦争は、「ウクライナの中立化」という要所からのロシアの要請を西側が受け入れていれば、容易に避けることができた戦争でした。

そもそもは解決が非常に簡単な問題だったのです。ロシアは、戦争前にすでに安定に向かっていました。自国の国境保全に関してロシアを安心させていれば、何事も起こらなかつたはずです。その意味で、ロシアの立場の萌芽ヨーロッパの立場より、シンプルでリーズナブルなものに私には見えます。

本来なら避けられたはずの戦争が始まってしまい、ウクライナの市民が虐殺される事態に陥っているのは、あまりに不条理です。

ここで私は、人間の本質について悲観的な考察をせざるを得ません。物事を“逆に、考える必要があるのではないか、ということ。つまり、ロシアではなく、むしろ西洋社会こそうまくいっていないのであって、この戦争がそれを物語っているのではないか、と。

西洋社会では、不平等が広がり、新自由主義によって貧困化が進み、未来に対する合理的な希望を人々が持てなくなり、社会が目標を失っています。この戦争は、実は西洋社会が虚無の状態から抜け出すための戦争で、ヨーロッパ社会に存在意義を与えるために、この戦争が歪んだ形で使われてしまったのではないか、と思われてくるのです。ひょっとすると、この戦争は“問題、などではなく、方向を見失った西洋社会にとって、ひとつの“悪しき解決策、なのかもしれません。

その意味でも、この世界戦争は、第一次世界大戦と似ています。」

「ウクライナの背後でこの戦争を主導しているのは、アメリカとイギリスです。この事実事態が、ドイツ、日本、そして他の国々に対して「果たしてこの戦争にコミットすべきなのか」と問いかけています。」

「まさにアメリカは、武器だけ提供し、ウクライナ人を“人間の盾、にしてロシアと戦っているわけです。」

「戦争が終わった時、生き残ったウクライナ人たちは、どう感じるのでしょうか。

少なくとも私がもしウクライナ人なら、アメリカに対して激しい憎悪を抱くはずです。というのも、「アメリカは血まみれの玩具のようにウクライナを利用した」ということこそ、すでに明らかな歴史的事実だからです。」

わたしが
わたしとして
生きているということは
感じることから始まる

仏陀はわたしたちのまえにひろがる世界を
十八界で表現している

眼・耳・鼻・舌・身・意の六根
その対象となる色・声・香・味・触・法の六境
六根が六境を認識する
眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六識
という感覚器官とその対象と認識の十八の界である

逆にいえば
感覚器官の働きがなければ
その対象を認識することができない
感じることをできなければ
世界はひらかれないのである
感じることで始めて
世界が現実化されるといってもいい

「概念は現実化することがなくても成り立」つけれど
「個性は概念として存在するだけでは」成り立たない
「個体的概念が神の知性の中にあっても、
個体がこの世界に素材するという出来事は成立」しない
「個体ということは、肉体において担う者が存在し、
その者が演じ遂行してこそ、成就する」のである

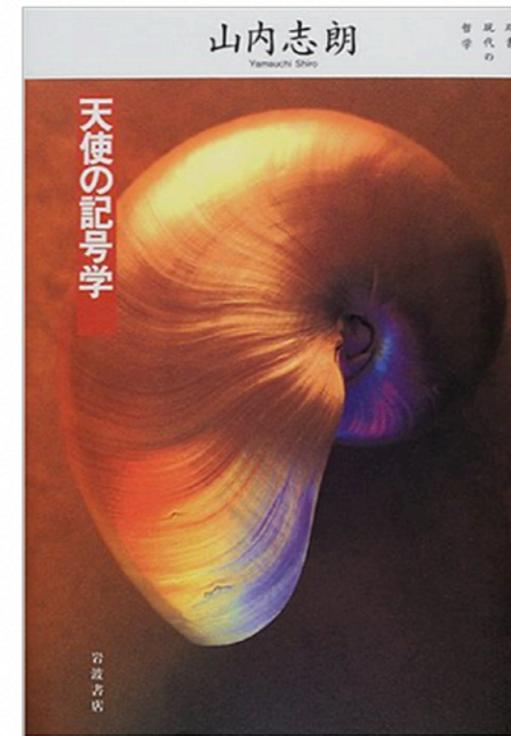
あたりまえのようなことだけれど
わたしが
わたしとして
からだをもって生きているということは
そのことから始まる

感覚は人を墮落させ誤らせもするが
「からだ」をもって感覚することなくして
人は「私」として生きることはできない

キリスト・イエスは
人の子として生まれたといわれるが
神的存在が体をもって感覚することで
人としての「私」として生きた
そのことそのものがエポックだったのである

「私」をからだや感覚から離れた実体として
とらえることもできるだろうが
こうして生きている「私」は
感覚器官とその対象と認識の十八の界のなかであって
「同一性を保ちつづけ、反復されつづけ」る
「ハビトゥス」としてとらえることができる

そしてその「ハビトゥス」としての「私」を
「感じること」のなかで
どのようにみずから導いていくか
つまり十八界をどのように豊かにしていくか
それが生きているということの意味でもある



- 山内 志朗 『感じるスコラ哲学／存在と神を味わった中世』
(慶應義塾大学出版会 2016/5)
- 山内 志朗 『天使の記号学』
(双書・現代の哲学 岩波書店 2001/2)

感覚をあまりに鋭敏にさせることは
病にもつながることがあるが
感覚をあまりに発達させず貧しいものにするのは
世界をそのぶん小さく閉じてしまうことになる

超感覚的な世界にしても
そのもとになるのは感覚世界であり
その感覚世界を広げるのは「私」である
「私」が「私」を越えるためにも
感じることを疎かにすることはできない

- 山内 志朗『感じるスコラ哲学／存在と神を味わった中世』（慶應義塾大学出版会　2016/5）
 - 山内 志朗『天使の記号学』（双書・現代の哲学　岩波書店　2001/2）
- （『感じるスコラ哲学』～「前書き」より）

「「感じること」、あまりにも身近で、中世であれ現代であれ、東洋であれ西洋であれ、共通する次元は、普遍性の次元です。イエスの感じていた痛みと、中世人が感じていた痛みと、現代人が感じている痛みは、同じではないでしょうか。嫌みや感覚の次元に宿る普遍性、共通性は、無媒介的であり、ありのままのむき出しの次元であり、そのまま中世のスコラ哲学の真相が込められるとは言えないにしても、そこに向かう心性にはどうしても、中世スコラ哲学の呼びかけを聞かずにはいられないのです。

近世の神学者マルブランシュ（一六三八―一七七一）は、「感覚の恩寵」という考えを述べました。それは経絡主義の現れではなく、感覚を通すのでなければ、外部からであれ内部からであれ自己の内なる根底からであれ、心に入り込むことはありませんし、そして心に定着することもないのです。感じることはとても難しいことです。私はそう思います。砂糖の甘さが感じられるときも無限の距離が跳び越えられているように思うのです。感じるとは、何も無い平原に一条の光が天から射し込むことに似ています。

当たり前の小さなことを一歩で跨いでしまうこともできます。その程度のものかもしれませんが、しかし同時に、感覚とはハビトゥス（「習慣、習態」とも訳されます）への前奏曲なのです。

感じることは、小さな声で呼びかけます。感覚は、快楽、悦楽、感応への入口として、非難の眼差しを向けられてきました。官能のために墮落し没落していった者はいつの時代にも数え切れません。人間の誠心をそれだけ膚にするものはとても危険なものです。しかし、危険の住まうところに救う力が育つのであれば、没落への機縁であると同時に救済する力を宿してはいないのでしょうか。高貴なものが身をやつして、卑しい姿で現れるものであれば、感覚に崇高なものが宿っていないことはありませんはずです。

なぜキリストは肉体を持つような仕方での世に現れねばならなかったのでしょうか。なぜ十字架で苦しむ必要があったのだろうか。人間としての現れであって、わざわざ人間としての肉体を持つ必要はなかったのではないか。

概念は現実化することがなくても成り立っています。命題が真理として成り立つために、充足する個体や事例が存在しなくても構いません。しかし概念を担う肉体がなければ成就しない事柄もあります。個性性は概念として存在するだけでは充足されることはありません。個体的概念が神の知性の中にあっても、個体がこの世界に素材するという出来事は成立していません。この世界に登場しなければ、感覚も痛みも経験する必要はないはずです。ところが個体ということは、肉体において担う者が存在し、その者が演じ遂行してこそ、成就するものです。世界や宇宙や個体の一回性の意味はそこにあります。個体の存在には感覚が随伴する、と思います。「随伴」とは、本質的契機としてかならずあるわけではないとしても、常に伴って存在しているものです。この感覚の随伴性＝偶有性を問うことがこの本の課題なのです。」

（『感じるスコラ哲学』～「第五章　ハビトゥスの形而上学」より）

「中世哲学を考える場合、私はハビトゥスこそ中心に来ると考えています。ハビトゥスの基体として身体が不可欠であり、その論点を探るために『天使の記号学』を書いたことがあります。

ハビトゥスに注目した人物としては社会学者のピエール・ブルデューもいました。もう少し遡るとプラグマティズムの元祖として有名なチャールズ・サンダー・パースもそうです。彼は中世スコラ哲学を熱心に研究した人です。当時、彼の中世哲学、特にドゥンス・スコトゥスのリアリズム（実在論）への傾斜は理解されませんでした。時代を先駆けたというよりも、遅く生まれてきた中世人として彼の思想は特異な光を放っています。彼は「哲学の用語は可能な限りスコラ哲学を模範にして作られるべきである」と言いました。そして、宇宙の全作用を一個の原理に還元したいという野心のもとで、それをハビトゥス（習慣）と捉えていました。一般法則と一般観念の形成、進化とハビトゥスを結びつけながら、ハビトゥス一元論を打ち立てたのです。私もハビトゥス一元論の立場なのですが、パースの思想は模範とすべき「普遍的ハビトゥス一元論（Panhexiologism）」というものになっています。

中世におけるハビトゥスは、アリストテレス『ニコマコス倫理学』の枠組みを踏まえ、そこに信仰・希望・愛という神学的徳が加わり、多少込み入った枠組みにおいて展開されます。（…）重要なのは、感覚とハビトゥスがいかに関わっているのかということです。」

「ならい・習慣はラテン語でハビトゥス（habitus）と言います。ハビトゥスとは日本語で言う習慣よりも奥行きのある言葉で、身体や精神を座としてそこに根付き、消滅しがたく備わっている能力のことであり、行為を結果として直接生み出す基体なのです。

つまり、ハビトゥスとは、不動の同一性を有するとは言えないとしても、「己を持する（se habere）」ための能力と言うこともできます。ハビトゥスとは語源 habere（持つ）の受動分詞ではなく（この意味でのhabitusは「所有されたもの」ということで「衣服」の意味になります）、se habere という再帰動詞の受動分詞なのです。ハビトゥスとは、己を持する能力、したがって「己＝身」を持することにつながる能力なのです。ということは、ハビトゥスこそ「人となり（個性）」を培う基盤になるのではないのでしょうか。

（…）

「私」ということは、もしそれを霊的な実体として捉えたいのであれば話は別ですが、ハビトゥスであると言うことができでしょう。反復学習によって沈殿し、表に現れつつけているもの、人となりとしてそこに常に現前化し、現実化しているもの、〈体〉によって覆われ隠されている「私」ではなくて、肉体を座としてそこに現在化し、安定した行動の「型」の中で、穏やかな同一性を保ちつつけ、反復されつつけるものが「私」であるとすれば、それが「ハビトゥス」の一種であることは当然のことでしょう。私は「私」とは、精神でも肉体でも脳でも関係でもなく、「ハビトゥス」であると考えたいのです。」

とくにここ数年

「短歌」をよく読むようになった
主に塚本邦雄の影響である
いまや塚本邦雄の言葉を目にしない日はないほどだ

ほとんど「短歌」のたぐいを
まとまってよむようなことは
古典もふくめてあまりなかったのだが
塚本邦雄を（個人的に）再発見したおかげで
時代を超えて同時並行的に
塚本邦雄の周辺やその後を含む現代と
古典から近代までの和歌が交錯しながら
ときには時代錯誤さえしながら読んでいる

「歌」の受容というのは
とくに現代においては多様である
それは音楽の受容にも似ている

これはまったく個人的な
おそらくかなり特殊な受容の仕方なのだが
ぼくにとっては「短歌」だけではなく
「音楽」もほとんどその時代的な順序が
シャッフルされたかたちで受容されてきた

むしろロックとポップスの時代の後に
現代音楽とジャズの時代が来て
その後クラシックや古楽の時代が来ることになり
今では上記の「短歌」と同じく
交錯かつ時代錯誤的な受容を行っている

ある意味ではこうした受容の仕方は
インターネット的な関係性の網目のなかの
時代やジャンルを越えたところでの受容の仕方と
通じたところがあるのかもしれない

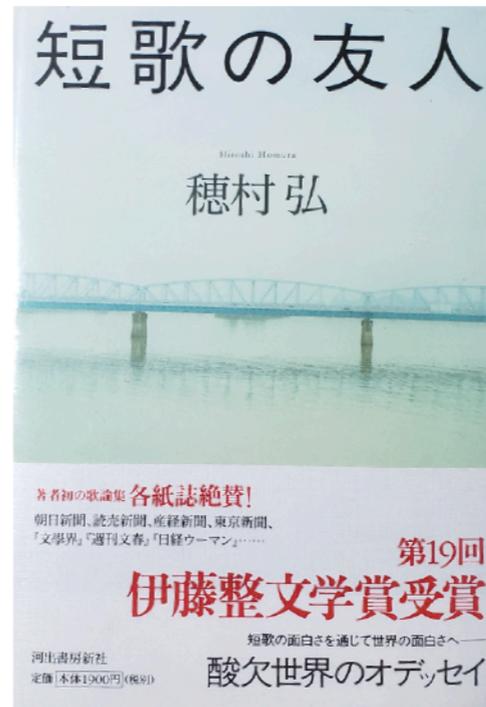
そんなこんなもあり
ぼくのばあいはオーソドックスなクラシックの前に
「現代音楽」という
いわば前衛的ともかつていわれた音楽があり
〈近代〉を代表する歌人としての斎藤茂吉の前に
〈戦後〉を代表する歌人としての塚本邦雄がいる

しかしあらためて古代から現代まで
時代を追いながら「歌」をみていくと
ある時代にはその時代においてしか
生きて機能しない表現があることがわかる

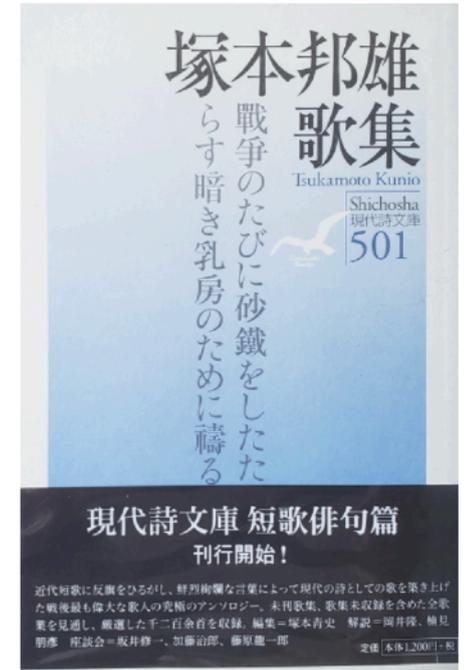
その時代にはその時代でしか作ることのできない
「新しいオモチャのような歌」があるのだ

いまや「現代音楽」はすでに
「新しいオモチャのような歌」
ではなくなっているように
「前衛短歌」とされている歌も
（個人的にはすいぶん惹かれるけれど）
「新しいオモチャのような歌」ではなくなっている

穂村弘『短歌の友人』は
15年ほどまえに刊行されたものだが
この15年ほどのあいだに
「新しいオモチャのような歌」は
つくられてきただろうか
いまもつくられているだろうか



- 穂村弘『短歌の友人』
（河出書房新社 2007.12）
- 『塚本邦雄歌集』
（現代詩文庫501 思潮社 2007.10）



ようやく「歌集」を読み始めた初心者にとって
現在つくられている短歌の世界の地図は
まだ見えてこないところがある

できうれば「新しいオモチャのような歌」が
続々と生まれてきますように

「新しいオモチャのような歌」かどうかは
まだわからないけれど
最近気に入っている歌集に
川野芽生『Lilith (リリス)』と
大森静佳『カミーユ』がある

気に入る歌集はなぜか女性の作者のものばかりだが
どうも女性の言葉のほうか
するりと入り込んでくるところがある
魂の深いところにとどく言霊の力があるのだろうか

- 穂村弘『短歌の友人』

（河出書房新社　2007.12）
- 『塚本邦雄歌集』

（現代詩文庫501　思潮社　2007.10）

（穂村弘『短歌の友人』～「第6章　短歌と〈私〉」より）

「〈近代〉を代表する歌人として斎藤茂吉、〈戦後〉を代表する歌人として塚本邦雄を想定するとき、我々は次のような印象を抱かないだろうか。すなわち塚本邦雄の歌は確かに凄い、でもどこかオモチャのようでもある、一方、斎藤茂吉の歌はやはり凄い、そして全くオモチャのようではない、と。この印象の違いはどこから来るのだろうか。

　斎藤茂吉の歌を支えているものを、私は生のかけがえのなさの原理だと思う。他人とは交換不可能な、一度限りの、かけがえのない〈われ〉の命の重みによって、その作品は保証されている。だが作品の説得力とは、そら自体が独立して存在することはあり得ず、常に読者に対する説得力ということではないはずだ。そう考えるとき、現在の読者の目に茂吉の歌が全くオモチャのようには見えず、凄いとしか感じられないとしたら、それは我々が〈近代〉的な生のかけがえのなさの原理に、今なお強く呪縛されていることの証とは云えないだろうか。〈近代〉という時間が、茂吉作品における生のかけがえのなさの原理を支え、今も支え続けているのである。

　一方、塚本邦雄の作品の核にあるものを、戦争への呪詛と言語のフェティシズムの原理として捉えてみる。生のかけがえのなさの原理を〈近代〉が支えたように、戦争のモチーフと言語のフェティシズムを〈戦後〉という時間が確かに支えたはずである。だが、それによって倦まれた成果が我々の目にオモチャのように映る部分を残しているとしたら、それは、生に対する影響力の点で、〈戦後〉という時間が生んだ最大のものすら〈近代〉の産物に及ばなかったということになりはしないか。

　オモチャ的な印象を負っているのは、主に言語のフェティシズムの要素だと思う、それによって短歌定型は空間化して言葉はモノ化した。〈戦後〉の空気の中で、我々は揃ってそのような言葉のモノ化にどっぷりと浸かりながら、しかし心からそれを受け入れ納得することはできなかったのだ。

　もう一点、時間の追い風の受け方ということで言えば、茂吉的な言葉が〈近代〉の理念に対して完全に従順であったのに対して、塚本的な言葉は〈戦後〉の理念に対して単純に順接でははあり得なかったという違いがあると思う。

　本当は（という云い方は無意味だが）子規も茂吉も、塚本同様に短歌をオモチャ化したはずなのである。すべての変革とは、その瞬間を切り取れば常にオモチャ化とイコールなのだから。ただ今日の我々の目にそのように映らないだけである。その理由は、繰り返しになるが、我々が今もなお〈近代〉のモードの内部を生きていることに拠る。

　〈近代〉や〈戦後〉の時間が生み出す磁場には、そのときどきで明らかに強弱の変化がある。比較すると、やはり我々は〈戦後〉の理念や言語のフェティシズムの中を生きる以上に、生のかけがえのなさの原理を生きていると思う。ここ十年ほどの間にその傾向は一層強まっているように感じる。（・・・）」

「三つの時間の中で〈今〉はもっともわかりやすい。どのような時代のどのような人間も〈今〉を生きるしかない。〈今〉とは常に生の特異点なのである。だが、我々の〈今〉には、その上にさらに特別の意味が付加されるのではないか。〈近代〉や〈戦後〉のような、いや、そうした日本固有の時を離れて、もっと大きな意味で特別な時間になる可能性がある。

　ひとつには情報革命に絡んだ動きが挙げられる、インターネットには確かに未来を生きている感覚がある。さらに我々の〈今〉には「もっと大きな意味で特別」なことがある。それは、人類の終焉の生起を生きる、という意味である。人類史上もっとも幸福で、しかし心のレベルとしては最低の生を生き、種の最期に立ち会おうとしている我々の〈今〉が特異点にならないはずがない。

　我々は新しい歌を作らなくてはならない。新しいオモチャのような歌を。それは人間が存在しない世界に向けての歌になるかもしれないのだから。」

（穂村弘『短歌の友人』～「第7章　歌人論」より）

「（塚本邦雄）の作品世界の本質には、「戦後」的な喜びと快楽に満ちたレトリックによって「戦後」の流れを撃つ、という二律背反があったと思う。「戦争」への憎悪、及び「戦後」的なものへの違和を詠い続けた塚本邦雄は、その表現面の特質において、確かに「戦後」の短歌表現の起点でもあったのだ。

　塚本作品のアンビバレントな波動の強さに、「戦後」に首まで浸かった私たちは怯え、混乱しながら、さらに惹きつけられていった。人ではないく歌そのものを直にみる選歌眼の鋭さも驚嘆的だった。（・・・）

　だが、長い時間の流れの中で、塚本自身の内なる呪詛は徐々にその生々しさを失っていったように思える。おそらくはその反映として表現は機械的な繰り返しの印象を帯びるようになった。多彩なレトリックは対象を撃つための武器から転じて超高度な玩具に変質したように感じられた。始めからオモチャの言葉で遊んでいた私は生きを呑んでそれを見つめた。

　塚本邦雄はモチーフと表現の両面から（その二律背反性をも含めて）、まさしく「戦後」を象徴する歌人だと思う。彼の死によって「戦後」は終わった。後に残されたのは「戦前」とも「戦争」とも無関係な、無重力時間としての「戦後後」である。

　今、私たちが目の前で手をひらひらさせると、そこには重力も方角もない世界。武器どころかオモチャとしての言葉さえ溶けてしまうそんな場所で。私たちは、私はどんな歌を作ることができるのだろう。」

白川静によれば

「道」という漢字は
首を手を持って行くということであり

「古い時代には、他の氏族のいる土地は、
その氏族の霊や邪霊がいて災いをもたらすと考えられたので、
異族の人の首を手を持ち、その呪力で邪霊を祓い清めて進んだ。
その祓い清めて進むことを導といい、
祓い清められたところを道といい、「みち」の意味に用いる」
のだという（常用字解）

「道」は他の地域の人々や共同体とむすび
「その上を歩くことによって
世界各地に多様な文化や社会を創り出してきた」が

その「道」は決して自明のものではないことは
首を手を持って行くことが示しているように
常に他の土地との関係性をつくりだしながら
そのことでみずからをも変えていくものだということができる

変えるのは人と人の間だけではない

「われわれは世界のうちで無数の人やモノや事物と
対等な関係のなかで生を営んでおり」
「われわれが一步を踏み出すとき、
自己の身体は他者の身体やモノや概念からなる
環境中の諸要素とそのつど一回的な関係を取り結び、
道のアレンジメントの一部となる」のである

「世界を歩むとき、自己は道であり、道は自己である」

高村光太郎の詩のごとく

「僕の前に道はない
僕の後ろに道はできる」

世界を歩むということは
前にある道を辿ることではない
みずからが道となることだ

そうしてみずからを変え世界を変え
そこにさまざまなものが創られてゆく
もちろんそのことでまた同時に
さまざまなものは失われてゆきもする

老子は「道（タオ）」を説いた
その「道」が語りうるものでも
名づけうるものでもないのは
みずからが道となるものだからだろう
みずからと道は一なるものである

私が歩くと
それが道になる
道を歩むことは
みずからを変え
世界を変えるプロセスそのものである

良き道となることもあれば
悪しき道となることもあるだろうが
歩まなければ道はできない



■古川 不可知 『「シェルパ」と道の人類学』
(亜紀書房 2020/2)

■古川 不可知 『「シェルパ」と道の人類学』
(亜紀書房 2020/2)

(「第1章 道・歩くこと・環境」より)

「道は人類にとって原初の構築物のひとつである。道は離れた場所にある資源へのアクセスを確立し、人々や共同体のあいだにつながりを生み出す。(…)

さらに道と人類の歴史とは不可分の関係にある。道は社会を発展させるとともに社会は道を発展させ、われわれにとって自明な世界を形成してきた。これは必ずしも誇張した表現ではなく、たとえば現代の道路の上下には実際にその空間を利用して上下水・電力・ガスや情報通信の経路が敷設され、日々の生活を支えている。道はわれわれの生活そのものの存立と不可分であり、密接に絡みあいながら相互に展開してゆく。道を問うことはわれわれの生の基盤を問うことであり。移動という日常的な実践を通して、世界のあり方が構成されてゆく過程を捉えることなのである。

人類学が描き出してきた人々の実践もまた、その多くは道の上でなされたものだ。「〔贈与交換のために〕安心して移動するためには、少なくとも道路か道筋、もしくは海か湖が必要」(モース)である。そして道がなければ、そもそも人類学者は調査をおこなうことができない。

(…)

人々は環境中に道を作り出し、その上を歩くことによって世界各地に多様な文化や社会を創り出してきた。現在もわれわれは、高速道路にせよ横断歩道にせよ種々の道を移動することで生を営み続けている。道について思考するとは、人類学という実践の根底の部分に光を当てると同時に、われわれが日々を生きるこの世界の基盤を問い直すことなのである。」

「歩行と道とは不即不離の関係にある。だが道が近代性と結びつく一方、歩くことは良くも悪くも反近代的な実践とみなされてきたことから、二つのトピックが重ね合わされることはさほど多くなかった。(…)

歩くことを初めて人類学的な議論の俎上へ載せたのはマルセル・モースであった。(…)

またブルデューが指摘していたのは、歩行は文化によって規定されるのみならず、歩行が文化的傾向性を作り出してゆくことであった。(…)

歩行を通して人間は道を作り、周囲を探索するとともにその空間を作り変えてゆく。そしてその記録や記憶がまた新たな道を生み出すのである。」

「道は異質な他者と出会う場である(…)。その一方で、ともに道を歩くことは他者とのあいだにつながりを生み出すことである(…)。

場所を歩き巡ることはまた、集団の記憶や歴史を想起することである。そして歩行を通して知るのは、知識として知っている *savoir* ことを、身をもって知る *connaire* ことであり、それは単に過去を詳しく知るとどまらず、集団の未来について確信を抱くことでもある。あるいは逆に、移動と道の記憶が集団に深く染み付いている場合もある。」

「自己と周囲の区別がつかない生まれたての子供は、やがて周囲を探索することによって自他や事物の境界を策定し、対象が提供する意味への注意の向け方を身につけてゆく。このとき、注意の向け方が共同体によって異なれば、必然的にその対象のあり方は異なることになるだろう。「日本人」や「ネパール人」は、本当は *trail* や *path* であったり、あるいは *training* や *religion* であったりするものを誤って「道」と認識しているのではなく、それらは同様の身体経験と意味をもたらす固有の「道」として存在している。」

「道とは過去からの継起にある現在において選択可能な範囲の未来に立ち現れる。そして道は自己の身体と地面のみならず、他者も含めた環境中の諸物のアレンジメントであって、道は移動する身体に応じてそのつど別様に立ち現れる。」

(「終章」より)

「本書では一貫して事物の存在が関係的であることを主張し、自己の身体を含み込んだ環境中の諸要素がそのつど偶然的に取り持つ関係をアレンジメントと呼んだ。(…)

ポーターたちは重い荷物を頭に担いで前傾姿勢を取り、トレッキング客にとっては直線の登り道をつづら折りの道として歩く。高峰に登る「シェルパ」たちは装飾で身体を拡張し、外部者には垂直の壁にしか見えない氷瀑に「道」を見出してゆく。

(…)

歩くとは社会的な行為である。注意すべきは、インゴルドの主張によれば社会とは人間のあいだの関係だけではないことだ。

われわれは世界のうちで無数の人やモノや事物と対等な関係のなかで生を営んでおり、人間社会とはそのうちの一部を恣意的に切り出したものに過ぎない。そしてわれわれが一步を踏み出すとき、自己の身体は他者の身体やモノや概念からなる環境中の諸要素とそのつど一回的な関係を取り結び、道のアレンジメントの一部となる。世界を歩むとき、自己は道であり、道は自己である。」

なぜなのか

因果関係を
どのように説明するか

科学は科学の範囲で
因果関係を説明する
そして往々にして
それ以外の因果関係を認めない

なぜ病気になるのか

「科学としての医療は、人間の身体を自然の生態現象とみなす。
だから身体の異変である病気に対して、
それを引き起こす自然の原因が探し求められる」

そして「それ以外の因果関係の説明は
「迷信」や「誤解」として扱われる

そうした「迷信」や「誤解」とされるもののなかに
「呪術的思考」による治療もあるが

イギリスの人類学者メアリー・ダグラスは
「社会的身体と生理的身体との関係を論じ
「病むことと癒やすこと。

それはつねに自然と文化の交わりの中にある」としたように
病気は文化的なものでもあるのだ
いわゆる「未開社会」とされる社会の中には
それに応じた病気と治療がある

医療人類学の先駆者として
その分野を牽引してきたアーサー・クラインマンは
医療人類学と通文化研究は
「生物学とはまったく異なるかたちで
病気とヘルス・ケアをあらたに概念化していこう」とし

「生物医学的な還元主義と技術への固着は、
ヘルス・ケアの問題をうまく理解も処理もできない」
「医療専門職による病気の概念化は、
象徴的ネットワークである「病い」の理解には無力である」



- 松村圭一郎「旋回する人類学⑰病むこと、癒やすこと(2)」
(群像 2022年 07 月号 / 講談社 2022/6 所収)
- クロード・レヴィ=ストロース (大橋保夫訳)
『野生の思考』 (みすず書房 1976/3)

「医学、精神医学、公衆衛生の専門家は、
自分たちの重大な限界を認めて、
職業上要求している権利を大幅に縮小すべきである」
という大胆な発言をしている

実際「「生物医学的な還元主義と技術への固着」は
病理学的概念である「疾病」(disease)には有効でも
文化的概念である「病い(illness)」に対しては無理解なのだ

事は病気ばかりではない
病気にかぎらず因果関係は
物理的な因果関係だけで説明することはできない
そこには文化的背景や個人的な関係性の「場」
そこで生まれるさまざまな心理なども深く関係してくる

心理療法でもよく使われるたとえば
「親しい人が交通事故などで亡くなったときなど
「あの人はどうして死ななければならなかったのか」
という問いかけに対して
車にぶつかったからだというのは
答えたことにはならない
それにもかかわらず
科学的と称する見地からはそれ以外の答えは得られない

科学にもほんらいは
その背景に文化的要素はあるのだが
それが存在しないかのような
普遍的な認識として因果関係を説明しようとする
けれど科学が魔術から生まれたように
それもまたひとつの「呪術」であるとして
とらえてみることもできる

そうすることで
因果関係を多視点的多次元的なものとして
探求する可能性がひらかれるのではないだろうか

■松村圭一郎「旋回する人類学⑩病むこと、癒やすこと(2)」

（群像 2022年 07 月号／講談社 2022/6 所収）

■クロード・レヴィ=ストロース（大橋保夫訳）

『野生の思考』（みすず書房 1976/3）

（松村圭一郎「旋回する人類学⑩病むこと、癒やすこと(2)」より）

（松村圭一郎「旋回する人類学⑩病むこと、癒やすこと(2)」より）

「なぜいま私が病を患うのか。不幸に見舞われるのか。病気や災害など、人間が災いの原因を自問し、思い悩むのは、医療や科学が発達した現代でも変わらない。この原因論／災因論は、人類学の主要なテーマのひとつになった。

アフリカのアザンデ社会を調査したエヴァンズ=ブリチャードは、不幸の原因を妖術に求める態度に、ある種の「哲学」を見いだした。それは、不可知の自然現象を人間が介入しうる説明可能な出来事に変える。レヴィ=ストロースは『野生の思考』（一九六二年）のなかで、エヴァンズ=ブリチャードの文章を掲げ、ユベールとモースの言葉を引きながら、呪術と科学を次のように対比させている。

（※以下、引用）

呪術的思考とは「因果性の主題による巨大な変奏曲」なのであって、それが科学と異なる点は、因果性についての無知ないしはその軽視ではなく、むしろ逆に、呪術的思考において因果性追求の欲求がより激しく強硬なことであって、科学の方からは、せいぜいそれを行きすぎとか性急とか呼びうるにすぎないのではなからうか？

病院の医者は病気の診断はしてくれても、なぜいま私はそうなったのか、説明してくれない。原因がわからないことが人を不安にさせる。どこでどう間違ったのか、何が悪かったのか。いまなお私たちはその答えを必要としている。」

「科学としての医療は、人間の身体を自然の生態現象とみなす。だから身体の異変である病気に対して、それを引き起こす自然の原因が探し求められる。それ以外の因果関係の説明は「迷信」や「誤解」となる。病むことと癒やすことをめぐって、この点がくり返し論点となってきた。

そもそも人間の身体とは何か。イギリスの人類学者メアリー・ダグラス（一九二一–二〇〇七年）は、『象徴としての身体』（一九七〇年）のなかで、身体を象徴表現の視点でとらえ、社会的身体と生理的身体との関係を論じている。身体の生理的経験は、社会的範疇に限定されながら、社会に対する見方を支える。この二つの身体経験のあいだには意味の交流があり、それぞれが互いの範疇を補強している。

（…）

ダグラスは、この二つの身体の結びつきが狩猟採集民から高度に産業化した国民にも等しくあてはまると論じた。病むことと癒やすこと。それはつねに自然と文化の交わりのなかにあるのだ。」

「一九七〇年代、病気とその治療というテーマは重要な人類学の研究領域となる。あらたに誕生した「医療人類学」の教科書もこの時期に刊行されている。代表的な著作がジョージ・M・フォスターとバーバラ・G・アンダーソンの『医療人類学』（一九七八年）だ。フォスターらは、医療人類学を大きく生物医学的研究と社会文化研究の二つの流れのなかに位置づけ、それらを統合的に論じようと試みた。もともとと自然人類学では、進化における生態学的な適応戦略として病気と身体機能の関係を研究してきた。一方、「未開社会」を対象にした古典的な民族誌の研究は、呪術などの文化的な視点から病気をとらえてきた。

フォスターらは、生物学的適応と社会文化的適応の両側面にふれたうえで、どの社会に、医療システムがあり、それらを通文化的に比較研究する意義を強調している。そして医療システムの普遍的構造をあきらかにしようとする。たとえば、どんな医療システムの普遍的システムにも少なくとも患者と治療者がいて、病気の原因となる因果関係や治療技術についての知識体系（疾病論システム）とその知識を患者の治療や支援に役立てようとする社会制度（ヘルス・ケア・システム）がある。非西洋社会では伝統的な疾病原因論が残ってきたのに対し、西洋社会では疾病の原因を科学に求める傾向が支配的だ。それでも文化と無関係ではない。アメリカでは病気が細菌やウイルスによってもたらされると考えられている。病気を実験室や臨床での検査によって確証される生物学的にな病理状態とみなしているのだ。しかし文化的に病気をとらえると、病はまったく違ったものになる。

フォスターらは、病理学的概念である疾病（disease）と文化的概念である病い（illness）を区別すべきだという。（…）

欧米でも現代医学だけが利用されているわけではない。アメリカでは、オステオパシー、カイロプラクティック、鍼治療、心霊主義など、さまざまな民間療法が用いられている。治療法を変えることの経済的、社会的、心理的な利益がその負担よりも上回れば、人は科学的根拠を問わずに、あらたな医療システムを受け入れる。フォスターらは、こうして複数の医療システムを比較しながら科学と文化を架橋して論じている。」

「二〇世紀後半、国際的な公衆衛生への関心の高まりのなかで、医学の専門教育に人類学の知見がとり入れられるようになった。フォスターらは、そこで医学と人類学の研究とを統合する道を探ろうとした。それに対し、医学と人類学の明確な差異を協調したのが、医療人類学の先駆者としてこの分野を牽引してきたアーサー・クラインマンだ。

（…）

クラインマンは、医療とはそもそもひとつの文化システムであり、それをヘルス・ケア・システムとして全体論的に研究すべきだと論じた。この視点は、かならずしもフォスターらの議論と大きく異なるわけではない。クラインマンも、医療を通文化的に研究することが重要だと主張している。だが彼は、医療を社会的諸制度と人びとの相互作用のパターンを秩序づける象徴的な意味システムだと考えている。

（…）

クラインマンは、医療人類学と通文化研究は、生物学との対話の道を開きつつも、生物学とはまったく異なるかたちで病気とヘルス・ケアをあらたに概念化していこうと述べている。

（…）

クラインマンの問題意識の根底には、現代の医療専門職が医療分野の支配権を要求し、国家がそれを認めている現状への強い疑念がある。生物医学的な還元主義と技術への固着は、ヘルス・ケアの問題をうまく理解も処理もできない。現状では、社会科学の貢献がなければ、「疾病」でさえ適切に分析できず、医療専門職による病気の概念化は、象徴的ネットワークである「病い」の理解には無力である。とるべき道は、はっきりしている。「医学、精神医学、公衆衛生の専門家は、自分たちの重大な限界を認めて、職業上要求している権利を大幅に縮小すべきである」。

クラインマンの言葉には、どきりとさせられる。「医療専門職」が経済活動や生活様式にまで口を出すようになった時代にあって、医療人類学はどんな地平を切り拓こうとしてきたのか。次回もつづけよう。」

知性や理性は疲れるから

「愚の上に又愚にかへる」(一茶)のがいい

主体や比較は疲れるから

あらゆる差別を笑い飛ばし

「もの」が語り

「なり代わり変わり合う」存在であるのがいい

過去から未来へ向かう時間の無常は疲れるから

身心の無窮としての遊びを事とし

永遠の途中であるのがいい

それなのに

ひとは知性的であることを求め

かたちとしての道徳的を求め

「私」であることを主張し

ひとより優れていることを誇り

過去を悔いながら己の死を恐れ

時間に追い立てられるように先へと向かう

知ることは

みずからの愚かさの自覚と対であるのがいい

道徳的であろうとすることは

みずからのどうしようもなさとの対であるのがいい

「私」であることは

何者でもないこと

何者でもありえることとの対であるのがいい

優れていることは

くらべることのできないこととの対であるのがいい

死を恐れることは

生きることの喜びや恐れとの対であるのがいい

先へと向かうことは

時間の円環と螺旋との

遊びであることとの対であるのがいい

あらためて

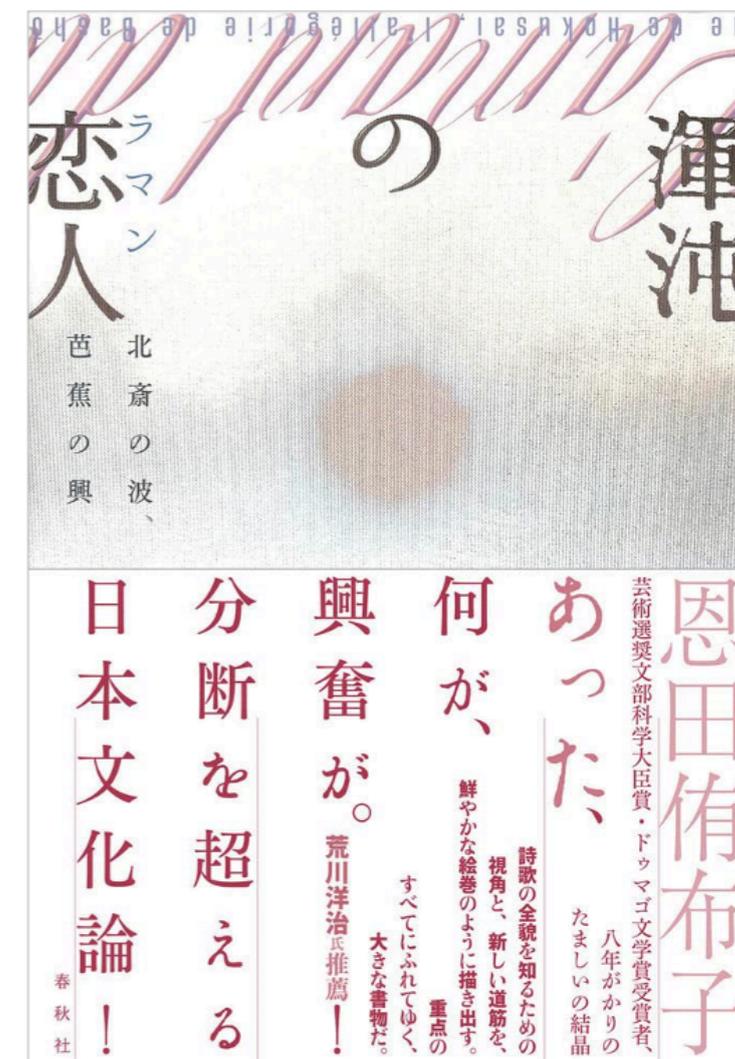
日本語に主語がないことを

「もの」たちが幸うくにであることを

(危険性を伴ってはいるものの) 幸せだと思ふ

そのかけがえのない美意識のなかを

これからも生きていけますように



■恩田 侑布子

『渾沌の恋人(ラマン): 北斎の波、芭蕉の興』

(春秋社 2022/4)

- 恩田 侑布子
『渾沌の恋人(ラマン): 北斎の波、芭蕉の興』(春秋社 2022/4)

（「第一章 身心と遊」～「I 身幅の思い／愚かさの自覚」より）

「西洋の美術は、ものをみる視覚とそれを認識する頭脳によるこびをもたらず。ヨハネ福音書の「はじめに言あり」が示すように、まず、ロゴスがある。では、日本ではどうだろう。「はじめに身（み）あり」ではなかろうか。あとから地味な顔をしてことばやロゴスがそろそろついてくるのではなかろうか。茶の湯の道具も北斎の組上絵も、ロゴスより先に、まず手に取り肌にふれる楽しみがある。それはひとり北斎にとどまらない。鈴木春信といい、喜多川歌麿といい、浮世絵はどれも頬擦りするほど近々と眺め入ってこそ、色つやにふるえる思いがする。いつも日本の美は、心とからだが一つとなったところに発しているのではなかろうか。

- 同時代人の一茶の俳句も、誰にも顧みられないささやかな身体感覚から生き生きと発想している。

門々（かどかど）の下駄の泥より春立ちぬ　『七番日記』

どの家の前にも、雨上がりのぬかるんだ土に、下駄の歯形がおどっている。思い思いの野放図な足跡が、やわらかな春泥のひかりの質感とともに迫ってくる。浅くにぶい歯形は、ちびてすり切れた古下駄のもの。歩幅のみだれた歯形はあわてものの足取り。大小たがい違いのむつまじいそれは親子が手を引いて通ったしるし。人々の足元で軽やかな音をたてる下駄には、泥のしずくが残る。一茶もまた、下駄に泥をはねあげて、ようやく寒さのゆるんだ町をゆく。泥跡や泥はねという、とるに足らないものに、江戸庶民のいのちの躍動がこもる。立春を迎えるよるこびが、これほど身体化されたのは、作者の目線が低かったから。一茶は選暦になって、〈春立（はるたつ）や愚の上に又愚にかへる〉と詠む。愚かさの自覚が肚に落ちたひとのゆたかな俳句である。

- 涼風の曲がりくねって来たりけり　『七番日記』

高殿の欄干によれば、涼風はまっすぐ額をなぶり、髪を梳きすかすことであろう。裏店住まいの一茶のところには、涼風は長い路地をぬけ、蚊柱をぬけ、夕顔棚の竹のほつれをぬけて、曲がりくねってやって来る。三つで母に死なれ、十五で江戸に出され、俳諧師として都で成功する夢も叶わず、ふるさとの柏原に帰りついてようやく妻を迎えられたのは五十二歳。晩年になっていた。曲がりくねってやって来たのは涼風ならぬこのわしだよ。紆余曲折ばかりだったな。暑さのなかでふと感じる一陣の涼風は、やわらかに苦労人のふところに飛び込み、鳩尾まですすいでゆくようである。

- うつくしや障子の穴の天の川　『七番日記』

季語は「天の川」で秋の句。「障子」は、ここでは冬の季語としては働いていない。五十一歳の一茶は夏から秋にかけれ長野の門人宅で病を養っていた。「七夕病中」の前書がつく。ずいぶん涼くなった。ひとりで虫の声を聞くともなしに聞いていると、夏の暑さと病に疲れた身は、ついうつらうつらとしてしまう。ひいやりした風が肩先に来て目が覚める。障子が破れて風にひらひらしている。障子穴の向こうはもうとっぷりと暮れている。穴をみたす闇に目が吸い込まれる。おや、無数の星がさんざめいているではないか。天の川が流れている。ああ、今夜は星祭りだった。彦星と織姫は鵲の橋を渡って逢うのだろうか。星の川に膝を濡らして、尻はしよりして行けたらいいだろうな。わが家とて、障子を貼り替える余裕はないが、貧乏もこんな宵はわるいもんじゃない。寝ながら星の恋を眺めていられるよ。障子の破れ穴に銀河をのぞく一茶の風流は、身体化された綺想ともいえそうである。

- こうして小さな俳句は身幅から広大な宇宙へ飛びたつ。」

- （「終章 水、呼び交わす」～「II 二股大根のほほえみ／横向きの達磨とともに」より）

「見立てのなりかわる精神は、聖俗、賢愚、あらゆる差別を笑い飛ばす。俳句では、江戸初期の貞門や談林の機知に頻用されたことから、現代俳句は一蹴すべきものと思うらしい。が、みなもとに立ち返りたい。詩歌ならば本歌取りにつながる技法であり、近世以降はさらに沈潜して、やつしの美を生むことになる。絵巻の思想にも、興（詩の六義）にもかかわるゆたかな精神の根を持ち、余白の切れを深くする。それらは主語をほとんど必要としない日本語において、人称の乗り換えや主体のなりかわりあう共感の土壌である。

その後背地ははるか『莊子』の遊の思想と万物斉同にある。「道」は「くそ、シヨンベンのもある（尿溺（しにょう）に在り）（『莊子』外編「知北遊篇第二十三」）と言い放つ水平と平等の思想は、「仏は糞かきべらだ（乾屎橛）」（『無門関』第二十一則　雲門屎橛）とする禅へまっすぐつながってゆく。

造物主を仰がないわたしたちにゴールはない。あるのは永遠の途中である。途上をいくさびしさに堪え、「さびしさあるじに」転ずるのが日本文化である。はてしない道は、雪舟の『慧可断臂図』のように、つねに現在進行形。そこには一瞬の懈怠もない。

ロジェ・カイヨワは、「遊びは何ものをも生み出さない。財産を生むことも、作品を生むこともない。それは本質的に不毛なのだ」（『遊びと人間』多田道太郎・塚崎幹夫訳、講談社学術文庫。一九九〇年）といった。わたしたちは身心の無窮を遊ぼう。遊びはあらゆる未知のものを生み出す。自由はいつもみずからの素のころから。若冲もうぶな遊びに生きた。あの二股大根も「なすべきことはみななしつつ」と微笑みつつ、なんとうぶなことか。

- わたしたちは菌（きのこ）、大根、蛇蝎、落花、そして地球の裏がわのひとつも、なり代わり変わり合う星の住人である。」

現代日本のマンガやアニメには
「魔法」「魔法少女」「巫女」
そして「異界」「他界」「転生」などをめぐり
それらの虚構的な物語のなかで
宗教的な表象がさまざまに使われながら
作られているものが多くみられる

作品には直接的間接的にニューエイジ的なものの影響を
受けているというのはあるだろうが
宗教的な表象によって読者が宗教化されるわけではない

「制作者は、多くの場合、宗教者や宗教団体ではなく、
マンガ家、アニメーター、制作委員会」であり
「読者アンケートの順位が低くなるとか、
視聴率が低迷すれば連載や放映は打ち切られる」ように
それらは読者に消費される世界である

もちろんマンガ家やアニメーターが
さまざまな宗教やニューエイジ的なものなどの影響から
作品を制作しているということはできるだろうが
それらが多く受容・消費されているということは
そうした宗教的表象が
好んで受容・消費されているということに他ならない
つまりはある種の社会現象となるような源や傾向性が
そこには存在しているということだ

そしてその世界は実世界とは異なる
虚構の世界であるとしても
そして物語のテーマが
「努力」「根性」「友情」「恋愛」「成長」
といったものであるとしても

それらのテーマが展開されるにあたって
宗教的表象が受け入れられているということは
かつての宗教的な受容とは異なった仕方だ
それらの影響を受けずにいることはおそらくできない

■石井 研士

『魔法少女はなぜ変身するのか／ポップカルチャーのなかの宗教』
(春秋社 2022/6)

現代では地域社会や学校教育や家庭における実生
宗教性が希薄化しているのに対して
高度情報消費社会におけるメディアとしての
アニメやマンガのなかで
さまざまな宗教的表象が
多種多様なかたちで受容されている
しかもヒット作品はコミックでも
数百万部数千万部も刷られたりするように
それらの影響を過小評価するわけにはいかない

そしてそこには日本人に特有な
アニミズム的なものや八百万の神への親和性が
多く影響していたりもするはずだ

「ポップカルチャーのなかの宗教」は
決してふつういわれるような「宗教」ではないものの
ある種のあらたな形での宗教的な知識や感受性が
大衆的なかたちで準備されているということもできそうだ

それらの影響を受けたその後が
いったいどうなっていくのかはわからないけれど...



- 石井 研士『魔法少女はなぜ変身するのか／ポップカルチャーのなかの宗教』（春秋社 2022/6）

「宗教研究者、とくに現代社会における宗教を考察する研究者の間では、アニメやマンガ、あるいはゲームに、「宗教」が頻繁に登場することはよく知られている。日頃接する学生さんがひじょうに狭い宗教領域（大抵はトリビア）について詳しくかったりすることもそう珍しいことではない。彼らは実生活では無縁な「イタコ」や「陰陽師」についてどこで知ったのだろうか。「生まれ変わり」「死後の世界」への関心はいったいどこで醸成されたのだろうか。家庭か、地域共同体か、学校での教育か。思い当たるのは「メディア」である。

アニメやマンガを素材にして、宗教的なテーマを論じることは十分に可能である。密教を主たる研究領域とする正木晃は、大学で宗教画を説明するのに身近なアニメ作品の利用が効果的として「風の谷にナウシカ」を用いている。予言、シャーマン、トリックスター、キリスト教の色彩学、貴種流離譚、陰陽五行などかなりの項目数である。それだけ「風の谷のナウシカ」には宗教的要素が詰まっていることになる。

他にも神話学者の平藤喜久子のように、現代のグローバル社会においてどのような神話は利用されているかを論じたり、古代メソポタミアを専門領域とする渡辺和子のように、宮崎駿が原作・脚本・監督した「崖の上のポニョ」を洪水神話から読み解こうとした事例もある。研究領域が現代社会と宗教ではなくても、自らの領域の知見に立ってポップカルチャーに見出される宗教性を分析することはそう珍しいことではない。かくいう筆者も、「攻殻機動隊」を使って高度技術社会における現代人の魂を論じたことがある。

A Iはロボット工学の中核的な最先端技術である。ロボットと宗教との関わりを考える上で想起されることに「機械の中の幽霊」がある。この言葉はイギリスの哲学者ギルバート・ライルがデカルトの心身二元論を批判するために用いた表現である。前者には直観、自由、分割不能、破壊不能そして自由意志という特権的な立場を与え、自己としての同一性の根拠も心にあるものと優越性を設定する。しかしながらライルは、我々は心と身体の両方をもつ存在としてあるのであって、私という存在は、私の身体と関連づけられてはじめて意味を持つと主張する。デカルトの主張は「機械の中に幽霊がいるという教義」（the dogma of the Ghost in the Maschine）であると批判し、人が肉体という機械の中に精神というゴーストをもっているかのように考えるのは誤りであると述べている。

「機械の中の幽霊」という表現は、その後アーサー・ケストラーがそのまま書名としたことで知られるようになった。ケストラーもライルの考え方を受け継いで、ホロンという全体概念を提唱している。

ところで、「機械の中の幽霊」は、現代日本のポップバルチャーにおいては、志郎正宗原作のマンガ・アニメ作品「攻殻機動隊」の元ネタとして知られている。「攻殻機動隊」の英語タイトルはGhgost in the Shell である。作品は、ライルのthe dogma of the Ghost in the Maschine をもじたものではあったが、内容はまったく異なったものだった。ライルやケストラーが心身二元論を否定し、人の総体的な存在様式を理解しようとしたのに対して、「攻殻機動隊」では、義体化しサイボーグ化していく肉体と、純粋化する自分（自意識や魂）はみごとに分離して描かれている。「攻殻機動隊」に登場するネットワークのゴーストは、明らかにデカルト的でオカルト的な心の概念を隠喩するテーマである。

現代日本社会におけるアニミズムの残存もしくは維持は、いろいろな機会に指摘される。

アメリカの人類学者ジェニファー・ロバートソンは、最先端ロボットのなかに神道の伝統が生きていると述べている。「日本のロボット開発が評価される理由は、その文化的・宗教的な歴史にある」のであり、神道では石や木などあらゆるモノに生命を吹き込むから「ロボットは生あるものとみなされ、日本の開発者はロボットに感情や良心をもたせられると信じている」。ロバートソンの神道理解が正しいかどうかは別として、日本人がロボットを単なる機械と見なしていないことは、他の多くの事例からも理解できる。（…）

こうした状況を「テクノ・アニミズム」という語を用いて説明しようとする研究者が複数存在する。奥野卓司は早くからテクノ・アニミズムという語を用いた研究者である。アメリカの社会学者アン・アリスンも、『菊とポケモン』において、いつでも携帯できる小さな機械「ゲームボーイ」「DS」を単なる道具とはせず、他者とのコミュニケーションツールとし、学習による自己向上に役立てようとする日本人を評して「テクノ＝アニミズム」とよんでいる。

（…）人型ロボットとして「鉄腕アトム」が生み出されたり。初音ミクがネットの世界へ拡散していったんのも日本ならではのこつのように思える。奥野やアリスンの指摘は、現代日本におけるアニミズムの存在を、再び指摘して見せはしたが、我々を取り巻く社会や日常生活がこれだけ変化したにもかかわらず、なぜそうした現象が維持されるのか、その理由が明確になるわけではない。なぜメディアの中に、多様な宗教性が見え隠れするのだろうか。

しかしながら、子どもの頃から見てきたアニメやマンガ、数多くのゲームソフトに「宗教」を意識したことがあるだろうか。（…）宗教学者が指摘するように、多くの宗教的要素が詰め込まれているとしても、そうした宗教性への関心が日常生活において高まるとか、身につくといったことは考えにくい。アニメやマンガを媒介にして何か超越的なつながりを感じるなどということがあるのだろうか。巫女や魔法使い、陰陽師はたんなるキャラクターであって、本格的な宗教的世界へ誘う存在ではない。宗教的と思われるテーマも、「努力」「根性」「友情」「恋愛」「成長」の前ではかすんでしまう。アニメやマンガを多く視聴する者が宗教的要素故に内省的な深まりを経験しているとか、精神的な困難の克服に役立てているというわけではないだろう。制作者は、多くの場合、宗教者や宗教団体ではなく、マンガ家、アニメーター、制作委員会である。読者アンケートの順位が低くなるとか、視聴率が低迷すれば連載や放映は打ち切られる。」

「本書の目的は、アニメやマンガといったポップカルチャーに宗教がどのように表象されているのかを考察することで、現代社会における宗教の意味の変容を理解することである。

（…）

実生活での宗教性の希薄化とは対照的に、ポップカルチャーにおける宗教性の表出は実に多種多様である。日常生活において、地域社会や村の古老から、学校教育で、そして家庭において伝統的な宗教性が継承されず、ましてや宗教団体に帰属することのない若者が、宗教に関する知識を有していることは確かである。明らかにその基盤は高度情報消費社会である。こうしたことを考えると、メディア、とくに若者の間で広く共有され、視聴されているアニメやマンガといったポップカルチャーにどのような宗教的テーマやキャラクターが見られるか、影響力の有無を考察することは、現代日本の宗教状況を理解するために不可欠な研究であるように思えてくる。」

平凡社の随筆シリーズ

STANDARD BOOKSの第4期の5巻目は

耽美派の詩人であり

医師でも画家でもあった

「木下杢太郎」（一八八五-一九四五）

耽美派の詩人というくらいしか

知らずにいたが

鷗外全集を編纂し

ハンセン病根絶に献身した

医師でもあったことを知る

解説にあたる「栞」は

作家の宮内悠介が担当しているが

それによれば

木下杢太郎は「ユマニテ (humanité)」の人

人類・人間性・古典学などを指す「ユマニテ」は

「杢太郎自身を象徴するもの」であり

木下杢太郎について語られた「ユマニテ」について

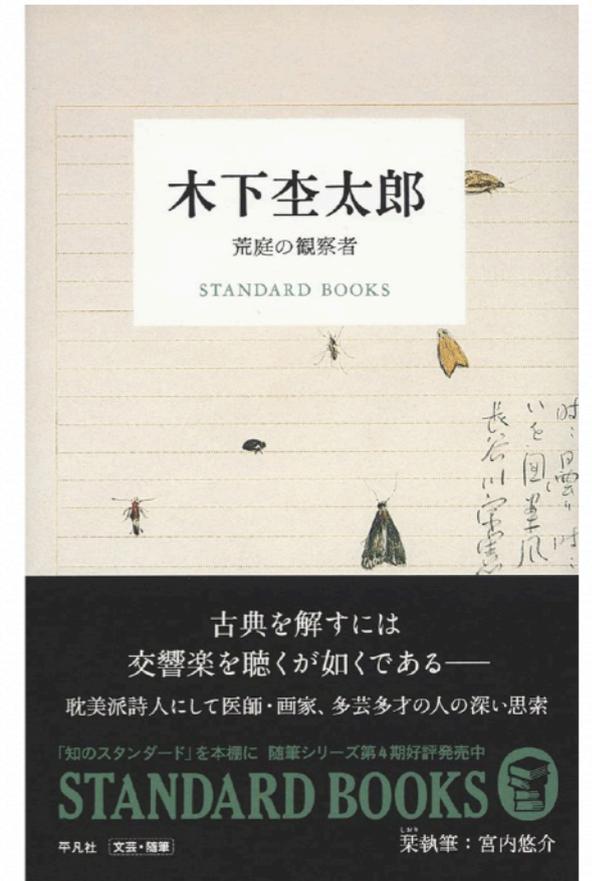
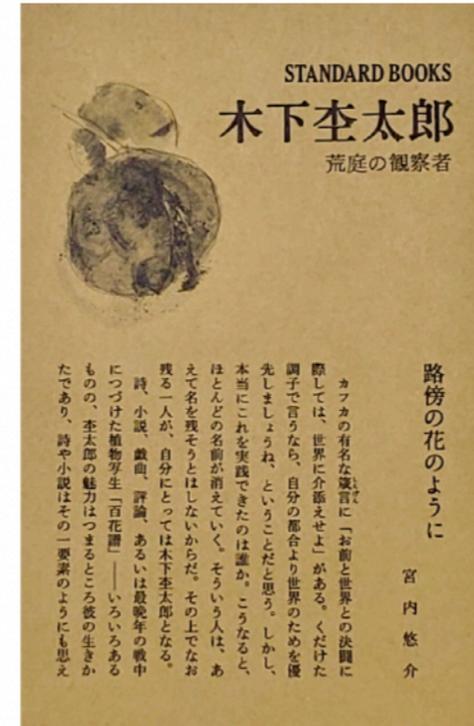
次のように語られてもきたという

「人間は古典を学ぶことによって、
人間として最も大切な『人間性』や
『慈悲の精神』を心に育てる」

「真の自由への人間解放を目指し、
古典研究によって教養を高め、
人間愛に基づく人間の尊厳の確立を目指す」

「ユマニテの人」としての杢太郎を
よくあらわしているのは
第二次世界大戦における空襲のなかで
学生に語ったというこんな言葉だ

「君たちは知識と知恵を区別しなくてはならない」
「いくら知識を積み重ねても、
それでは知識の化け物になるだけだ」
「人間のためになるようにするには、知恵が必要だ。
では知恵を学ぶにはどうすればよいか。
古典に親しむことだ。古典には人類の知恵が詰まっている」



- 『木下杢太郎 荒庭の観察者』
(STANDARD BOOKS 平凡社 2022/4)

そういえば

古典の知恵を実感できはじめたのは

比較的最近になってからだ

「古典」は必ずしも古い書物を意味しているわけではないが

「知識」ではなく「知恵」を得るためには

「古典」の言葉は助けになる

しかし皮肉なことに

若い頃はまだそうした「知恵」に応えられないことが多く

それらに盛られた「知恵」を少しなりとも理解できるのは
ずいぶんと歳を経てからのことになる

(個人的にいてもまさにそうだ)

「古典」を交響させ得る力こそが

未来へと向かう「知恵」を可能にする

いまさらのようだが

あらたなものを作り出すためには

過去をも再生させ得る力が必要だろう

「古典」は常にあらたに再生され得る力を持つ

それを引き出す知恵をこそ持ちたいものだ

- 『木下杢太郎 荒庭の観察者』（STANDARD BOOKS 平凡社 2022/4）

（木下杢太郎「古典に就いて」より）

「純粹の意味からいうと、古典とは優れた考察家、有徳の実践者、氣力の熾（さかん）であつた時代のたましいを多分に盛つた本のことである。

古典に在っては文字を以て記された所はその用の全部ではない。その文字は大きな精神的潜勢力の象徴たるに過ぎぬ。ちょうど六角形を綴つた有機化学の構造式が物質その者ではなく、それを表す符号であるようなものである。よしその表現に今の通念と合わぬ所が有つたとしても、その合わぬ所にその人、その時代を体験する管鍵を求めることが出来る。それを今見て合理的な表現を以て書き直したものに必ずしも古典としての価値が有るのではない。（…）

それ故に本当に古典を体得するということは甚だ限られた範囲においてのみ行われるのである。好き古典を求め、そしてそれを原文の形において読む努力と能力とを先決の条件とする。

実際一般の人は古典に近づき難いのである。印刷の事が普及し、良本の復刻がたやすく手に入る現代でもなお然りである。一時代は古典を体読することの出来る哲人を必要とする。そしてその人の仲介によって古典を識るのである。そのために選ばれた人の責任は重大である。そういう人が凡庸である時代は、また時代の精神が凡庸である。

今のところ、我々の參通し得る古典は日本の古典と支那の古典とだけである。日本の聖典は古事記であり、支那の古典の最高峰は孔子である。現在の青年は孔子から甚だ遠く離れてしまった。

然しながら古典の研究の方法は孤立的、排外的であつてはならぬ。史記や漢書のものにたよっていた昔の人よりも、ギリシャ、ロオマ、ペルシャ等の古文書と併せ読むことの出来る今の学者の方が古への支那、古えの中央亜細亞を一層好く理解することが出来る。

ギリシャ、ロオマの賢人、印度、ナザレの祖師、ルネサンスの学者を知らずして、周、程、張、朱のみを学んだ時代はやがて因循姑息に陥り、ついに明治の維新を招来するに至つた。

支那は大国であつたが、漢書より後はその文化が閉鎖的になつた。宋、明に至つて萎靡振るわず、清の康熙、乾隆の英邁を廻すことが出来なかつた。

譬が不倫であるかも知れないが、古典を解すにはなお交響曲を聴くが如くである。伴奏の無い歌唱は鼓舞する所が狭い。日本の古典を歌唱に較べると、それは支那古典を伴奏せしめることによって更にその影響を大きくする。

然し今の時代はその伴奏のうちに泰西の古典、現代の思想、科学、技術等の器を吹弾する者をも容れることを要求する。そして世人は、この大交響曲の大指揮者を翹望しているのである。

（一九四四年 五九歳）」

（木下杢太郎「科学と芸術」より）

「其の結果は違うが、其の生成に於いては科学研究と芸術的創作とかなり相似たものがある。孰れも第一に、まだ持っていないものを作り出そうと欲望する。そして強い空想力が手段と過程とを離れて、其の結果の幻影を形作る。レオナルド・ダ・ヴィンチが飛行機の設計図を作つたというが、それは科学的と判ずべきか、芸術的と判ずべきか、恐らく其の両者の混融したものであろう。空想力の弱い人は大きな芸術を創作することが出来ないように、科学の新境を開拓することも出来ない。空想力は長く持続しなけfればならない。人間は醒めている時だけ考えるのではない。日中其の考察に沢山の材料を与えて置くと、睡眠の間に、考察の生理化学が、意識の闕下で不可思議なる醗酵をして、頭脳を、物質の結晶する前の溶液のような状態に置く。其の尖の一角が意識闕の上に頭を出すと、それをきっかけにして、意識のうちによきによきと結晶が蜂起するのである。

かくの如き心理作用は科学的研究の過程に於いても、芸術的創作の過程に於いても共通である。唯、両者は其の手段と其の技術と、其の目的とを異にするばかりである。

科学も芸術も其の結果は、世界的のものであり、人道的のものである。然し、其の研究、其の創作は、研究者、創作者の精神の統覚に依従する。其の統覚は国土、時代、国民性から影響せられる。熱烈なる愛国者から生まれる科学、芸術の果実も、其の真正なるもの、其の佳良なるものは、やがて世界的であり、人道的であり、両者に何等の矛盾はない。それ等の結果を取つて之を特殊の目的に利用するということは、これは別の事である。

（一九四一年 五六歳）

（栞～宮内悠介「路傍の花のように」より）

「カフカの有名な箴言に「お前と世界との決闘に際しては、世界の介添えせよ」がある。くだけた調子で言うなら、自分の都合より世界のために優先しましょうね、ということだと思う。しかし、本当にこれを実践できたのは誰か。こうなると、ほとんどの名前が消えていく。そういう人は、あえて名を残そうとはしないからだ。その上でなお残る一人が、自分にとっては木下杢太郎となる。

詩、小説、戯曲、評論、あるいは最晩年の戦中につづけた植物写生「百花譜」――いろいろあるものの、杢太郎の魅力はつまるところ彼の生き方であり、詩や小説はその一要素のようにも思える。キューバ滞在中に描かれた何気ない絵も、医学者としてハンセン病を研究し、国の隔離政策に反対したことも、空襲下で教鞭を執りつづけたことも。「百花譜」の路傍の花は、ある意味では自画像のようだ。つまり、自己主張のない、その意味では地味な、けれども背筋を伸ばした姿が。

杢太郎の生きかたを知ろうとしたとき、必ず行き当たる言葉に「ユマニテ」（humanité）がある。フランス語で人類、人間性、古典学などを指すものだ。これは杢太郎の鷗外論に出てきたのち、どちらかという杢太郎自身を象徴するものとなっている。いくつか引用すると、「人間は古典を学ぶことによって、人間として最も大切な『人間性』や『慈悲の精神』を心に育てるのだ」（『杢太郎のユマニスム』新田義之）、「真の自由への人間解放を目指し、古典研究によって教養を高め、人間愛に基づく人間の尊厳の確立を目指す」（『ユマニテの人――木下杢太郎とハンセン病』成田稔）など。

もっとも、このあたりは多くの人が首をひねりそうなところだ。まず、どうして古典研究が人間性につながるのか。そこで、「羅旬語一つ知らないで、それで仏蘭西の文化が分かんと思つたら、それこそ大それたことです」（「巴里通信」という杢太郎の言にしたがい、ラテン語にさかのぼってみる。ラテン語のhumanistasは、紀元前にキケロが好んで用い、その考えかたを練り上げたもの。すごく簡単に言うと、教養が人と獣をわかち、ひいては寛容やよりよい社会につながるということだ。転じて、こうしたキリスト教以前の古典に倫理の源を求める姿勢がユマニスム（humanisme）。空襲中、杢太郎はこんなことを学生に語つたと言われる。「君たちは知識と知恵を区別しなくてはならない」「いくら知識を積み重ねても、それでは知識の化け物になるだけだ」「人間のためになるようにするには、知恵が必要だ。では知恵を学ぶにはどうすればよいか。古典に親しむことだ。古典には人類の知恵が詰まっている」――。

幸い、いまここに木下杢太郎という古典がある。だから、まずはこれに目を向けてみよう。最小限のボリュームで音楽が鳴っているようなこの筆致に、派手に広まったりすることをみずから拒むようなありかたに、そして、そういうものにしか宿らない何物かに。私たちの人間性のために。

それにしても、いまあらためて文章に接してみても、杢太郎の自己への興味のなさのようなものには驚かされる。杢太郎の興味の向かう先は、ほとんど常に外部の世界にある。そして病を研究し、路傍の花を写生し、鷗外全集の出版のために動く。彼の姿勢も、ユマニテの概念も、実際のところ、近代自我といったものより先を行っていたように感じられる。でも、杢太郎は先駆者であろうとはしない。もしかすると、そういうことは意識すらない。このあたりは、早くから自分がどう見られるかを鋭敏に意識し、セルフプロデュースしたであろう旧友の北原白秋とは好対照で興味深い。

同じくして、杢太郎はハンセン病の治療法を模索したが、それを成し遂げる最初の一人であろうとはしなかつた。「動物接種が確実になつた以上正攻法として僕らは完全な治療法を見出さなければならない。人間は空を飛べないといわれたのに今日の飛行機の発達の素晴らしさはどうだ。療法はかならず成る日がある。」（日刊紙インタビュー）。杢太郎は病の根絶をこそ願う。それをやるのは「僕ら」であつて「僕」ではない。治療法を確立するのは誰でもよくて、治療法の確立が第一に優先されるということだろう。

なるほど杢太郎は芸術より医学を選んだかもしれない。けれどそれ以上に、というかそうだからこそ。芸術より大事なものを識っている。ゆえに杢太郎は実社会をまっとうに生きようとする者にとって星となる。そしてまた、ここには芸術家が見落としがちな、芸術家こそ見習うべき何かがある。だから筆者も芸術の関わる者のはしくれとして杢太郎を愛し、かくありたいと願うのだ。」

「哲学とは「当たり前」を問い直す学問だ」

それは「「当たり前」が崩壊する瞬間」である
「破局」に遭遇する危機に備えて
思考を柔らかくしておくストレッチのようなもの

そしてそのストレッチは
ひとりでするよりも
「他者」との「対話」が効率的である

「他者」とは
「私」とは別の「当たり前」に立つ者」だからである

以上は以下で引用した
戸谷洋志「非常灯の思考／対話とは何か」の
「連載第1回 破局と哲学的思考」を
単純化してご紹介したもののだが

この視点は
「他者との対話」による
「思考」訓練のススメである

けれど以下の引用に書かれてあるような
「日常を生きる上では、哲学はあまり必要ではない」
ということでは決してなく
むしろ「日常」のなかでこそ
ストレッチは有効なことがあるのではないか

それは「当たり前」を壊してくれるような他者と
対話することによるストレッチよりも
むしろむずかしい訓練だともいえる

「日常」こそ「当たり前」でできている
「訓練」するとすれば
その「当たり前」の只中において
みずからを問うことこそが重要だろう

その「当たり前」でできている「日常」こそが
夥しい「他者」そのものの集積であるからだ

みずからそのものもまた
そうした「他者」によって無意識に構築されている
（「他者」とはいえない集合的な「じぶん」だろうが）



- 戸谷洋志「非常灯の思考／対話とは何か」
連載第1回 破局と哲学的思考——あるいはストレッチの必要性について
（生きのびるブックス 2022.6.2）

そしてほとんどのばあい
そうした「当たり前」の「日常」は
意識されないまま共通されていて
それを問いなおすことはむずかしい

かつて寺山修司に
『書を捨てよ、町へ出よう』という著書があったが
さらにいえば
「書」の世界と「町」の世界とを
同時にいかに生きるかということが
「ストレッチ」として有効ではないだろうか

あえて異質のものを
みずからのなかで「対話」させて生きてみること
「当たり前」を否応なく
問いなおせる場が必要だということだ

哲学が「「当たり前」を問い直す学問」ならば
その「学問」という「当たり前」をこそ
まず問いなおすストレッチからはじめるのがいい
哲学者は哲学という学問のなかで閉じていてはならない

- 戸谷洋志「非常灯の思考／対話とは何か」連載第1回　破局と哲学的思考―あるいはストレッチの必要性について（生きのびるブックス　2022.6.2）

https://ikinobirubooks.jp/series/toya-hiroshi/954/

「哲学とは「当たり前」を問い直す学問だ。私たちの生活は、多くの「当たり前」によって成り立っている。それは、常識とか、偏見とか、先入観といった言葉にも置き換えることができる。

「当たり前」は道路標識のようなものだ。私たちは、それを信じるからこそ、安心して道の上を歩くことができる。もしも道路標識がなくなったら、自分がいまどこにいるのか、この道の先に危険なものがあるかどうか、分からない。私たちは不安になり、前に進むことができなくなってしまう。同様に、「当たり前」がなくなってしまうたら、私たちは日常を生きることができなくなる。安心して一日を過ごすことができなくなってしまう。だから、日常を生きる上では、哲学はあまり必要ではない。しかし、とても残念なことに、私たちの人生には何回か「当たり前」が崩壊する瞬間が訪れる。つまり、それまでの常識が通用しなくなり、それまでの日常が一変し、考え方を根本的に刷新しなければならないときがやってくる。

どんなときだろうか。それは人によって違うだろう。しかし、いくつか典型例を挙げることはできる。たとえば、両親が死んだとき、大きな病気を患ったとき、恋人と別れたとき、仕事を失ったとき、あるいは、恐ろしい災害に見舞われたとき、戦争に巻き込まれたとき、余命を告げられたとき、などだ。そうした瞬間は誰にでも訪れる。そして人生において一回ではなく、少なくとも何回か、忘れた頃にやってくるのだ。こうした、「当たり前」が崩壊する瞬間を、「破局」と呼ぶことにしよう。

破局は私たちにとって大きな危機である。それまで私たちが頼ってきた「当たり前」が、もう役に立たなくなってしまうからだ。破局が起きたとき、道路標識は、まるで魔法が解けたように、するすると透明になり、消えてしまう。何も目印のない道の真ん中に取り残される。そのとき私たちは、道路標識なしに、今まですがってきた「当たり前」を頼ることなしに、次の一步を踏み出さなければならない。それができなければ、どこにも行けないまま日が暮れて、不安と虚しさに見舞われる冷たい夜に飲み込まれてしまう。

破局に遭遇した後、私たちは手探りで一步一步前に進みながら、新しい「当たり前」を作り上げていく。破局は私たちに常識の更新を迫る。「当たり前」がバラバラに砕け散ってしまうからこそ、私たちはその破片を拾い集め、それを一つ一つ組み立て直さなければならない。しかし、それはもう前と同じ形にはならない。私たちは、破局の後を生きるために、それによって自分が再び前に進んでいけるような、そうした「当たり前」を再編しなければならないのだ。

だがそれは決して簡単な仕事ではない。何の練習もなしに、一人でやすやすとできるものではない。では、そのためにはどんな力が必要なのだろうか。おそらくそれは、「当たり前」を問い直す力だ。言い換えるなら、今まで信じてきた「当たり前」が唯一の答えではないということを受け入れる力であり、その外側に、別の答えを模索する力だ。道路標識とは別の方向に向かう道について考える力だ。そしてその力は、別の「当たり前」を考えることができる、という、思考の柔らかさのうちに宿るのである。

破局の後、私たちは道なき道を進まなければならない。得体の知れないものに躓くかも知れないし、突然、穴に落ちてしまうかも知れない。私たちは壁を乗り越え、高い段差から飛び降り、対岸へと飛び移らなければならない。そのときに、然るべき柔らかさが備わっていなければ、私たちはたちまち怪我を負ってしまうだろう。そこから一步も動けなくなり、再び、冷たい夜に飲み込まれてしまうだろう。だから私たちは思考を柔らかくしておかなければならないのだ。思考が硬直化するということは、前に進み続けようとする私たちにとって、最大のリスクなのだ。

では、どうすれば思考を柔らかくすることができるのだろうか。おそらく、それには日頃の訓練が必要だ。つまり、思考にもストレッチが必要なのだ。私たちは、まだ日常が機能しているとき、「当たり前」が信頼できているときに、その「当たり前」を問い直す訓練をしておく必要がある。そのようにして、思考の可動域を広げ、やがて訪れるだろう破局に備えなければならない。そして、そうした訓練の機会を提供してくれるものが、哲学的な思考なのである。」

「哲学をストレッチとして理解することには一つのメリットがある。それは、哲学的思考には他者の手助けが必要である、という、普段あまり意識されることのない、しかし無視することのできない側面が見えるようにする、ということである。

もちろん一人でストレッチをしてもいい。ただ、二人でやった方が効率的なのは疑う余地がない。効果的なストレッチには他者のサポートが不可欠である。たとえば空手やダンスの練習では、二人一組になって、一方が床に座って足を広げ、他方がその背中を押して膝の裏の筋を伸ばす、という運動をよくする。それによって一人でやるよりも、効率的に足の可動域を広げることができるのだ。

同じことが哲学的な思考にも当てはまる。私たちが「当たり前」を問い直そうとするとき、その作業に一人で取り組む必要はない。というよりも、一人でやるにはそもそも限界がある。「当たり前」は、それが「当たり前」であるからこそ、自分からは見えにくいからだ。そもそも、自分がそれに拠って立っているということに気づけないこと自体が、「当たり前」の一つの特徴でもある。

だからこそ、それを問い直すためには、「私」とは別の「当たり前」に立つ者、すなわち他者の視点が必要になる。「私」は他者と言葉を交わすことによって、はじめて、自分がよって立っていた「当たり前」が何であったのかに気づくことができる。そして、それが唯一の答えではないこと、その外側に別の「当たり前」が成り立ちうることに、気づけるのである。このような営みが、それ自体として、「当たり前」を問い直す実践に他ならない。

このように考えるなら、哲学は必然的に他者との対話を必要とする、といってもよいかも知れない。対話は私たちの思考の可動域を広げてくれる。それによって、私たちの思考が硬直化することを予防してくれるのだ。

もっとも、それは他者との対話が「私」にとって心地よいものである、ということの意味するわけではない。それもまた、ストレッチと通底している。ストレッチはしばしば苦痛を伴う。しかしそうした苦痛を経験することでしか柔軟性は獲得されない。同様に、自分とは異なる常識をもった他者と対話することは、しばしば苦痛を、あるいは居心地の悪さを感じさせる。もちろん、相手に自分のことを話してスッキリすることもあるかも知れない。しかし、それは思考の可動域を広げていることにはならないだろう。対話はマッサージではないのだ。

私は、対話に特有の、ある種の居心地の悪さを、緊張感を擁護したい。そうしたものから守られた、完全に安心できてリラックスできるコミュニケーションを対話として定義するとき、私たちは対話の範囲を大幅に限定してしまうことになる。もちろんそうした対話も素敵だ。しかしそれだけが対話ではない。そして哲学的な対話には、こうしたある種のストレスがどうしても伴うものではないだろうか。

しかしこのことは、だから私たちは相手に対して好きなだけ苦痛を与えていいとか、相手から苦痛を与えられても黙っていなければならない、ということの意味するわけではない。対話が苦痛を喚起するからこそ、そこには特有の倫理がある。それもまた、ストレッチと同じだ。ストレッチには倫理がある。他者の背中を押すとき、押し過ぎたら怪我させてしまう。しかし楽をさせていたらストレッチにならない。そうした絶妙な力加減を発揮することを求められるし、また押される側は、そうした相手の手腕を信じなければならない。

対話するとき、私たちは著しく脆弱になる。自分が「当たり前」だと思っていることを覆され、相手から批判を受ければ、誰だって立ち直れなくなるくらい傷ついてしまう。そうなれば、思考の可動域が広がることなどなく、怪我を負い、そこから動けなくなってしまうだろう。それはもはや哲学的な思考とは言えない。他者と対話するとき、私たちはそうした形で思考を台無しにすることがないよう、相手を配慮する責任を負うのだ。

私たちは不完全だ。私たちは弱く、傷つきやすい。それなのに、人生には、私たちを打ちのめす出来事が、何度も何度もやってくる。その過酷な世界のなかで、道なき道を進んでいくために、私たちは自分の思考を柔らかなものにしなければならない。そのために、私たちは他者と対話するのであり、背中を押しってもらうのだ。」

わたしたちは土のことを
あまり知らずに生きている

いわれてみれば
あたりまえのことも思えるが
はじめ地球には土はなかったのだ
そのころはまだ動物はもちろん
植物も存在しなかったのだから

土が生まれるためには
生き物が生まれ育ち死んでいき
またそれによって生き物を育てていくプロセスが必要となる

地球が誕生したのは46億年前
土が誕生したのはそのずっと後
生物たちが関わりはじめた5億年前のことだという

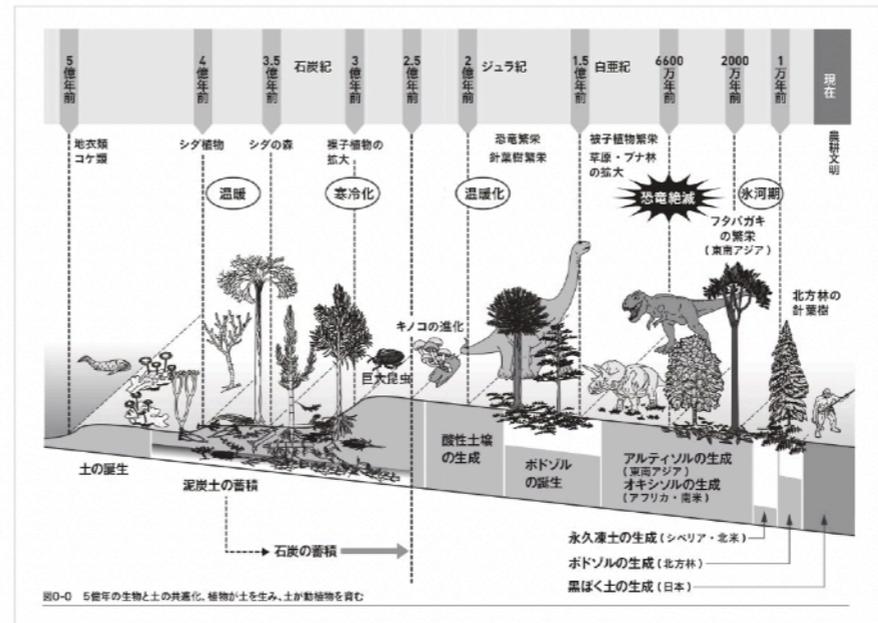
まず地球上に生き物が誕生し
その遺体と岩石から土は生まれた
人間が土と関わる歴史はまだ1万年ほどだ

土によってつくられる土壌とは
「岩石の風化によって生まれた砂や粘土に
腐った動植物遺体が交ざったもの」であり
「生き物を育む、生き物が育んだもの」

土を食べて耕すミミズ
岩を食べようになったキノコ
腐葉土を食べるカブトムシの幼虫などまでいて
植物や昆虫の躍進を支えるとともに相互に影響し合い
土は恐竜の消長から人類の現在のような繁栄に
場所を提供し続けている

けれど土壌は平均すると
厚さ1メートルほど地球を覆っているにすぎない
その「地球の皮膚」である土の存在が
地球の生命圏を豊かに形成している

現在のところ他の惑星で土は見つかっていない
少なくとも地球のような生命が存在しないところでは
土は生まれることができないのだ



■藤井 一至『大地の五億年／せめぎあう土と生き物たち』
(ヤマケイ文庫 山と溪谷社 2022/6)



土を耕し過ぎたりすることで
表面の土が失われてしまったら
その土が再生するには
100年から1000年もの時間がかかるのだという
その再生には植物と微生物の働きが必要だからだ
土の大切さを理解することは
人間の未来を考えていくうえでも欠かすことはできない

さて著者の藤井一至氏の専門は土壌学・生態学であり
スコップ片手に日本各地はもちろん
世界各地をとびまわりながら
土と地球の成り立ちや持続的な利用方法を研究されている

その藤井氏が研究をはじめてから
忘れることのできない感動の瞬間が三度ほどあったという

それは
「土壌を酸性に変える犯人が植物自身だと分かったとき」
「熱帯雨林の落ち葉からしみ出した茶色い水を観察したとき」
「焼畑農業に酸性化を食いとめる
仕組みがあることを発見したとき」で

それまでの「酸性=悪」という思い込みが
ひっくり返った瞬間だったのだという

酸性土壌をどう克服するかは
人間が土に関わりそこから収穫することを始めてからの
大きな課題となっているが
「焼畑農業」という「酸性化を食いとめる仕組み」以上に
感動的に思われたのは「水田稲作」という
酸性の土にも対応できる仕組みである

田んぼに水が張られ田植えが始まると
水の下では土の中の鉄酸化物が溶け始め
その溶けた鉄によって青灰色の土になり
酸性土壌を中性に変えるために一役買うのだという
そしてそのことによって
酸性状態では溶けなかったリンが水に溶けやすくなる
なんという知恵なのだろう

「大地の5億年」は
土の5億年であり生き物たちの5億年であり
そうした土が人間の1万年を育ててきた

その土をいかにして長い目線でとらえ
その活かし活かされることのできる仕方を工夫していくか
まずはわたしたち一人ひとりが
身近な足元にひろがっている土に目を向け
その声を聞くことがなにより大切なことだろう

■藤井 一至『大地の五億年／せめぎあう土と生き物たち』

（ヤマケイ文庫 山と渓谷社 2022/6）

（「プロローグ 足元に広がる世界」より）

「土壌の生成には数百年から数百万年かかる。数百歳は若い土、数千年かかり数万年で一人前、数十万～数百万歳の土でようやく高齢の域に達する。（…）

今から約46億年前に地球が誕生したといわれる。土壌が誕生したのは5億年前である。」

「植物（コケやシダ植物）は光合成によって大気中の二酸化炭素ガス（CO2）を固定し、その遺体の多くは微生物や動物に食べられて大気に戻るが、一部は残存し「腐植」として土を構成する。腐植を肉でたとえるなら、新鮮な肉（落ち葉）→臭う肉（腐葉土）→腐った肉（腐植）と変化したものだ。落ち葉が細くなって腐植となり、砂や粘土と混ざり合う。こげ茶色の腐植が赤色や黄色の年度とくっついて茶色い大地をつくりだした。

植物だけではなく動物も、土壌の発達に大きく関わる。ミミズは落ち葉と年度と一緒に食べ、腸内でよく混和したフンをするので、ダンゴのような構造をつくり出す。足元に広がる土のほとんどがミミズのフンだと聞くと、ぎょっとするかもしれないが、ミミズが土を耕すことで柔らかい土壌がつくり出される。

土が、岩石の風化だけではなく植物や動物との相互作用によってつくられることは、地球にしか存在しない土壌の本質を教えてくれている。現在のところ、地球は生き物が確認されている唯一の惑星であり、土壌は地球の特産物である。」

「そもそも、生物が陸上に進出した5億年前、大地は楽園ではなかった。荒涼とした大地は不毛な岩石砂漠であったと考えられている。土壌は存在しなかったのだ。文字どおり`砂を噛むような思い、である。植物が地上に登場した5億年前の夜明けは、土をめぐる生き物たちの仁義なき戦いのスタートラインでもあった。」

「本書を理解する上で欠かせないキーワードを説明しておきたい。

ひとつは、土はゆっくりと少しずつ「変化」するものだということ。そしてもうひとつは、ある条件の下で、「酸性」という厄介な性格を持つということだ。このふたつのキーワードと関わる意外な有名人がいる。「変化」と関わるひとりは進化論で有名なチャールズ・ダーウィン、「酸性」と関わるひとりは童話作家として有名な宮沢賢治である。」

「ビーグル号でのダーウィンの発見は、環境の違いに応じて、生き物たち（たとえばフィンチという小鳥）が小さな変化を積み重ねながら多様な進化を遂げたことにあったが、その根本には、土壌を含む自然環境の多様さへの理解があった。」

「森の養分循環や「酸性」をめぐる生き物たちの応酬を経ながらも、温順な地域では少しずつ土が酸性に傾いていく。日本のように降水量が多い地域では、生物の活動が盛んであり、樹木や微生物による酸性物質の放出も盛んなため、カルシウムなど中和に働く土の成分が溶かされ、雨とともに洗い流される。そして、土がpH4～5まで酸性になると、水素イオンによって、土に含まれる粘土が破壊され、アルミニウムイオンが溶け出してしまう。アルミニウムイオンは植物に対して毒性を示し、根の成長や水と養分の吸収を疎外する。」

「5億年にわたる土の「変化」は生き物を育むだけでなく、時に生き物たちを翻弄しながら、現在の自然の姿を形作ってきた。そのひとつが土の「酸性」への変化であり、アジサイの花が青色に染まる理由も、宮沢賢治が「雨ニモマケズ」石灰肥料を売り回った理由も土が酸性であったためだ。土を含む環境の変化に対応して生き物たちが獲得した多様な姿に、「適応」や「進化」を見出したのがダーウィンであった。」

（「第3章 人と土の1万年」より）

「酸性土壌での作物栽培を可能にした仕組みが焼畑農業である。森林を伐採し、燃焼させた草木灰を肥料として作物を栽培する。草木灰はカルシウムやカリウムなどのアルカリ成分を含み、土の酸性物質を中和する中和剤となる。焼畑農業は、ヒトの酸性土壌への適応術ともいえる。」

「焼畑とは、少ない人口した扶養できない農業システムである。人口密度が高くなると、酸性土壌の問題が深刻化する。しかし、アジア地域の土壌は酸性であるにもかかわらず、世界的にも高い人口密度を支えてきた。この酸性土壌を克服した秘訣が水田稲作にある。」

「日本の春、田んぼの水が張られ、田植えがはじまる。2週間もたたないうちに、田んぼの土の色が変わりはじめる。水の下では酸素欠乏になり、還元状態が進むことで、どんどん土の中の鉄酸化物が溶け始める。もともと赤や黄色だった鉄酸化物が溶けると、2価イオンに変化する。この溶けた鉄が土を青く染め、黒、茶、白色の他の成分（有機物や砂）と混じって青灰色の土になる。

変わるのは色だけではない。鉄酸化物の還元反応は電子だけでなく水素イオンを3つも消費するため、酸性土壌を中性に変えるために一役買う。さらに、pHが上がることで、酸性状態では溶けなかったリンが、水に溶けやすくなる。こうして、イネの根っこんいリンが届けられる。田んぼに水を張る効果である。水面下での土とのやり取りの甲斐あって、イネは酸性の土にも対応できるのだ。」

（「第4章 土のこれから」より）

「本書を要約すれば、決して楽園ではない土に、必死に居場所と栄養分を求めてきた植物・動物・人間の試行錯誤の歴史の末に今がある、ということになる。その歩みを、「適応」と呼んできた。生き物たちの歴史は、「自然との共生」という生やさしい言葉で収まるものではなく、土をめぐる競争と絶滅の繰り返しであった。私たちの生活も、この自然の摂理と無関係ではなく、土を保全しなければ文明が崩壊することは歴史が教えてくれている。

酸性土壌とうまく付き合ってきた植物やキノコの進化には、数億年という時間がかかっている。このデリケートな土と人間が付き合ってきたのはずっと短い1万年前後である。まだまだ無駄や失敗があって当たり前だ。酸性土壌にも自らの色を変えながらしなやかに対応しているアジサイのように、私たち人間も土壌とうまく付き合いたいものだ。」

（「文庫版あとがき」より）

「土を耕し過ぎると10年のうちに厚み1センチメートルの土がすぐに失われるが、その土が再生するには100年から1000年も時間がかかる。人類には土がつかれない以上、植物と微生物の働きによる土壌発達を待つしかない。土壌が劣化してしまってからでは遅い。」

「土の研究者になるために必要なのは、論文や博士号ではなく、土への好奇心とスコップだけだ。土に声はないが、ちょうどタネをまく春の土からは強い生命の匂いを感じることができる。匂い物質の多くは、微生物のオナラ（代謝産物）か、微生物どうしの縄張り争いで使われる化学兵器に相当する。

土の匂い物質のひとつであるゲオスミンもまた細菌（ストレプトマイセス属の放線菌）のオナラにあたる。湿った土の中でガスを発生する性質があり、水のありかを知らせてくれる。ラクダはその匂いを嗅ぎつけて80キロメートル彼方からでもオアシスにたどり着くことができる。待ち受ける細菌は水を飲むラクダの鼻に孢子をくっつけることで、遠くに子孫を拡散する。

日本でも土砂崩れの前兆として土臭いにおいがすることがしばしば報告されるが、これもゲオスミンの匂いだ。土にはまだまだまだ身を守る知識や暮らしの知恵が埋もれているはずだ。」

「職業」と「生き方」との関係は
人それぞれである

本書の著者である小松貴氏は
「昆虫学者とは、「職業」なんぞではなく、
「生き方」ではないのか」という

「好奇心のおもむくままに好き勝手にやる研究」が
「生き方」となれるというのは素晴らしい
とはいえそれなりの困難さはあるだろう

ぼくのばあいは
もちろん昆虫学者という「生き方」ではないけれど
ぼくなり「生き方」がある

ある意味で小松貴氏のいうような
いってみれば「裏山」に魅了されるような
そんな「生き方」
そして「わからないことをわかりたい、
その好奇心を持つ限り、
人は誰でも「昆虫学者」になれる」ようなそんな

ぼくのばあいそれは「昆虫学者」のように
名づけることができないものだ
じぶんでもいまだ言葉にはできないけれど
否応なくそうせざるをえないような「生き方」である

「職業」と「生き方」の関係は人の数だけあるだろう
それぞれにその人なりの意味があり
そのかたちのなかで学ぶ必要のあることがある

たとえば「職業」が「生き方」とむすびついている場合
それは幸福なことだろうが
ときにはその幸福ゆえにひとを無意識のうちに
閉じ込めてしまうこともあるかもしれないように

ぼくのばあい
「職業」と「生き方」はかけ離れていて
「職業」に「生き方」は持ち込まず
「生き方」に「職業」は持ち込まないようにしている

ある意味で中心がふたつある「楕円」のような生き方だ
もちろんほんらいの中心はひとつなのだが
あえて別の中心を設けて楕円を生きている

「職業」は「生き方」だけでは得られないものを
じぶんにとって異質なもののなかから得るためのものだ

たとえば生活費を得ざるをえないのはもちろんのこと
いわゆる「世間」の「常識」がどういうものかを知り
それに対して意識的でありながら
でき得るかぎり距離をとれる方法などを
否応なく模索するための砥石になってくれるのだ
異質なものだからこそそれが可能になるところがある

すっかり「昆虫」の話とは離れてしまっているけれど
「昆虫」に興味をもつこともまた
ぼくにとって「生き方」のひとつにほかならない
そうしたひとつひとつが
たいせつな「生き方」の星座をつくってくれるのだ



小松 貴『昆虫学者はやめられない』
(新潮文庫 新潮社 2022/6)

■小松 貴『昆虫学者はやめられない』
(新潮文庫 新潮社 2022/6)

「しばしばテレビのニュースで、「子供たちが将来なりたい職業〇位に、学者・研究者がランクイン……」などと話題になるが、私は思うのである。そもそも昆虫学者とは、「職業」なんぞではなく、「生き方」ではないのかと。

もちろん、どこかの大学やら研究所やらに雇われて、生業として研究業に携わる人々は少なからずいるから、職業といえば職業だ。しかし、普段は営業マンやら歌手やらシステムエンジニアやら僧侶やら、飯のタネとしての本業がある傍ら、余暇を使って研究業を行い、論文を書いている人だってたくさんいるのだ。殊に、昆虫にまつわる研究分野においては、アマチュアが研究者の大半を占めている状況にある。

さらに言えば、大きな組織に所属して生業として研究業に携わる場合、その研究のための資金は詰まるところ税金からまかなわれることが多い。だから、「これを解明すれば世間や人類のためにこれだけ役立つ」という名目のあるもの以外は、なかなか研究しにくい。

例えば私は、長らく大学で、アリの巣に勝手に入り込んで一緒に暮らすアリヅカコオロギというけったいな虫の研究を「科研費」により行っていた。科研費とは、日本学術振興会から賦与される研究資金のことであり、審査も厳しく競争相手も多い。当然、「アリヅカコオロギが好きです」といった理由では審査に通らない。だから「何かの役に立つ」というお題目が必要なのだ。

ちなみにアリヅカコオロギは、蟻の巣内で、アリが外からせっせと集めてきた餌を横取りしたり、アリの卵を食いつぶして暮らす昆虫だ。アリの中には、悪名高いアリのように我々人類の生活の安寧を脅かす種もいる。だから、アリヅカコオロギの生態を調べることにより、アリの防除に繋がる知見を得られるにちがいないというのが、私の考えた研究の「お題目」であった。

そのお題目によりみごと審査に通った私は、国の金でアリヅカコオロギの研究に携わる身分を維持し、確かに順風満帆に研究を進めることができた。なにしろ私が本格的に始めるまで、日本ではアリヅカコオロギの生態などろくに研究されておらず、生態どころか、日本に何種いるかさえ定かではなかったのだから。

しかし、駆け出し研究者であった私を助けてくれた科研費には、申請時にこういう目的で使いますと書いた用途以外には使ってはならない決まりがある。もともとは税金である以上は仕方のないことだが、これにより、研究の幅が狭められてしまうのだ。

例えばアリの巣には、アリヅカコオロギ以外にも多種多様な居候生物がいて（これらを総称して好蟻性生物という）、生態がよくわかっていないものばかりだった。野山で地べたに這いつくばってアリヅカコオロギを観察し続けていると、いやがうえにもそんな有象無象たちにまつわる学術的知見も得られる。だが、それはアリヅカコオロギの研究ではない。だから、アリヅカコオロギ以外の生物についての発見を論文として発表する際には、自腹を切ってバカ高い論文投稿料を支払わねばならなかったりする（勘違いされやすいが、学術論文を書く行為自体に収入はない。むしろこっちが金を出さねばならないのだ）。まったくもって学者、研究者なんぞは自由なように見えて、「職業」にした途端、急にわずらわしくなってしまうのである。

これに対して「職業」から離れてみたらどうだろう。自分の好奇心のおもむくままに好き勝手にやる研究というのは、実に気楽でいい。何せ傍から見て、それはどれほど無意味かつ意義を感じないものであったとて、誰からも文句など言われないし、言われる筋合いもない。「湖沼におけるバッキンガムカギアシゾウムシの潜水時間を調べる」だの、「洞窟に住むケバネメクラチビゴミムシの背中に生える毛の数がなぜ個体毎にバラつくのかを調べる」みたいな、それを知ったところで一体この世の誰が得をするのかもわからぬような研究であっても、自分が知りたいと思う限り、好きなように自由にできるのだ。

私はこの文庫が発刊される2022年7月時点で、とある地方の博物館に無給の研究員として籍を置かせてもらっている。少し前までは、東京の国利湯科学博物館で無給の研究員を務めていたが、「いてもいい期限」を満了したため、今に至る。

私はこれまで、様々な書籍出版ないし講演会の際に、肩書きとして「博物館の無給研究員」と名乗っていたが、今年からは「在野の研究者」と言うことにした。単にカッコ悪く思えてきたのと、それ以上に昆虫の研究は肩書きなどなくてもできる「生き方」であることを、世間に広く知らしめようと思うようになったからだ。わからないことをわかりたい、その好奇心を持つ限り、人は誰でも「昆虫学者」になれるのである。」

「そう、新発見をするのに、遠く海外まで行く必要はない。私は一生、そんな裏山に魅了されたまま生きていくのだ。」

「なお、本書でいう「裏山」は、必ずしも山 (mountain) を表さない。家のすぐ側にある、生き物たちの息づく場所、つまり公園や河川敷など、至るところが私にとっての「裏山」である。本書を通し、みなさんのすぐ近くにある普段は気づかない「裏山」の魅力の一端を感じ取っていただければ幸いである。」

社会問題なるものが存在する

問題は解決する必要があるが
あくまでも社会の問題である
私ではなく私たちの問題

私たちの問題は
私たちが解決しなければならないので
そこに社会運動が生まれる

私たちの問題は
マルクス主義的にいえば
階級が存在するがゆえの問題である
ゆえにその解決は階級闘争という姿をとる

SEALDsは社会運動を
政治的な言葉の連呼によって語るのではなく
そこに「個人の言葉」を補おうとした

現在とは違った社会のシステムである
「外部」を掲げることができず
代議制民主主義も信頼されなくなっているなかで
政治の問題を個人の日常に根差したものとして語り
「民主主義は一人ひとりの人生に内在するもの」とした

小峰ひずみ氏の「平成転向論」は
そんな「外部」から「内部」への
運動の根本的な「転向」を論じている

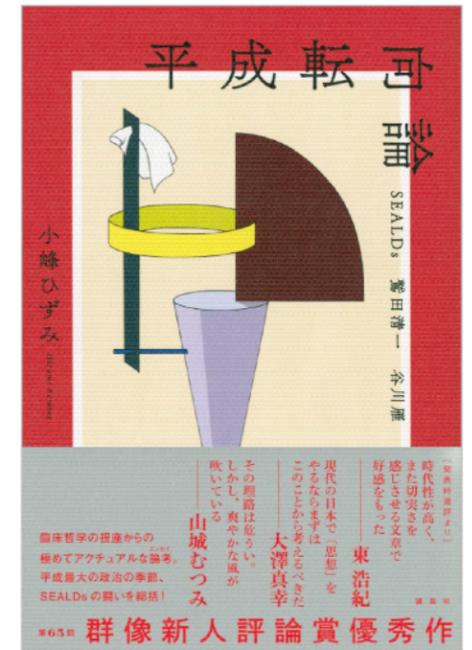
しかしそのSEALDsは解体し
社会運動の表舞台から退場する

ロスジェネ世代までの活動家たちにとって
「日常と政治を分離させない」
そして「日常生活こそ変えなければならない」
というのが原則だったが
SEALDsは日常を政治的にとらえる観点を忌避し
運動や組織を自己目的化しない
そしてメンバーの日常を運動に巻き込まないように
解散へと向かうことになる

つまり「私の問題」を
「私たちの問題」にしてしまうことなく
それぞれがそれぞれの日常へと帰っていく
逆に言えばそれぞれには最初から
帰るべき日常という場所が存在している

帰るべき日常があるというのは
ある種のプチ・ブル的な状態にある者が
一時期のクラブ活動のように運動に参加し
そして時期がきたらそこから卒業してゆくようなものだ

もともと社会運動を主導する者は
「理想」を掲げるいわゆる知識人であり
労働者そのものではない
そこでは知識人の「私」が
「私たち」を労働者階級としてみなし
それを導くために運動することになる
そしてみずからを「私たち」とみなし
「日常と政治を分離させない」ものとしてゆく



- 小峰 ひずみ 『平成転向論／SEALDs 驚田清一 谷川雁』
（講談社 2022/5）
- 戸谷洋志 「「私たちの言葉」を政治に息づかせるために」
（群像 2022年 08月号所収）

SEALDsはその意味では
「私の問題」と「私たちの問題」とを
はじめから切り離してとらえている
その両者は完全には切り離すことができないが
少なくともその両者をイコールにはしないことを選択した
そのことはむしろ重要なことかもしれないが
問題があるとすれば
当初から見え隠れしていたプチ・ブル的なスタンスと
それを持ち上げすぎた知識人たちの錯誤かもしれない

けれどそのままでは
「私たちの問題」は解決へと導かれないがゆえに
小峰ひずみ氏は臨床哲学をめぐる驚田清一の思想から

「外部」の権威を振りかざすことでもなければ、
「内部」に閉じこもることでもなく、
それぞれに人々が、それぞれの「現場」のなか
で互いに語り合うことによって、言葉の意味を書き換え、
「私たちの言葉」を形作っていくことへの希望」のために

そうした「実践に身を投じ、試行を繰り返す人々」のことを
「エッセイスト」（試行錯誤する人）と名付け
そこに可能性を見いだそうとしている

- 小峰 ひずみ『平成転向論／SEALDs 鷺田清一 谷川雁』（講談社　2022/5）
 - 戸谷洋志「「私たちの言葉」を政治に息づかせるために」（群像 2022年 08月号所収）
- （戸谷洋志「「私たちの言葉」を政治に息づかせるために」より）

「なぜ、SEALDsは持続的な運動体になることができなかつたのか。なぜ、当時、多くの知識人からの熱烈な支持を受けながら、彼／彼女らは社会運動の表舞台から退場せざるをえなかつたのか。その理由を、日本社会運動史の歴史的な帰結として解釈することが、小峰の視座である。

そもそもSEALDsの新しさはどこにあったのか。一般的にそれは、暴力的ではなく平和的なデモ活動に終始したこと、あくまでも合法的な手法を徹底したこと、そしてデモに音楽をはじめとする新しい表現を取り入れたことである、と語られる。しかし、小峰が注目するのは、むしろ彼／彼女らが使う「言葉」である。ここでは、政治の問題があくまでも個人の日常に根差したものとして語られ、民主主義は一人ひとりの人生に内在するものとして再定義された。小峰はそれを、政治的な言葉が「個人の言葉」で補われる、という事態として説明する。そうした政治観によって運動が下支えされていたという点にこそ、SEALDsの独自性がある。

なぜ彼／彼女らはそうした言葉を選択したのか。なぜそのように語らざるをえなかつたのか。小峰はこう解釈する。すなわちそれは、そのように再定義されなければ人々がもはや民主主義を信じることができなくなっているからだ。言い換えるなら、これまで私たちが民主主義を体現すると考えてきたシステムが、具体的には代議制民主主義が、もはや信頼されなくなっているからだ。

（…）これまでの日本で一般的だったのは、現在とは違った社会のシステムを、いわばその「外部」を理想に掲げる、ということだった。しかし、グローバル資本主義の浸透した今日において、私たちにはもはやそうした「外部」がない。では、「外部」に頼ることができない社会運動はどのように可能になるのだろうか。小峰によれば、それは「内部」への、つまり一人ひとりの日常への「もぐり込み」の戦略を取らざるをえなくなる。その帰結として立ち現れたものが、SEALDsに他ならないのだ。

「平成」に起きた、「外部」から「内部」への運動の根本的な「転向」――それが、小峰の突きつける平成転向論である。ではなぜこの転向を体現したSEALDsは、解体せざるをえなかつたのか。この新たな社会運動が失速せざるをえなかつた理由はどこにあるのか。（…）

本書の大きなオリジナリティは、このような社会運動史の分析のなかに、鷺田清一の思想、および彼が提唱した「臨床哲学」を定位させようとする点にある。（…）

小峰は、臨床哲学をめぐる鷺田清一の思想から、SEALDsとは異なる形で政治を語る可能性を模索する。それは「外部」の権威を振りかざすことでもなければ、「内部」に閉じこもることでもなく、それぞれに人々が、それぞれの「現場」のなかで互いに語り合うことによって、言葉の意味を書き換え、「私たちの言葉」を形作っていくことへの希望である。そうした可能性を信じ、その実践に身を投じ、試行を繰り返す人々は、鷺田がW・ベンヤミンから引用した概念を借りて、本書において術語的に「エッセイスト」（試行錯誤する人）と名付けられる。」

（小峰 ひずみ『平成転向論』～「第一〇章　SEALDsとその錯誤」より）

「いくら理論家や活動家が「最大の善意をもって」活動を行おうと、「善意だけでは」資本家階級に益することを免れない。原則があるのだ。この（註：レーニンの）指摘は現代の運動論を批判するときにも有効である。社会主義革命を目指せと言いたいのではない。ただ、その「運動論が結果的にどの階級に益することになるか」を見極め続けたマルクス主義者の作法は、いまだ、いや、いまだからこそ有効性を持つように思う。

その眼はSEALDsにも注がれてしかるべきだろう。

SEALDsの「スキル」志向の根はどこにあるか。能力主義が本格的に日本資本主義に導入されたのは、バブル崩壊後、一九九五年のことだ。日本経営団体連盟は「新時代の『日本的経営』―――挑戦すべき方向とその具体策」で労働者を三つの階級に分類する。「長期蓄積能力活用型」「高度専門能力活用型」「雇用柔軟型」である。一般的に、この三つはそれぞれ、正社員、専門職、フリーターという類型に分けられるだろう。ここで「能力（スキル）」を活用すると想定されているのは、前者二つ（正社員・専門職）である。もちろん「能力（スキル）」は「活用」されねば身につかないから、SEALDsの人々は正社員・専門職として就職することになる。

（…）

この活動家たちが属する階級の違いは、二一世紀型大衆運動とそれ以前の運動の質に大きな違いをもたらす。たとえば、ロスト・ジェネレーション世代の活動家は「変えるべき日常」（奥田）を持たなかつた。ロスジェネ論壇の論客であった杉田俊介は日常を「生存の現場」と呼び、「若年フリーター階層には、そのままでは、真の未来ない」と述べ、「生活のスタイル」を変えるべきだと訴えた。杉田は「生存が単に生存であり続けることを肯定する権利」、すなわち生活を送る権利を「たたかいの主戦場」とした。ここで杉田は日常と政治を決して分離させまいとした。他方、SEALDsの考えでは、「政治」は日常の中に埋め込まれる事項のひとつにすぎない。（…）

この活動家たちが属する階級の違いは、二一世紀型大衆運動とそれ以前の運動の質に大きな違いをもたらす。たとえば、ロスト・ジェネレーション世代の活動家は「変えるべき日常」（奥田）を持たなかつた。ロスジェネ論壇の論客であった杉田俊介は日常を「生存の現場」と呼び、「若年フリーター階層には、そのままでは、真の未来ない」と述べ、「生活のスタイル」を変えるべきだと訴えた。杉田は「生存が単に生存であり続けることを肯定する権利」、すなわち生活を送る権利を「たたかいの主戦場」とした。ここで杉田は日常と政治を決して分離させまいとした。他方、SEALDsの考えでは、「政治」は日常の中に埋め込まれる事項のひとつにすぎない。（…）

ここには、ロスジェネ世代まで脈々と続いてきた活動家たちの「日常と政治を分離させない」という決意がごっそり抜けている。（…）

その論理によれば、日常を政治的にとらえる観点は、運動の自己目的化として忌避される。社会運動は「居場所になつてはいけない」。ゆえに、ロスジェネ世代の活動家とは異なり、労働組合などを作って、そこを「居場所」にしていくという方針を取らない。奥田は「組織を続けることを目的としてしまつて引きずつたら、関わるメンバーの日常も、そこに全て巻き込まれていってしまう」という判断を下し、SEALDsを解散させる方向に舵を取る。

それゆえ、SEALDsは「政治の場所で個人の言葉を語る」ところで立ち止まり引き返したのだ。それは政治とは別に「変えるべき日常」があったからにほかならない。というよりも、階級的にそれが保障されていたのだ。（…）SEALDsの名前に刻まれた「学生」という二文字は、自分たちは「スキル」を磨くことに意味を見出せる階級に属しているということの無意識な表現なのだ。

「スキル」という言葉は、階級によって、その意味合いを大きく変える。SEALDsの人々にとって、「スキル」は「仕事」をもらい昇給していくために必須だろう。しかし、他の階級はどうだろうか。（…）

SEALDsは階級問題を自らのなかに織り込まなかつた。闘争という重いトンネルの先を照らす光を、「スキル」と名付けた錯誤こそ、SEALDsが集団的に表明したプチ・ブルジョワ的傾向だ。なるほど、この世では、誰もがプチ・ブルジョワたらざるをえない。「スキル」アップすることで他人と差をつけて蹴り落とし、自己の延命を図る。この資本主義社会では、誰もがそのうちに巻き込まれざるを得ない。それは重々承知の上で、しかし、そこに巻き込まれざるを得ないことと、それを手放しで肯定し、これから先の民主主義を照らす光とすることは、まったく別の話である。」

「SEALDsが転向した要因は、団結こそ力であるという鉄則の放棄にある。この鉄則を放棄したことで、彼／女らは日常生活こそ変えなければならないという階級闘争の視点を（個人ではもっていたとしても）、集団的に放棄したのだ。」

「これを六〇年安保前後に活躍した知識人、たとえば吉本隆明の立ち振る舞いと比べてみればよい。吉本がみせた介入（ふみこみ）と比べて、SEALDsを前にした知識人の介入は、驚くほど脆弱だ。間違いなく戦後日本の知識人は衰えている。知力というよりは、筋力が衰えているのである。」

「集合離散のネットワーク型運動論を保持している限り、「日本の民主主義」は「百姓」の「保守性」にかなわない。「政治の場所で個人の言葉を語」つた後には、あの「学習サークル」のように日常生活を送る場で政治の言葉を語らなければならない。詩人は反転し、エッセイストにならねばならない。むしろ、現代において、その行為はしばしば狂気とみなされるだろう。さすがに狂えとは言えない。が、その狂気は思考のなかに繰り込まれるべきだった。二〇一六年、SEALDsが転向の論理を表明し解散したのは、エッセイストたる狂気を二つ目の中心に据えなかつたことによる。彼／女らは詩人―エッセイストを両極とする軸を持ちえなかつたのだ。SEALDsの転向は、鶴見的な点の思考の産物である。」

「「だれ」としてそこにいるのか。二〇一六年、私たちの世代で最もよく闘った運動体であるSEALDsは、最終的に「自由と民主主義」の旗を下ろしアスファルトの上に置いた。「君はだれか？」と聞かれ「SEALDsの一員です」と答えるのをやめた。つまり、エッセイストたることができなかつたのだ。（…）そこに物怖じしたのがSEALDsの限界であり。同時にSEALDsを超える運動体を持たなかつた私たちの限界でもあった。そこが限界であったなら、そこから出発せねばならない。

その出発点を明示するために本書は書かれた。」

「二〇一五年、私たちは、アンダークラスとの連帯を放棄したのだ。

さて、どうしようか。」

《小峰 ひずみ『平成転向論』》目次

序　論駁するということ　射影の方法をめぐるて

第一章　二〇一五年の鷺田清一

第二章　〈戦前〉から〈戦後〉へ

第三章　〈ふれる〉ケアと加害の反転

第四章　平成の転向者たち

第五章　〈戦中〉派としてのSEALDs

第六章　鷺田清一から臨床哲学へ

第七章　軸と回転　谷川雁vs.鶴見俊輔

第八章　〈地方〉と〈中央〉

第九章　〈旗〉と〈声〉　臨床哲学再論

第十章　SEALDsとその錯誤

終論　待兼山の麓からエッセイストたち

EDNE (エドネ) はもちろん
ENDE を逆から読んだもの

本書はミヒヤエル・エンデの
『鏡のなかの鏡—迷宮—』へ捧げる30篇のオマージュ

1つの話 (絵) は
左と右の見開きで構成されていて
左の絵は右の絵の鏡像になっている
どの絵もjunaidaならではの不思議で魅力的な世界であり
英語と日本語でそれぞれの話
(アフォリズムのようでもある) が記されている

『鏡のなかの鏡』には

「1 許して、ぼくはこれより
大きな声ではしゃべれない」

から

「30 冬の暮れ、
雪のおおわれた教会ない……」

までの30の話があり

最後の話がまた

最初の話につながっていくが

『EDNE (エドネ)』は

「30 誰がこの扉を通ったのか。…」から始まり

「1 なぜこの扉を通るのか。…」で終わる

EDNEがENDEの逆になっているように

30から始まって1で終わり

最初の話 (絵) につながっていく

「扉」が「鏡」「合わせ鏡」となって

扉と扉のあいだに迷宮が広がっているように…

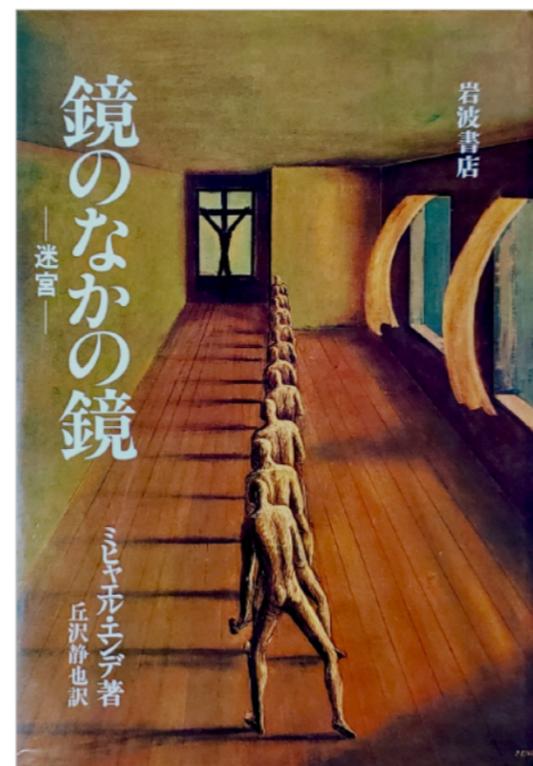
エンデの作品では

『モモ』や『はてしない物語』がよく知られているが
この『鏡のなかの鏡』や『自由の牢獄』といった名作は
とりあげられることは比較的少ないようだ
こうして独創的でクオリティの高い作品が創られることで
あらたな読者にも開かれていくことを期待したい

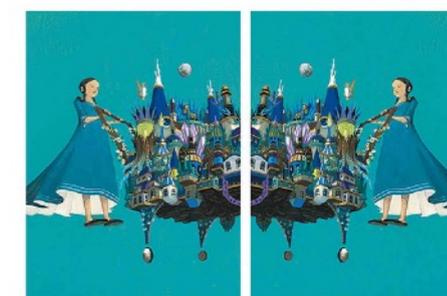
さてこの『EDNE [エドネ]』の刊行を記念して

東京都の二子玉川 蔦屋家電と京都府の丸善 京都本店で

6月3日から特別展示もスタートしているとのこと



- junaida 『EDNE (エドネ)』
(MOE BOOKS 白泉社 2022/6)
- ミヒヤエル・エンデ (丘沢静也訳)
『鏡のなかの鏡—迷宮—』
(岩波書店 1985/4)



- junaida『EDNE (エドネ)』
(MOE BOOKS 白泉社 2022/6)
- ミヒヤエル・エンデ (丘沢静也訳)
『鏡のなかの鏡―迷宮―』
(岩波書店 1985/4)

(ミヒヤエル・エンデ『鏡のなかの鏡』～「訳者あとがき」より)

「『鏡のなかの鏡―――迷宮』は連作短編である。鮮やかなイメージと豊かなストーリーをそなえた三十の話は、ひとつずつ順番に、大きくゆがんだ鏡像となって前の話を写し出し、最後の話がまた最初の話につながっていく。そのつながりは、論理や因果関係の連鎖というよりは、むしろ音楽の進行に似ている。この本は、三十枚の絵からなる変奏曲と呼べるだろう。エンデじしん、『鏡のなかの鏡』の迷宮は、建築としての迷宮ではなく、意識の迷宮であると言っている。」

(junaida『EDNE (エドネ)』より)

「30 誰がこの扉を通ったのか。どちらの側から通ったのか。それはいつだったのか。そして、なぜだったのか。」

「29 夢の住人たちは、どこか誰かの夢の中で、さらに別の夢の扉を開けていく。目覚めることを、禁じられたまま。」

「28 閉ざすばかりではない。開け放つことも、我々には選べるはずだ。」

「27 この役に選ばれたのか、あるいは自ら選んだのか、演じてみれば分かるだろう。」

「26 楽園を知らない私たちにできるのは、その輪郭を想像することだけよ。演じるの。ありったけの思いを込めて。」

「25 ほんの一刻前、楽園に生まれ落ちた魔神の影は、千年先の少年に、終われぬ旅の終わりを見せた。」

「24 「オワリ」初めに伝えた私の名だ。では最後に私が何と名乗るか、あなたには分かるだろうか。」

「23 名もなきそれを手放すために、俺は手に入れる。名もなきそれを手に入れるため、俺は踊る。名もなき踊りを舞うために、俺は手放す。」

「22 あらゆる秘密は決して叫ばない。囁くだけだ。まるで悪魔のように。君はただ、宙を舞うこの不完全な沈黙に、耳を澄ませるだけでいい。」

「21 すべての灯りを失くしたのなら、鏡に映っているのが神なのか、悪魔なのか、それを知る者もいなくなる。」

「20 私だけの真理の底で、知らない男が途方に暮れている。ほんとうに、知らない男だ。」

「19 最も醜くおぞましい三匹の奏でる。なによりも透明で、慈愛に満ちた三和音。美しいものと綺麗なものの、その真理の違いを疑わぬ者に、この響きが届くはずもない。」

「18 芸術家の矛盾が見事に伝達され、顔のない誰かがその矛盾を芸術と呼び、疑うことを知らぬ人々がそれに続く。」

「17 合わせ鏡にのっぺらぼう。映る姿は誰の顔。」

「16 鏡の自分に、弾丸を撃ち込んだことはあるか？ 鏡の自分が、絶対無傷だと証明できるのか？ 鏡の自分は、本物なのか？」

「15 氷の張った大空に、君宛のメッセージを刻もう。君を含めて誰ひとり、本物の言葉なんか読めやしないのに。」

「14 いずれは消えて無に還る、踊る炎たち。彼らの燃え盛る喜びは、ひとりひとりのほんとうなのだ。」

「13 出逢いもすれ違いも、全てほんとうのこよだった。その瞳に互いが映りあった喜びは、永遠に存在し続けるのだ。たとえ、真実から目を背けたとしても。」

「12 向こう側の存在を、こちら側が知る術はない。ただし、向こう側が存在しなければ、こちら側もない。その逆もまた然り。」

「11 この両の手に刻まれた、天使狩りの大罪。奈落でさえ、俺から逆走していく。」

「10 落花を学んだ私には、足下だけがその方向ではない。奈落は上でも下でもなく、思考を停止したお前の背後で笑うのだ。」

「9 憂鬱に時刻ちょうど。死者から生者へ、あらゆる思考の交換を。」

「8 ついに私にも肉体化が始まった。どこかで誰かがこの身体に輪郭を思い描いているのだ。あと少し。生と死の境界線まで、あと少し。闇が、眩しい。」

「7 息絶えた者たちに血が、この純白の衣を紅く染め、眩しいほどの暗闇が、漆黒に染めかえていく。」

「6 失われた言葉で、失われた芝居を、失われた舞台で、絶え間なく演じていた。」

「5 向かい合う、舞台と客席、虚構と現実。破壊と調和。わずかな厚みの、たった一枚の布きれが、完全にこの世界を分断している。幕はまだ上がらない。」

「4 すでにここに亡き者にも、未だ生まれてさえいない者にも、こう伝えよう。相変わらず今日も、世界は祝福に満ちている。」

「3 伝わるものが伝えたいこととは限らない。幸福は、人知れず咲いて、誰にも知られず散っていく花なのだ。」

「2 この迷宮への扉は、幸福を知る者にもみ開かれる。だが、この迷宮にとどまれるのは、幸福を忘れた者に限られる。」

「1 なぜこの扉を通るのか。いつ通るのか。それはどちらの側からなのか。そして、それは誰なのか。」

※junaidaプロフィール

1978年生まれ。画家。2010年、京都・荒神口にHedgehog Books and Galleryを立ち上げる。『HOME』（サンリード）で、ポローニャ国際絵本原画展2015入選。『Michi』（福音館書店）で、第53回造本装幀コンクール・日本書籍出版協会理事長賞（児童書・絵本部門）受賞。その他の作品に、『THE ENDLESS WITH THE BEGINNINGLESS』『LAPIS・MOTION IN THE SILENCE』（ともにHedgehog Books）、宮澤賢治の世界を描いた『IHATOVO』シリーズ（サンリード）、『の』『怪物園』（以上、福音館書店）、装画・挿絵の仕事に『せなか町から、ずっと』（斉藤倫作/福音館書店）などがある。（「2021年『街どろぼう』で使われていた紹介文から）

神保町の岩波ホールがこの7月29日に閉館する
岩波ホールは多目的ホールとして1968年に開館し
1974年にはミニシアターとして映画館となった

その最後の上映作品が
このヴェルナー・ヘルツォーク監督の
『歩いて見た世界／ブルース・チャトウィンの足跡』であり
岩波ホールでヘルツォーク監督作を公開するのは
1983年の『アギーレ・神の祈り』以来39年ぶりだという

ヘルツォーク監督のドキュメンタリーが劇場公開されるのは
『世界最古の洞窟壁画3D／忘れられた夢の記憶』（2012年）
以来10年ぶりだというが
そういえばその『忘れられた夢の記憶』は
岡山のミニシアターで観ることができたのを覚えている

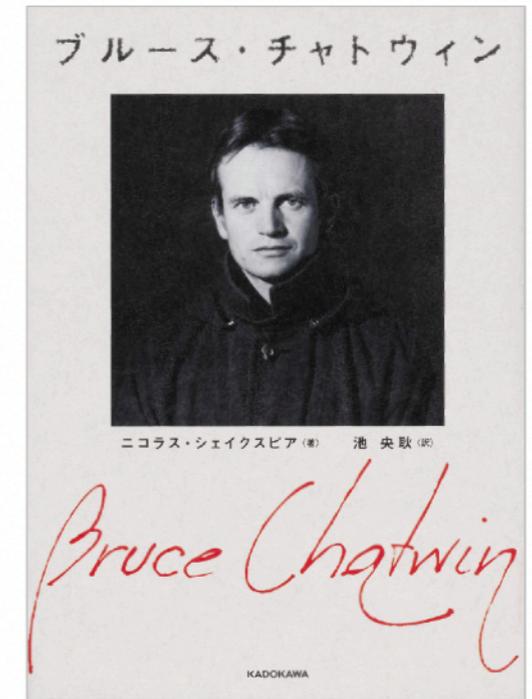
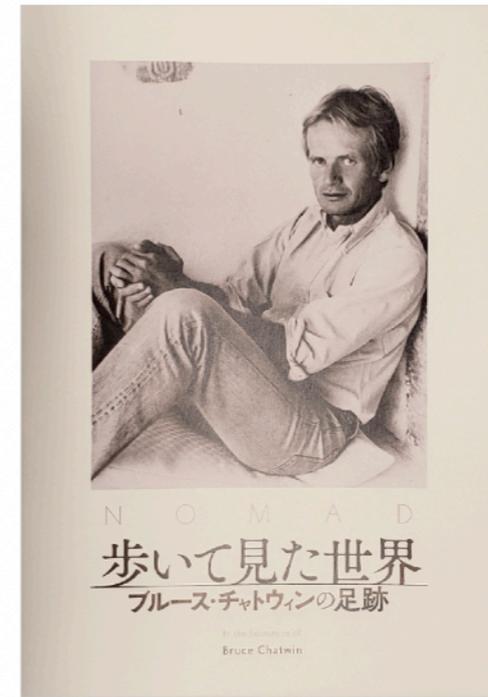
映画館にでかけることはあまりないのだが
気になる作品がミニシアターで上映されるようなときだけは
どうもどこかでセンサーが働いて動かされることになるらしい

岩波ホールが閉館することは知っていたので
（そういえばいぜん東京に出かけたときは
時間がゆるせば岩波ホールで映画を観ることがよくあった
たとえばポーランドのアンジェイ・ワイダ監督の作品など）
この松山でも今週1週間だけ上映されることを
ほんの数日前に知り重い腰をあげることにした
（中四国で上映されるのは現状では松山のみ）

なにせヴェルナー・ヘルツォークと
ブルース・チャトウィンなのだから

ブルース・チャトウィンといえば
ぼくのなかでは『ソングライン』で
それ以来気になる存在であり続けている
（チャトウィンを知ったときはもう亡くなっていたが）

作品のタイトルが『Nomad: In the Footsteps of Chatwin』
（歩いて見た世界／ブルース・チャトウィンの足跡）
となっているように
ヘルツォーク監督はこの映画で
パタゴニアや中央オーストラリアのアボリジニの地など
チャトウィンが歩いた道を辿り
チャトウィンが魅せられた「ノマディズム/放浪」を
みずから探究する旅に出る



- 映画『歩いて見た世界』（2019年）
監督・脚本 ヴェルナー・ヘルツォーク
- ニコラス・シェイクスピア（池央耿訳）
『ブルース・チャトウィン』（KADOKAWA 2020/8）

少し前に邦訳の出たチャトウィンの伝記
『ブルース・チャトウィン』（邦訳 KADOKAWA 2020/8）を書いた
ニコラス・シェイクスピアも映画には登場し
ヘルツォーク監督とさまざまに対話し
ブルースの著書や執筆にまつわるエピソードなどが
披露されているのも興味深い

チャトウィンは
「世界は徒歩で旅する者に、その姿を見せる」といい
「われわれ人類は誕生のとき以来旅人だったのだ」とも言うが
ヒトはなんのために歩くのだろう
なにを求めて歩くのだろう

管啓次郎は「彼が見出そうとしたのは、
惑星全体の表面に埋め込まれた、
失われたソングラインだったのかもしれない」とし

山伏の坂本代三郎は「私たちが歩くとき、
その姿をあらわす世界とは、ソングラインのように、
目に見えない道筋の先にあって、私たちが還っていく、
その場所のことなのではないだろうか」という

わたしたちはおそらく
帰還するために旅に出る
そして歩く
それは想像と想像の歩きであってもいい
それをみずからが歩くことが重要なのだ

そして出発したときから
帰還するときまでの「ライン」を
生きることが私たちの生まれてきた理由だ
それを「神話」と呼ぶこともできるだろう

私には私としての神話が生まれ
私たちには私たちとしての神話が生まれる

ときに私は私たちは
私や私たちが歩くその先を歩いた者に導かれて歩く
そしてそんな神話の「ライン」を求め
またべつの「私」「私たち」が
それを放浪しながら辿ってゆくことになる

- 映画『歩いて見た世界』（2019年）

監督・脚本 ヴェルナー・ヘルツォーク
 - ニコラス・シェイクスピア（池中央歌誌）

『ブルース・チャトウィン』（KADOKAWA 2020/8）
- （映画『歩いて見た世界』公式パンフレット　より）

「彗星のように現れこの世を去っていったイギリス人ブルース・チャトウィン。この作品は彼の没後30年に、生前チャトウィンと親交を結んだ巨匠ヴェルナー・ヘルツォークが制作したドキュメンタリーである。ヘルツォーク監督は、バタゴニアや中央オーストラリアのアボリジニの地など、チャトウィンが歩いた道を自らも辿り、チャトウィンが魅了された「ノマディズム／放浪」という、人間の存在の根底にある大きな概念を探求する旅に出る。」

（ヴェルナー・ヘルツォーク）

「ブルース・チャトウィンは他に類を見ない作家でした。彼は、神話を心の旅として表現してきました。この点において、作家としての彼と、映画監督としての私は、同志であることがあることがわかりました。私はこの映画で、野生の気質や奇妙な夢想家たちと出会い、人間の本質や存在という大きな概念を探求しています。

ブルース・チャトウィンは映画の制作中、目には見えない形で存在していました。撮影中、道端で「何かを発見した」と感じた時、私は不在のブルースと同じものを見ただろうと思い、それらを撮影しました。彼の個性と彼の文章は、多くの者にインスピレーションを与えました。私たちが共に経験した冒険や、共有してきたある種の考え方を映画で振り返ることは、決して感傷にひたることではありません。この旅は、言葉少なく、感情的でもなく、しかも深みのある旅となりました。それは共通言語を持つ2人の詩人の旅のようだったのです。

私はいつも、ある根本的な考え方を心の中に抱いています。それは、風景は決してただの風景ではないということです。風景は、人の心の状態や質を表現しているのです。私がアマゾンで撮影したいいくつかの作品では、ジャングルは熱狂的な夢を表しています。風景には特有の性質があり、それが映画の主演にもなりうるのです。『歩いて見た世界／ブルース・チャトウィンの足跡』でもそうでした。私たちは、風景に対してどう感じ、どう演出するのかを問われています。そのため、私は映画で、動物だけでなく、風景も演出しているのです。」

（坂本代三郎（山伏）「移動、世界、ウタ」より）

「「神話の世界では、みずからを“正しい死”へ導く者こそが理想的な人間とされている。その境地に達した者が“帰還”を果たす。」そのように『ソングライン』の中に記されている。アボリジニは歌いながら、自分の所属する“始まりの場所”へ帰還するのだという。

ふと思い返す。「世界は徒歩で旅する者に、その姿を見せる」という言葉の中にある、「世界」とは一体どのようなものだったのだろうか。

近代技術によって移動は変質してしまった。私たちは、コストさえ払えば、どこにでも短時間で移動することができる。しかし、そのとき世界は、その姿を現さない。

私たちが歩くとき、その姿をあらわす世界とは、ソングラインのように、目に見えない道筋の先にあって、私たちが還っていく、その場所のことなのではないだろうか。

私たちは、否応なく流動性の高い社会の中で生きていかなければならない。誰もそこからは逃げることができない。これから生きる人たちは、どのような「世界」を目にするだろうか。また、そこに満たされていたはずのウタを耳にすることができるだろうか。」

（管啓次郎「ノマドという別の生き方」より）

「人を旅にかきたてるのは事物と噂だろう。どんなものであれ、ある具体物をしめされ、それがどこからやってきたのかを考えはじめるとき、われわれはその物がたどった経路をさかのぼろうと決意する。起点をつきとめようとする。あるいは不確実だが奇妙に心をひきつける土地の噂を耳にしたとき、そこに行ってみたいと思う。身をさらしてみたいと思う。ごく小さな物語になんらかのイメージ（絵画・写真・映像）が加わると、誘惑はいつそう強くなる。そこであるとき突然そっと出発するのだが、きみのまえには必ずきみに先行して歩む幻の誰かの背中が見えている。それはわれわれの旅の条件だ。そしてチャトウィンとヘルツォークは、近代以降のそんな旅の条件を意識し自分自身の課題とするのみならず、そもそもホモサピエンスにとって旅とは、場所の経験とはなんなのかを、人類史全体の問題として考え直そうとした。

それで、バタゴニア。東アフリカのどこかで生まれ、故郷から出ていくことを決意した人類が徒歩で拡散していった。地球上のもっとも遠い地点だ。チャトウィンの最初の本の舞台だった。」

「歩くことに対するほとんど宗教的なまでに敬虔な感覚も、彼（ヘルツォーク）とチャトウィンが共有するものだが、本作のはしばしにも明らかな、みずからの存在をかけたような歩行によってかれらが追求したことをひとことでいうと、現在のグローバル文明以外の生き方をヒトはかつて選びえたという可能性だろう。

それがチャトウィンの言葉でいう「ノマドとしての生き方」だった。拡大・所有・蓄積によって生きる現代グローバル世界に対して、移動と放棄と発見により生きることをめざした。発見に美と高揚があれば、なおいい。忘れられ失われたものに対する感覚を取り戻せるなら、いっそう。「われわれ人類は誕生のとき以来旅人だったのだ」とチャトウィンは書いたことがあった。「技術的進歩への狂った執着は、地理的移動が遮断されたことに対する反動なのだ」と。チャトウィンは歩き、ノンストップで語りつづけ、人々は誰もがそれに耳を傾けた。彼はときどき悲鳴のような叫び語をあげた。古いアングロサクソン語では、彼の姓チャントウィンドは「曲がりくねった道」を意味した。彼が見出そうとしたのは、惑星全体の表面に埋め込まれた、失われたソングラインだったのかもしれない。」

韓氏意拳で知られる武術家・光岡英稔と
精神科医・名越康文の対話である

そこに尹雄大の確かな編集・構成力が加わって
ずしりと重い問いかけに満ちた一冊となっている

ある意味ではハナムラチカヒロ
『まなざしの革命／世界の見方は変えられる』の
武術をベースとした身体観革命のような一冊

「まなざし」よりもさらに深く
「物」の「因」である「事」の出来を
根底から問いなおす身体性に迫ろうとしている
「世界の見方」を生む「因」からのアプローチである

私たちはふつう物理的表面的な身体を
現実の身体としてとらえているが
身体にはそれ以外にもさまざまな「層位」が存在していて
知的な認識では捉え切れない深いところに
過去の身体と経験が存在している

私たちはみずからに「内蔵された空間から時が生じ、
時から時間が生じ、それらの結果として
認識できる時間軸を用いて」
「概念や観念で現実を捉えようと」するが

それらの「経験の源にある「因の因」としての空間は、
認識できないところにあり、そこで経験されることは
概念化や観念化できない真実、真理としてしか存在」しない

「その「因の因」の空間から
立ち上がってくる経験」が問題なのである

武術などで「型によってもたらされた経験」が重視されるのは
その「型」のなかには
「何年、何百年もの経験値と知恵が内包されている」からである

型などを変えてはならないというのは
その型を生み出した者の経験そのものが
型のなかに内包されているにもかかわらず
そこには意識は介在できずコントロールもできず
「自我や意識の経験ではわからない」からである

武術はそうした「型」を継承し
ときにそれを新たなものにする者によって
継承されてゆくことになるのだが

- 光岡英稔・名越康文
『感情の向こうがわ／武術家と精神科医のダイアログ』
(国書刊行会 2022/6)

ここで重要なのは
現代のような「物質還元主義化した身体観」のもとでは
そうした「「因の因」の空間から立ち上がってくる経験」が
肉体としての身体としてしか「体認」できなくなることである

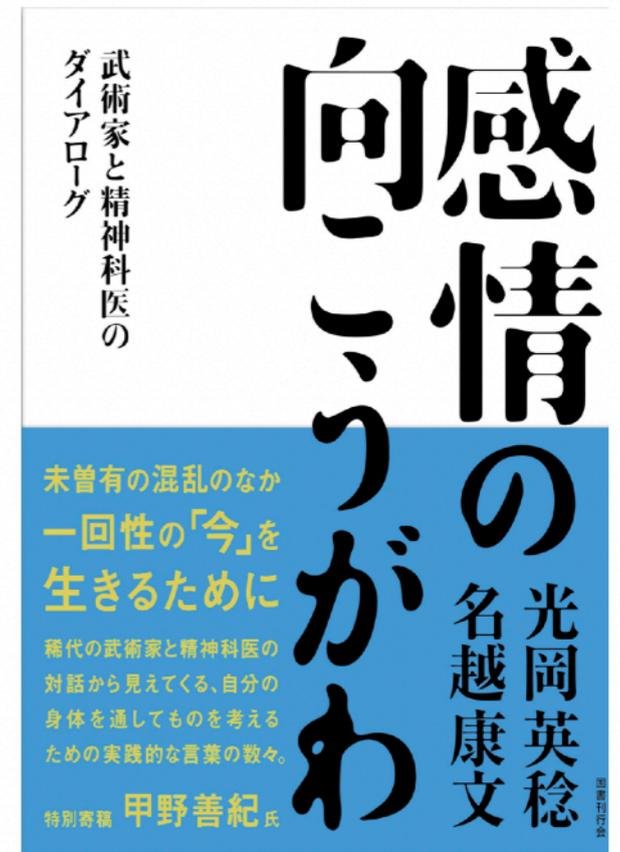
ほんらいは「無から事へ、事から物へ」というように
「〃もの、と〃こと、の関係性を精妙に」感じ観じられる世界を
物の世界としてとらえてしまうことで
逆に私たちの内面の観念や概念さえも物化してしまうことになる

どうしてこんな世の中になってしまったのだろう
というありきたりな表現さえしてしまいたくなるような
嘆息が漏れてしまうばかりの昨今だが

現代はほんらい物質的な物ではない身体を物質的なものとみなし
そうした「共同幻想」が浸透してゆくことで
それに応じた社会が出来てゆくことになる
「テクノロジーによる事の物化」によって
「自己情報機械ペット化」した人類へと向かっているのだ

対談の最初に光岡英稔氏が語っているように
「コロナ騒動における人々の反応や行動は、
人類の知性の劣化を物語っている」
さまざまな政治的なバイアスに対しても同様である

そのためにも「共同幻想に生きない」ことが重要になる
「共同幻想」をつくりだしているものに目を向けるためにも
みずからの身体のさまざまな「層位」を意識すること
「物質還元主義化した身体観」から自由になることが重要になる



■光岡英稔・名越康文

『感情の向こうがわ／武術家と精神科医のダイアログ』（国書刊行会　2022/6）

（「第一章 コロナが明かした時代の無力さ」より）

「光岡／本質を理解するにはベースとなる知性が必要です。でも、それを養う社会構造と社会形態がもう既にないでしょ。コロナ騒動における人々の反応や行動は、人類の知性の劣化を物語っている。

でも、水面下にあったものが浮き彫りになっただけで実はそもそもそうだった。人間はナチスや大日本帝国、文化大革命の所業から何も学習しなかったし、できなかった。ただ、状況や形態を変えてホロコーストと同じことをしている。このようにして知性の劣化があからさまになったから、「本当に人間には知性があるのかな」って疑い始めました。

名越／まったくそう。甲野善紀先生はそのことについてめちゃめちゃ怒ってる。それはもうすごい。でもずっと怒っているから、甲野先生には何度か「大衆を信じていたんですね！」と言ったことがあります。甲野先生の怒って「こんなはずじゃない」なんですよ。でも実はそうじゃなかった。「こんなはず」なんです。

光岡／「こんなはずじゃない」は、あくまで感情論ですね。「大衆はそういうものではないはず」というのは、ある意味、人類の知性への期待があったのでしょうか。

名越／知性について言うならば、リベラルな知識人と呼ばれている人たちが壊れたA I のようで、その場その場の回答を出していますね。」

「光岡／いまの社会状況を見ながら思うのは、武術的に状況を語るなら、対処法としては「共同幻想に生きない」ということはできるかだと思います。死生観や生命観、知性観だけでなく結婚観とか恋愛観とかもそうで、コロナによってさまざまなマトリックスが崩壊しつつあります。大衆はテレビやメディアで見たこと聞いたことで幻想を膨らませて「こうでないといけない」とカルールを作って強要され、無自覚に共有していくわけです。ただ、武術家は本来ならそちらがわではない。」

（「第三章 原初を失った人間の前提を理解する」より）

「光岡／ひとつと言えることは、その個の身体から乖離した概念と精神の世界で作り出されているものの違いがあったり、身体観が異なる層位を持っていたりしても、私たちの影響するのは物質そのものではないこと。その感覚経験を左右しているのは個の体の異なる身体の層位や本能、意志、思想とか精神とか、そういったさまざまなファクターが影響している。そうした私たちの在り方や集注の置き所が外の世界とのコンタクトから何を経験するかを決定付けています。

これは “特定の物質による直接的な影響、だけでは決して語れないし、同時にその事物との遭遇がなければ、そもそも “その出来事、は起こらなかった、そういった意味では「その物との遭遇」は “わかりやすい一ファクター、ではあります。従って、それも私たちの在り方、心身の状態、集注の向け方によって感覚される経験や結果的現象は変化していきます。

私たちの頭が悪いのです。AだからBといったわかりやすく物事を解釈することが頭の良さだと勘違いしてしまう。そんな頭の悪さを兼ね備えてます。」

（「第六章 強さと弱さ」より）

「光岡／道具に関する人間の固有性は道具を多重構造化させたことにある。これを人間の特徴のひとつとすることはできません。

たとえばお茶を飲もうとしたら、お茶を淹れるための急須、水を沸かす薬缶、お茶を栽培する農家が必要とか多重構造になっていく。また、急須ひとつ作るにも土、そして窯が必要で、さらには窯を作る道具と素材や、その窯を作る道具を作るための道具や土を掘り起こす道具とその道具を作るための道具などが必要となります。Aを作るためのBを作るためのCといったようにどんどん多重化させていく。この道具の展開が私なりの研究では、言語の多重構造化と関わっている。つまり道具と言語の関係には親和性がある。

人類史で道具が多重構造化していくのと言語が複雑化していくのは相乗的で、というのはAを作るためのBを作るためのCという構造は、内面的な時間と空間の形成がなされて可能になった。それだけの時空の幅が許されたから経験と言語が多重構造化して行き、増えすぎて複雑化していったんだと思う。」

（「第七章 自我と個性と法則性」より）

「名越／日本人の自我が弱くて外国人が強いというのは嘘やね。自我の構えの問題。

光岡／いや、私は「自我の流派」と考えるんですよ。（…）

アメリカ流の自我の源流があり、しかもアメリカ流テキサス派がありカリフォルニア派がある。

（…）

まず自我という括りが粗いですよね。エゴというのもそう。文化性によってエゴの発露の仕方も違う。ただ発露する前の段階で共通しているところはあるけれど。」

「光岡／何かを習得するとなったときにまずは個性が大切。個性を通り越したところにその人の中の法則性、普遍性に近いものがある。でも、それもまだ中途段階です。

というのはいろんな流派をやっていく中で、それでもこれが一番普遍性なのかなという次の層に潜っていけるわけです。けれども個性と普遍性は必ず相反する。かといって個性を排除して普遍性を求めると矛盾する。自我を踏まえてそれを通り抜けたところに普遍性を求める。

いまの人は個性を捨てて普遍性か、あるいは普遍性を捨てて個性を求めるかになっている。個性を貫いて普遍性に行くところを観ないと。昔の人はそういう感性があったと思う。

（「第八章 感覚の向こうがわ」より）

「光岡／何かを学び、それを教え伝える際、リカージョン（再帰性）が欠かせません。ただし、私の教伝においては、通常とは違うリカージョン、いわば光岡式リカージョンが必要なので、それを定義したいと思います。

一般的にリカージョンは時間軸で説明されています。私の考えではこうです。通常のリカージョンと同じく時間の存在は認めています。ただし、それを時間が生じた空間に還元していきます。いわば身体の経験の異なる層位へと向かう内面的な時空間のリカージョンです。

身体の層位のより深いところ、知的な認識では捉え切れないところに過去の身体と経験が存在しており、それよりは浅い層位において物理的、表面的に捉えられるところを私たちは「現実性」と呼んでいる。そのような事例がほとんどでしょう。

身体の規範を内面的な時空間に還元する必要があるのは、私たちの内面的な空間の層位から時が、さらにはそこから時間が生じ、その経験が私たちに内蔵されているからです。

つまり人間に内蔵された空間から時が生じ、時から時間が生じ、それらの結果として認識できる時間軸を用いて、私たちは概念や観念で現実を捉えようとしています。

一方で内蔵された空間、時、そして時間から生じた経験の源にある「因の因」としての空間は、認識できないところにあり、そこで経験されることは概念化や観念化できない真実、真理としてしか存在しません。その「因の因」の空間から立ち上がってくる経験があって初めて真実や真理を導き出そうとする働きも自発的に生じるのです。」

「光岡／型によってもたらされた経験というのは、これまで型を稽古してきた人の経験にも連なっています。その人たちの周りの経験もここにあるわけだし、ここから次の瞬間に生じる経験もある。この経験の中に身体性がある。（…）

気の世界や客体の世界は感覚できない世界です。型を通じて現象を導き出すことはできるけれど、「そこに意識が介在できないこと、コントロールできないこと」と「本能的な感覚機能でも理解できないこと、自我や意識の経験ではわからないこと」を受け入れておく必要があります。

あと型、式に関しては何年、何百年もの経験値と知恵が内包されているので、その経験値に沿ってやると型、式は他力となり味方してくれます。」

（「おわりに 光岡英稔」より）

「　物は事の果なり
　　事は物の因なり

人の世においての “物、とは、人の手が加えられ、人の行為が “事、として介在した物を “もの、と呼ぶ。また、自然界にも物はある。ただ、その物は事の因が常に物の内面に動き続けている物である。そして、人は、その “物、に形を観る。

“こと、から “もの、へ、そして「物の果」として表れてきた形があり、それを形成した働きを遡り観ながら、その過程の “こと、と、結果として生じた “物の形、のつながりを知る。そこに有形無形の世界の意味は存在する。

人において、物や形から事を汲み取る術あり。それ、形と意の関係や内と外の関係における格物致知となるや否や。人の行いは物を作り出す。人の手が “事、として加わり “物、が其処に出来上がる。様々な人の気持ち、感情、感覚、心や意、思い、想い、考えがそこに介在し、行為となり、そこに物が出来上がる。

　　物には事の果あり
　　事には物の因あり

　その人の手の加え方に違いがある。つまり、それは事に違いであり、その事の違いにより如何なる “物、がそこに立ち上がってくるかが決定づけられる。」

「世の中には “物は所詮は物、と言う人もいるが、それは物質還元主義化した身体観を無自覚にも内包している人の言葉であり、そのような物の扱いをした人がした場合には確かに “物はただの物、になってしまう。そのような感覚の持ち主は「無から事へ、事から物へ」と至るまでの移ろいを大会、体認できないのかもしれない。

それは、身体を肉体肉塊とし、私たちが自身を物化し初め肉の塊のように扱い始めたことにも通じてくる。本来なら “もの、と “こと、の関係性を精妙に誰もが感じ、観て撮れる世界があったにも関わらず、私たちの外の世界を物化するだけでなく自身の内面にも観念や概念による物を置くようになっていった。

（…）

人間の自己家畜化の時代から自己機械化の時代へと進み、便利で安全な環境の中で自己ペット化し、さらには自分で思考する力と自分で生きようとする力も全て放棄し、現代は完全に人工化された環境に自分を委ねてしまっている “自己機械ペット化、した人類の世代になっている。そして更に最終段階としては「自己情報機械ペット化」と物理的な実態でなくアバターのみで存在する完全人工環境依存型の人の群れへと人類はなろうとしている。

「光岡／何かを習得するとなったときにまずは個性が大切。個性を通り越したところにその人の中の法則性、普遍性に近いものがある。でも、それもまだ中途段階です。

　　というのはいろんな流派をやっていく中で、それでもこれが一番普遍性なのかなという次の層に潜っていけるわけです。けれども個性と普遍性は必ず相反する。かといって個性を排除して普遍性を求めると矛盾する。自我を踏まえてそれを通り抜けたところに普遍性を求める。

　　いまの人は個性を捨てて普遍性か、あるいは普遍性を捨てて個性を求めるかになっている。個性を貫いて普遍性に行くところを観ないと。昔の人はそういう感性があったと思う。

（「第八章 感覚の向こうがわ」より）

「光岡／何かを学び、それを教え伝える際、リカージョン（再帰性）が欠かせません。ただし、私の教伝においては、通常とは違うリカージョン、いわば光岡式リカージョンが必要なので、それを定義したいと思います。

　　一般的にリカージョンは時間軸で説明されています。私の考えではこうです。通常のリカージョンと同じく時間の存在は認めています。ただし、それを時間が生じた空間に還元していきます。いわば身体を経験の異なる層位へと向かう内面的な時空間のリカージョンです。

　　身体の層位より深いところ、知的な認識では捉え切れないところに過去の身体と経験が存在しており、それよりは浅い層位において物理的、表面的に捉えられるところを私たちは「現実性」と呼んでいる。そのような事例がほとんどでしょう。

　　身体の規範を内面的な時空間に還元する必要があるのは、私たちの内面的な空間の層位から時が、さらにはそこから時間が生じ、その経験が私たちに内蔵されているからです。

　　つまり人間に内蔵された空間から時が生じ、時から時間が生じ、それらの結果として認識できる時間軸を用いて、私たちは概念や観念で現実を捉えようとしています。

　　一方で内蔵された空間、時、そして時間から生じた経験の源にある「因の因」としての空間は、認識できないところにあり、そこで経験されることは概念化や観念化できない真実、真理としてしか存在しません。その「因の因」の空間から立ち上がってくる経験があって初めて真実や真理を導き出そうとする働きも自発的に生じるのです。」

「光岡／型によってもたらされた経験というのは、これまで型を稽古してきた人の経験にも連なっています。その人たちの周りの経験もここにあるわけだし、ここから次の瞬間に生じる経験もある。この経験の中に身体性がある。（…）

　　氣の世界や客体の世界は感覚できない世界です。型を通じて現象を導き出すことはできるけれど、「そこに意識が介在できないこと、コントロールできないこと」と「本能的な感覚機能でも理解できないこと、自我や意識の経験ではわからないこと」を受け入れておく必要があります。

　　あと型、式に関しては何年、何百年もの経験値と知恵が内包されているので、その経験値に沿ってやると型、式は他力となり味方してくれます。」

（「おわりに 光岡英稔」より）

「　物は事の果なり
　　事は物の因なり

　　人の世においての“物”とは、人の手が加えられ、人の行為が“事”として介在した物を“もの”と呼ぶ。また、自然界にも物はある。ただ、その物は事の因が常に物の内面に働き続けている物である。そして、人は、その“物”に形を観る。

　　“こと”から“もの”へ、そして「物の果」として表れてきた形があり、それを形成した働きを遡り観ながら、その過程の“こと”と、結果として生じた“物の形”のつながりを知る。そこに有形無形の世界の意味は存在する。

　　人において、物や形から事を汲み取る術あり。それ、形と意の関係や内と外の関係における格物致知となるや否や。人の行いは物を作り出す。人の手が“事”として加わり“物”が其処に出来上がる。様々な人の気持ち、感情、感覚、心や意、思い、想い、考えがそこに介在し、行為となり、そこに物が出来上がる。

　　物には事の果あり
　　事には物の因あり

　　その人の手の加え方に違いがある。つまり、それは事に違いであり、その事の違いにより如何なる“物”がそこに立ち上がってくるかが決定づけられる。」

「世の中には“物は所詮は物”、と言う人もいるが、それは物質還元主義化した身体観を無自覚にも内包している人の言葉であり、そのような物の扱いをした人がした場合には確かに“物はただの物”になってしまう。そのような感覚の持ち主は「無から事へ、事から物へ」と至るまでの移ろいを大会、体認できないのかもしれない。

　　それは、身体を肉体肉塊とし、私たちが自身を物化し初め肉の塊のように扱い始めたことにも通じてくる。本来なら“もの”と“こと”の関係性を精妙に誰もが感じ、観て撮れる世界があったにも関わらず、私たちの外の世界を物化するだけでなく自身の内面にも観念や概念による物を置くようになっていった。

（…）

　　人間の自己家畜化の時代から自己機械化の時代へと進み、便利で安全な環境の中で自己ペット化し、さらには自分で思考する力と自分で生きようとする力も全て放棄し、現代は完全に人工化された環境に自分を委ねてしまっている“自己機械ペット化”、した人類の世代になっている。そして更に最終段階としては「自己情報機械ペット化」と物理的な実態でなくアバターのみで存在する完全人工環境依存型の人の群れへと人類はなろうとしている。

　　これも皮肉なことに人間は「事から物へ、また物から事へ」と移ろう“事と物の関係性”、を人間が自らの感性で見出したからこそできてしまうことで、この近代文明化の中で生じた「テクノロジーによる事の物化」の問題点に人類の多くは気づいてないのかもしれない。」

【目次】
はじめに 名越康文
第一章 コロナが明かした時代の無力さ 不都合な事実と現実世界 より巧妙なマトリックスの世界 最大多数の最大幸福とは？ リベラルな言論の衰退の果て 武術界と宗教界のダメさについて 共同幻想が破れてもなお続く暮らし
第二章 経験的身体と共同体 誰しもが備えている経験的身体 地球に落ちてきた生命体 同調を確かめるから苦しい 自我ではない自分のやりたいこと ハワイで時間の拘束が解かれた 怒りをうまく凝縮させる YouTubeと武術の組み合わせ
第三章 原初を失った人間の前提を理解する 二十一世紀は場の心理学になるだろう できないこともその人らしさなのか？ 背骨のない身体観 ボディ・ビルディングという概念化 人間が生き延びていくためにすべきこと 「自然に還れ」というファシズム
第四章 死生観について 死は感覚の向こうがわ 抗えない死、感覚の向こうがわ 身体の左右観 経験的身体が観えない現代人 塵浄水の礼で知る勁道 信はどこで生じているか 死生観を前提にした生き方 死んだ先の仕事も意外と多い 死ねない身体
第五章 言語と身体、精神分析 アメリカでの原初体験 軸がなくても平気な日本 英語の話せる身体性 空手と不良の道のあいだで 人間とは恐ろしいもの ラカンの逸話に戦慄する 殺しにくるのが当たり前
第六章 強さと弱さ 道具と言語の多重化 心と感情 感情の基盤となる性 仏教の身体性
第七章 自我と個性と法則性 プロレスを現実だと錯覚している 自我とは流派である いまにいられず居着いてしまった 積み上げという努力の大したことなさ 内面で逃避の理由を作るのが人間 絶対的な答えがない、という絶対的答え
第八章 感覚の向こうがわ 型と経験的身体の関わりについて 感覚の向こうがわと型 生命はガチ
おわりに 光岡英稔 解説 畏友という存在 甲野善紀

存在論と認識論は
両者の成り立つ場において
プロセスとしての一元論として
とらえられる必要がある

「私」はじぶんの外にある対象世界に対する主観ではなく
「〈主体〉も〈対象〉も
それじたいさまざまな生成の過程」だからだ

ホワイトヘッドが「自然の二重分岐」と呼ぶ
「意識において感知される自然と意識の原因である自然」の
絶対的な対立が乗り越えられねばならない

ライプニッツに「モナド」という概念があるが
それは仏教における摩尼宝珠のように
互いが互いを照らし合う存在であり

さらにいえば「窓のない」モナドではなく
「相互に開かれ相互に結びつき、
自らのうちに過去と未来を含みながら、
その原始的個性性を実現する時空的統一性」である

「主体も対象もそれ自体さまざまな生成プロセス」であり
そのプロセスにおいて響き合っているということが出来る

その意味で音楽をとらえるとき
「私が音楽を経験するとき、
私は音楽に憑依していると共に、
音楽も私に憑依している」といえ

「音象徴」は「音（＝聴覚）」と「意味」という
「感覚間のつながり」として解釈でき

また「バフチンのダイアローグ論の逆説」のように
「対話の不可能性に可能性を見る」ことで
「ダイアローグを通して新たな意味を創出する」
という視点が得られる

以上ざっと今回の『談』の特集のポイントをさらってみたが
やはりその基本となるのは
主体と対象の関係を相容れないものとしてとらえるのではなく
両者とも「生成プロセス」として
ホワイトヘッドの示唆する「活動的存在 actual entity」として
すべてが響き合っているとしてとらえるという視点である
それを開かれたモナドであるといってもいい

私が私であることも
あなたがあなたであることと
響き合っはじめてプロセスとして成立する
私がそれを見るということも
私とそれが響き合っはじめて
プロセスとして成立するということだ

まさに実在は過程そのものであり
認識することも存在することも
すべては過程そのものとして生成している



- 『談 2022 no.124 /
特集 声のポリフォニー...グルーヴ・ラップ・ダイアローグ』
(水曜社 2022/7)

- 『談 2022 no.124／特集 声のポリフォニー…グルーヴ・ラップ・ダイアローグ』（水曜社 2022/7）
- （佐藤真「モノ・人が響き合う世界」より）

「ヨーロッパ近代の思想の核心に人間中心主義が君臨していたことは言うまでもないことです。その人間中心主義に疑問を投げかけた哲学者アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの哲学を見直す試みが始まっています。思弁的实在論のスティーヴン・シャヴィロもその一人ですが、シャヴィロは、とくに思弁的实在論との思想的連動性に注目します。思弁的实在論や新しい实在論、オブジェクト志向存在論と呼ばれる新しい哲学の潮流と関連付けることで、哲学・思想における現代性を炙り出そうというのがシャヴィロの戦略のようです。

ホワイトヘッドの基本的な目的は、「自然の二重分岐（bifurcation of nature）」と呼ぶもの、言い換えれば「意識において感知される自然と意識の原因である自然」の絶対的な対立を乗り越えることにありました。シャヴィロはホワイトヘッドの著書『自然という概念』を引用しつつ次のように言います。

「一方でぼくらの前には世界のフェノメナルなあらわれがある。つまり、〈樹々の緑、鳥たちのさえずり、太陽の暖かみ、椅子の硬さ、ヴェルヴェットの肌触り〉といったように。他方、ぼくらには隠された物理的現実があって、たとえば、〈現れとしての自然の意識を生み出せるように心に作用する分子や電子の結びつきのシステム〉がある。近代思想の多くはこの分岐にもとづいていて、一次性質と二次性質（ロックとデカルト）、ヌーメナ（叡智界）とフェノメナ（現象界）〔カント〕、顕在イメージと科学イメージ（ウィルフリード・セラーズ）など二つの間のいろいろな対立のかたちをとっているが、どれも同じ分岐である」と。現象学、より一般的には大陸系の哲学が、この分岐の一方に位置していて、他方には、より科学的で還元主義的なかたちの分析的思考が控えています。ところが、ホワイトヘッドは、この分岐を、まとめて手放そうとするのです。

「われわれはどちらかをとって、選ぶことはしない。（…）〈赤く盛る夕日〉や地表すれすれで屈折する陽炎の〈分子や電磁波〉がどちらも同等の存在論的地位をもっている」。それゆえ、そういう世界であることを説明する必要があるとホワイトヘッドは言います。ホワイトヘッドによれば、世界はさまざまな過程（プロセス）によって構成されていて、単なるモノから成り立っているわけではない。何ももの前もって与えられることはなく。すべてはまずそれがある通りのものにならなければならない。「いかにして活動的存在 actual entity は生成するかということが、その活動敵存在が何であるかを構成している（…）その〈存在〉は、その〈生成〉によって構成されている」というわけです。

まず、このように理解してみようとホワイトヘッドは問いかけます。そうすると、プロセスは、自然の分岐の両方の側面をまたいでいることがわかるということです。つまり、プロセスとは私が理解する当のものにも、私が理解するやり方にも等しく適用されるということです。

「私は、自分の外にある対象世界に相対する（あるいは現象学者たちが言うように〈志向する〉）主観ではない。なぜなら〈主体〉も〈対象〉もそれじたいさまざまな生成の過程なのであって、あらゆる活動的存在は、等しく対象でありまた主体でもある」からです。主観というかたちで取り出すそのことに問題がある。とホワイトヘッドは言うのです。」

「デカルト以来、とりわけカント以来のほとんどの西欧哲学は、認識の諸問題を中心にしているために「自然の二重分岐」をよりいっそう強めてきたといえます。「それは存在論（あるところのもの問いをじかに提起する）を犠牲にして認識論（ぼくたちが知るものをぼくたちがいかにして知りうるかを問う）を特別扱いして、「デカルト主義のコギトやカント主義の超越論的演繹、現象学のエポケー（判断停止）のどれも、世界についての私たちの知識に世界を依存させている。これらの全てが知られるものをぼくらが知るさいのやり方に従属させている」という。しかし、ホワイトヘッドは、これとまったく反対のことを主張します。「経験されるモノたちは、それらについての私たちの知識から区別されてしかるべきである。この依存関係があるかぎりにおいて、事物（モノたち）が認識に道を開くのであって、その逆ではない。（…）経験される現勢的＝活動的なモノたちは、それじたいが知識を含みながらも、知識を超越する共通世界に参入する」。つまり、「いかにしてぼくらが知るのかという問いが最初に来る。なぜなら、ぼくらが知るやりかたそれじたいが、どのようにモノたちが存在しており、何をなしているかということの帰結であり産物であるからである」。その逆ではないということです。

「認識論を特別あつかいするのをやめなければならない」し、「特権を取り去らなければならない。なぜなら、ぼくらはモノたちそのものを、モノについてのぼくらの経験に従属させることはできないから」だということです。この文脈のポイントは、経験をどう捉えるかにあると思われます。端的に言えば、経験されるものと経験それ自体に、主従関係はないということです。

この考えは、ホワイトヘッドの主要概念であるプロセスにあてはめると理解しやすい。「プロセスは、その対極にある事物を実体と考える立場、言い換えれば、事物の究極の姿を根元粒子的に設定し、認識を事象の分解という操作において特徴づけようとする考え方に、異議申し立てをする、という形で提示された」というのです。もとより、この概念はホワイトヘッドだけのものではなく、ベルクソンやジェームズの哲学、ヘラクレイトスや東洋思想などにおいても見受けられるものです。

「経験世界の構成要素は、それぞれ独立の原始的単位などではなく、相互に浸透しあうような不可分の流動のうちに認められねばならない。存在とは、絶え間のない持続的な創造的発展なのであって、数量的な処理の可能な根源粒子という概念は、人知のもたらした抽象に過ぎない」。

けれども、ホワイトヘッドは自然科学が前提にしている原子論的立場をやみくもに否定したわけではありません。というのも『過程と実在』において全面的に展開された actual entity という概念を吟味してみるとよくわかるという。actual entity は「ライブニッツのモナドのようにミクロの世界でありながら、同時にマクロの世界を自らのうちに映し、自らにおいて実現するものと規定されているが、一方窓のないモナドとは異なって、相互に開かれ相互に結びつき、自らのうちに過去と未来を含みながら、その原始的個性性を実現する時空的統一体ということになってい」ます。

actual entity は経験的主体としてモノ（無機物）から神にいたるまですべての存在者に適用される一元論的な概念です。そして、絶えざる流動にあって、同時に自らを限定する限定者として次々に自らを更新していく。その時に、原始的個性性を実現する時空統一体として、不変性や粒子性をアピールするという。」

「われわれは、自らの外にある対象世界に相対する主観（主体）ではありません。主体も対象もそれ自体さまざまな生成プロセスであって、あらゆる活動的存在は、 actual entity あるいはプロセスのなかにあっては、等しく対象であり、また主体です。その actual entity の響き合いこそ、われわれであり、われわれが生きる世界です。そこで今年度は、世界の響き合いという視点から、私、身体、モノの関係を問い直します。」

（山田陽一「〈声のきめ〉を聴く…グルーヴのなかへ」より）

「私が音楽を経験するとき、私と音楽は互いを所有しあっています。つまり、私が音楽に棲みつき、音楽を所有するとき、音楽も私に棲みつき、私を所有しているのです。この、相手の中に棲みついて、その相手を所有するというのは、まさに相手に憑依することを意味していますから、この「所有」は、言葉の本来の意味において「憑依」と言い換えることができます。つまり、私が音楽を経験するとき、私は音楽に憑依していると共に、音楽も私に憑依しているのです。」

（川原繁人「声に出すことば…言語と意味を超えて」より）

「『音声学』の枠を超えて、認知科学の立場から捉え直すと、「音象徴」は「音（＝聴覚）」と「意味」という「感覚間のつながり」として解釈できます。このような「感覚間のつながり」に着目するという流れのなかで、過去から存在していたけれども研究対象にならなかった「音象徴」という現象について、「音声を考えるうえで重要な意味をもつのではないか」というふうに考えられるようになってきたということだと思います。」

（田島充士「「わかったつもり」から異質な他者との声が響き合う「対話」の地平へ」より）

「他者との絶望的なまでのわかりあえなさとは、人々が既存の世界に一方的に飲み込まれることなく、ダイアローグを通して新たな意味を創出する原理であり、世界の革新性へのかけがえのない希望を示すものだ。「対話の不可能性に可能性を見る」というバフチンのダイアローグ論の逆説は、永遠に融合し得ないからこそ、常に/すでに、ダイアローグを通した更新可能性を担保しているのである。」

文學界八月号の特集

「入門書の愉しみ」のインタビューで千葉雅也は「いきなり原典だけを読んで理解できるようになる人は、現実問題としていない」ので「入門書は勉強の範囲を「仮に」有限化する装置」であり「最初に入門書でアタリをとらないと、そこから先にどういことを勉強したらいいかわからない」ということを「勉強」の人らしく語っているが

原典をいきなり原語でということとはとりあえず外して考えるとして特に過去の書物（テキスト）を受容する際に必要なのはその書物が置かれているコミュニケーション状況を把握しておく必要がある

その書物（テキスト）が想定されている読み手が具体的な限られた人（たち）であるばあいもありそのときはその理解のもとに読む必要がある

またそれが専門家向けのものであるばあいやある程度一般向けのものであるばあいもありそれぞれにおいてそれに沿った理解が必要となる

さらにはそれぞれそれが発信される背景となっている時代や社会状況などを踏まえることはいうまでもなく翻訳が介在するばあいにはその翻訳者の視点というのも把握しておくほうがいい

個人的に言えばとくに専門家でも研究者でもなく「勉強」の人というわけでもないの得上記のことをある程度ふまえながらいまの自分の知りたいこと考えたいことに参考になるような仕方でも勝手に読んでいてあまり堅苦しい読み方はしたくないと思っていてほとんどジャンルフリーな感じで読むのが好きだ

なので思想書もポエジーとして読んでみたりもするその意味で「入門書」もさまざまなのでじぶんにとって良質と思えるものはそれなりにそうでないものもそれなりに読めばいいと思っているもちろん原典から読むときはそれもそれでそれなりに



■大澤真幸「イマヌエル・カント 「自由であれ」という命令」
(文學界 2022年8月号 特集 入門書の愉しみ) 文藝春秋 2022/7 所収)

さて「入門書の愉しみ」の特集のなかで大澤真幸の「イマヌエル・カント」の項目があったのでそれについて少し

カントはいかに「理性」の人という感じがするものの坂部恵が『理性の不安』で示唆しているようにスウェーデンボリ論『霊視者の夢』でもわかるとおりむしろ「理性の不安」を払拭しようとするかのように『純粋理性批判』的なスタンスをとっていたようだ

それゆえに『実践理性批判』では「「自由であれ」という命令」を行っている（と熊野純彦はとらえている）

「自由は自らを目的として行為することだが、悟性的な認識の対象となる自然の領域には、自由や目的は存在しない」からだ

カントは理性でとらえきれないものをなんとか別のところで命法化するつまりはそこに「不安」があるのだ

こうした読み方はほかの場合にもとても参考になる

なにかを「～でなければならぬ」とするとき（たとえば「論理的でなければならぬ」「倫理的でなければならぬ」というように）その「～」に不安があるのだととらえることもできる

規則をつくるというのもそれがなければ秩序が保たれないためなのでそこにも秩序が破られるという不安が内在しているなにか問題があれば罰則を強化するとかいうのも同じ発想だそこでは自発的な自由の可能性は閉ざされてしまう

その意味で「「自由であれ」という命令」もまた両義的な要素がそこに含まれているようだ

- 大澤真幸「イマヌエル・カント 「自由であれ」という命令」
(文學界 2022年8月号 特集 入門書の愉しみ) 文藝春秋 2022/7 所収)

「カントの哲学のよい入門書というものを、私は知らない。カントに関して、日本語のよい入門書が存在しない、と言っているわけではない。ただ、これを読んだおかげでカントがよくわかるようになったというような「入門書」に、私は出会わなかった。私がカントの哲学を専門的に研究してきたわけではないからだろう。カント哲学のほんものの専門書であれば、国内外のすぐれた入門書のことによく知っているに違いない。この特集の執筆者として私は適任ではない。

ただ、海外の――とりわけ二〇世紀より前の――思想家や哲学者の書物を深く読むに際しては、ちょっとした「工夫」のようなものがあるとよいので、それに関連する形で、本をいくつか紹介したい。工夫というのは、次のようなことだ。「もの知り」になるためではない。それらの書物に、現在の私たちにも通ずる普遍性があるからだ。が、当然のことながら、思想家や哲学者は、それぞれの時代的・社会的なコンテキストの中で考えている。そのため、彼らの書物のどこに現在の私たちにも有意な普遍性があるのか――確かにそれはあるのだが――、見抜くのは難しい。例えばカントに、スウェーデンボリという彼の時代の霊能者について考察した書物があるが、この本を読むことにどんな意味があるのか。

そうした困難があるので、私は、現代の日本において、それらの哲学書や思想書を読むことを通じて、アクチュアルにものを考えている人の本を読むことを勧めている。過去の哲学者や思想家の考えについての研究書ではなく、彼らを読みながら、考え哲学している現代の書物である。すると私たちは、遠く隔たったコンテキストの中で生み出された思想や哲学が、いかに直接に現代的でもあるか、その一断面を生きいきと知ることができる。そういう観点でカントに関連した本のことを振り返ると、私の読書経験からは、ただちに三冊の優れた書物が思い浮かぶ。

古い順に、まずは故坂部恵氏の『理性の不安――カント哲学の生成と構造』（勁草書房）。この本の中で、坂部氏が特に重視しているのは、今しがた具体例として挙げた、カントのスウェーデンボリ論『霊視者の夢』である。この本に、後の批判書の中では見えにくくなってしまった、カントの本来の問いと彼の迷いや不安が、率直な告白のように表れている、と坂部氏は読む。カントは、普通、典型的な近代哲学者と見なされている。しかし、坂部氏の読みによれば、カントには、近代的な理性の枠取りを越えて進む可能性、理性を相対化し嘲笑するポテンシャルも孕まれている。近代哲学の中心で、近代を相対化しようとする運動も始まっていたというのだ。

次は、本誌の読者はよく知っている本、柄谷行人氏の『トランスクリティーク――カントとマルクス』（岩波現代文庫）である。この本は、副題にある通り、マルクスを通してカントを読むものだ。マルクスとカントの間にはヘーゲルが挟まれているのだが、柄谷氏は、あえてヘーゲルをスキップして、マルクスからカントを読む。カントは、それ自体で読むと――社会学者の眼には――いかにも「社会学以前」という印象を与える。しかし、マルクスを触媒とすると、カントに社会学的構想力が内在していることが明らかになり、驚かされる。カントの哲学は、アソシエーション的な結合よりなる社会（ Kommunismus ）に倫理的な基礎を与えている。

最後に、熊野純彦氏の『カント――美と倫理のはざまで』（講談社）。これは、カントの第三批判『判断力批判』を読み解いた本である。『判断力批判』の主題は、世界の中にどこに、「自由」や「目的」といった概念が棲まう場所があるのか、という問いだ。カントが提起した Kommunismus の倫理的な基礎とは、一言に圧縮してしまえば、「自由であれ」という命令だ。自由は自らを目的として行為することだが、悟性的な認識の対象となる自然の領域には、自由や目的は存在しない。では、それらはどこにあるのか。この問いは、『霊視者の夢』にはあったが、先立つ二つの批判書（『純粹理性批判』『実践理性批判』）では抑圧されていたことの回帰と見なすこともできる。熊野氏が、カントの苦悩に満ちた探求の歩みをきわめて明快に跡付けてくれる。」

「正装」「礼儀」「エチケット」
「装う」ことについて
今和次郎による「考現学」

昭和四十二年に刊行されたものだが
そこに書かれてあることは
現在でも基本的には変わらないようだ

今和次郎は結婚式でも大使の前でも
いつでもジャンパーを着ていたとのことだが
それは果たして「礼儀」や「エチケット」に
反したことだったのかといえそうではない

今和次郎は一般的にふさわしいとされている装いを
知らず無頓着にそうした装いをしているわけではなく
摩擦が起こりえることを前提に
意識的にそうしたスタイルを貫いたわけで
そこに今和次郎の「装う」ということについての
いわば哲学があるということが出来る

それぞれの場には
それぞれの場に合った
もしくは相応しい「装い」や「礼儀」
そして「エチケット」があるとされ
それに従っておくことで
要らぬ摩擦を回避することもできる
いわばみんなで渡れば怖くないである

しかしわたしたちはそれらについて
「そういうことになっている」ということで
その意味を知らずに従っていることがほとんどで
それらのほとんどはただ慣習化されているだけである

しかもほとんど意味もわからぬ慣習を
さももっともらしく教える先生などもいたりする
いってみれば要らぬおせっかいの処世術指南にすぎない

「日本人は、世間で行われている慣習というものに弱い。
ああするものよ、こうするものよと、
家庭科の先生あたりが教えることを
盲目的にうけとるだけで、
なぜそうしなければならないのかという批判力は弱い」のだ

なぜそうなのかを問いかけても
ほとんどのばあい
「だってこういうことになっているんだから」
以上のものでてこない
せいぜいが権威的なものを持ち出してくるに留まるが
権威に弱い人にはそれで十二分な根拠になってしまう

個人的にいえば
ふつう仕事をしているときには
それなりのスタイルをしている必要があるのはたしかで
(ある種の場所では「マスク」をせざるをえないように)
ひとからの過剰な視線を浴びないためには
仕方のないところはある

とはいえそうしたことに無意識のまま
「そういうものだ」「そうすべきだ」と
思いこんでいるのはいわば「精神における自由」を
放棄した状態にほかならない

しかし注意深くなければならないのは
どうしてそうなっているのかに
常に意識的になるということは
それらを否定するということではないことだ

とくに「儀式」的なものや
継承されてきた「型」や「技」など
今は意味がわからなくなっているもののなかに
隠された重要なものがある可能性があるということだ
説明はし難いけれどそれを体現することによって
可能になる叡智がたしかに存在することもある

とはいえ多くの「そういうものだ」は
できれば笑いとはばしてしまうに越したことはない



■今和次郎『ジャンパーを着て四十年』
(ちくま文庫 筑摩書房 2022/7)

- 今 和次郎 『ジャンパーを着て四十年』 (ちくま文庫　筑摩書房　2022/7)

「礼儀作法という言葉そのものについて考えておく。礼とは何か、儀とは何か、作法とは何か、そしてさいぎん片仮名で書かれているエチケツトとは何か (...)」ということについて。

礼といえば心にかかわること、儀とか作法とかいえば形にかかわること、そして儀とは公にかかわることで、作法とは日常的な場合とされているようだ。

そして礼儀作法といえば、心も形もしっかりと融合したものを指すことになり、また文字を入れかえて、儀礼と書くと、冠婚葬祭などの式典のときに、参列者たちに式典そのものの印象を明確にキャッチさせようとする目的でなされるもの、つまり劇的効果をねらう意図のものといえよう。

さらに片仮名で書くエチケツトとは、西洋の宮廷中心に、ルネサンス以降に用いられた言葉で作法ということに当たるといっていいようだ。

もともと礼とは、古代中国から伝承した言葉で、神対人間、つまり比較できないほど両者の力の格差が大きい場合に、人間は神に対して礼の精神で向かわなければならない、それを王と臣下とのあいだにも用いだしたことから始まっているといえる。そしてそれがわが国にそのまま移し植えられたのだ。

キリスト教国である西洋では、絶対王権の時代にも、王と臣下とは人間対人間という考えでやっていた。何故なれば、王の上に更に神がおかれていたからだ。神はあくまでも聖界のもので、王は俗界のものとしていたからである。だからヨーロッパの宮廷において行われたのは作法であって、礼法ではない。つまりエチケツトとはそれだったのだ。」

「ケネデーは大統領の就任式には、しっぽの垂れた礼服を装うたけれど、ジョンソンは背広服で就任式にのぞんだと報ぜられている。このことの理由は明確で、ケネデーはカトリック信者で、そしてジョンソンはプロテスタントだから、それぞれ当然なことだったのだ。同じ国の中でも、信仰する宗派のちがいで、エチケツトが並存することとなるのが、西洋、特にアメリカ合衆国では常識とされている。

それにくらべると、日本は、日本人は、作法にかかわる服装といえは、だれもかれも、右へならえ式でなければ、「それではいけない」とか「そんなカッコでは失礼だよ」という風に全く独自性をゆるそうとしない。マッカーサーの残していった言葉ではないが、日本人は信仰とか信念とかいうものにかけては、正に十二歳のな国民よ、といいたくなる。

日本人は、世間で行われている慣習というものに弱い。ああするものよ、こうするものよと、家庭科の先生あたりが教えることを盲目的にうけとるだけで、なぜそうしなければならないのかという批判力は弱い。

生活の歴史、衣食住、交際ごとなどの歴史を探ってみておると、国と国、時代と時代。また同じ国で同じ時代でも、そのなかに生きている人たちの主義主張などのちがいで、作法のスタイルが、がらりとちがっている場合があることが学ばしめられるのに。」

(武田砂鉄「解説　TPOをわきまえない」より)

「「TPOをわきまえる」という教え、というか、注意・説教がある。Time（時間）、Place(場所)、Ocasion(場合)をわきまえる、だそうだ。カンタンに納得するつもりはない。なぜって、わきまえる対象が明示されていないからだ。その都度、誰が出てくるかわからないのに、とにかくわきまえると言ってくる。「時と場合による」という見事な牽制方法があるが、言葉の構成要素は概ね同じなのに、「TPOをわきまえる」の返答としても、「時と場合による」は有効である。こちらは「時と場合による」と言っている主体がはっきりしている。私だ。でも、「TPOをわきまえる」にはそれが見えない。誰なのだ。曖昧なものに屈するのはよろしくない。

今和次郎はとにかくジャンパーを着続けた。妻や子供たちは「みっともないとか、失礼だとかいう世の中の通念をふりまわした」ものの、「慣れてしまうと小言も消えるだろうと待ったのである」。そもそもそれは、妻や子供たちの意見ではなく、「世の中の通念」なのだ。なぜ、自分が身に着けるものについて、一般論なるものを優先しなければいけないのか。冠婚葬祭にもジャンパーで出かけていった彼は、「婚儀屋や葬儀屋できめている形式的な装いをしなければならないという法はない筈だと考えているからだ。心のもち方からしぜんに湧く表情と言葉だけで済む筈のものだと決めているからだ」と言い切る。結婚式や葬式にはなんだかんだでそれなりの格好で出かけてしまう自分は、まだまだ自分の「心のもち方」を信じられていないようだ。情けない。

「日本人は、世間で行われている慣習というものに弱い。ああするものよ、こうするものよと、家庭科の先生あたりが教えることを盲目的にうけとるだけで、なぜそうしなければならないのかという批判力は弱い。」

まったくだ。ずっと変わらない。なぜそうなっているかを問わずに、そういうことになっているかた、と納得してしまう。同調圧力という言葉は「同調」と「圧力」と分割して考えたほうがいいのかもかもしれない。なぜって、同調は圧力ではなく、同調はむしろ安心を与えてくれるものだと考える人が多い。

(...)

「物事を改良するということは、習慣との戦いだと私は考えている」とある。習慣は法規ではない。それなのに、。あたかも法規のように振りかざしてくる人や組織ってものがある。

(...)

本書は、服装の歴史を紐解きながら、そこに残る「こうすべき」「ああすべき」の前に立つ。立たれたほうは弱い。なぜって、理論なんてないからだ。だってこういうことになっているんだから、という反論はいつだって幼稚である。どこへでもジャンパーで出かける人もいれば、Tシャツで出かける人もいる。「みんなそうしている」をじっくり疑問視し、解体していく。半世紀以上前の分析がそのままに現在にも通用してしまうというのが、今和次郎の指摘の鋭さを立証している。今日も銭湯帰りのような格好であちこちへ出かけていく。TPOをわきまえるよりも、自分を信じたい。これでよかったのだ。」

7月6日に発売されたばかりの
佐野元春とザ・コヨーテバンドの『今、何処』を
この10日間ほど毎日のように聴いてる

佐野元春を聴き始めたのは
ザ・コヨーテバンドとのアルバムからだし
それでもそんなに聴き込んできたというのでもないが
今回のアルバムには聴くごとに
深くシンプルに魂に働きかけてくるものがある

佐野元春は1956年生まれの66歳で
その歳なりの風貌になってはいるが
若い頃よりむしろ若く感じられる

真に成熟することは決して老いることではなく
むしろピュアな私たちで
新たなものが生まれてくるからだろう

オープニングにつづく
「さよならメランコリア」は
このようにはじまっている

イエスかノーか
どっちでもなく
白か黒か
決まんないまま
なんとなくHAPPY
なんとなくBLUE
曖昧なままのジェラシー
そう、ぶちあげる魂
君の魂

そして

まにあいますように
まだまにあいますように

でおわる



2022.7.6 release

「今、何処」

WHERE ARE YOU NOW

佐野元春 & THE COYOTE BAND

主題は

身近な未来越えた
永遠のレボリューション

である

二項対立的なものななかで葛藤している魂に
「永遠のレボリューション」を求めている

11曲目の「永遠のコメディ」には
こんな歌詞もある

すべては無常
歩いてゆこう
不完全な完全
この永遠のコメディ

「永遠のレボリューション」は
矛盾に充ちたものであるがゆえに
それそのものが
「永遠のコメディ」でもあるのだろう

そして終曲の「今、何処」の前の
13曲目「明日の誓い」では
こう語りかけられる

■佐野元春 & THE COYOTE BAND
『今、何処』
(SMM itaku (music) 2022/7/6)

それはただの理想だと人はいう
でも理想がなければ
人は落ちてゆく
それはただの希望だと人はいう
でも希望がなければ
人は死んでいく

とてもシンプルで
一見青くさいメッセージのようだが
成熟した若さを体現している佐野元春の声は
「まだまにあいますように」と
こんな閉塞した時代のなかで
永遠のコメディでもあるレボリューションを求め
ともに歩きだすことを誘っているようだ

■佐野元春 & THE COYOTE BAND

『今、何処』

(SMM itaku (music) 2022/7/6)

(佐野元春「ハートランドからの手紙」より)

「新しい音楽を奏でるバンドを組もうと集まったのが17年前。深沼、高桑、小松と初めてセッションをしたのは東京銀座の端にある音響ハウススタジオだった。2007年の夏だった。

最初4人で始めたバンドはライブやレコーディングを重ねて自信をつけていった。そのうち藤田、渡辺が加わって6人となり、現在のココーテバンドとなった。

元々独立心をもったミュージシャンでありタフな連中だ。さほど体型も変わらず、国から徴兵されることもなく、バンドとしてここまで無事に活動を続けられたのは幸運だ。

本作はそのココーテ。バンドによる通算6作目のスタジオ・レコーディングだ。僕らはいつものようにレコーディングを楽しみ、冗談を競いあった。途中何回かのコンサートツアーを挟み、仕上げまでだいたい3年かかった。

リリックはパンデミックや戦争という事態が起きる前に書いた。タイムマシンに乗って未来に行きそこでスケッチしたことを曲にしたような気分だ。但しポップソングなのであまり憂鬱なビジョンに引きずられないように気をつけた。

その間、世界は狼狽した。疫病がはやり、大国が戦争を始めた。視界はぼやけるばかりで心許ない。まるで明日は我が身かと怯える人々の向こうで、奇を銜うように姿を変えたファシズムがざわざわと蠢いているかのようだ。

その最中にレコ−ディングしたのが本作『今、何処』である。もしかしたら曲から透ける景色に硬い表情を見る人もいるかもしれない。音楽の愉楽よりリリックの意味に囚われる人がいるかもしれない。

けれどここに集めた一曲一曲は言わば自分の大事な人に当てたラブソングだ、ビタースウィートなフルーツであり、聴いてくれた人の心に愉快的電気を分ける発電機だ。クリックして、タッチして、僕らバンドと一緒に唄って、ダンスして、楽しんでほしい。車の中で、ベッドの中で、空の上で。とにかく僕が望むのは、時を超えて聴いてくれた人がグルーヴィーな気分になってくれること。それが叶ったら、他にもう欲しいものはない。

この時代にロックバンドができることは細やかであるかもしれない。けれどロックバンドにしかできないこともある。僕らはその価値を知っている。それを信じていい音を鳴らし続けるしかない。アルバムを手にとってくれた皆さんに感謝を。ありがとう。」

(青澤隆明「大事な魂の話をしよう、今こそ」より…)

「すべては魂の問題だ。つまるとらゆることはここにしかってくる。佐野元春からの「真新しい世界へ」の呼びかけに、聴き手の心はきっと自由に答えるだろう。それは、魂を謳うロック。しかも、スピリチュアルななにかよりも、もっと生の実感、さまざまなライフの経験をもったそれぞれの心の話なのだ。

「何も変わらないものはなにも変えられない」。1987年の佐野元春はそう痛烈に言いきった。「風向きを変える」と。あれから35年がめぐって、いま風は―――つまり時代は―――さらに閉塞し、不気味に停滞し、誰もが窒息しかかっている。イエスでもノーでも、光でも闇でもなく、すべては曖昧で、未解決のままだ。しかし、ほんとうのところ、それこそが人生の実感なのではないか。稀代のソングライターの成熟は、そのことを存分に明かしている。そのように街に生き、風に揺れる人々を省察し、明快的筆致でスケッチしてみせる。

『今、何処』と問うこの新作には、新しいうねり、痛快なグルーブがある。生の脈動と、ある意味意味穏健な咆哮が、それはもはや狂おしいユースの苛烈なシャウトではなく、その滾りをしっかり芯にとどめながら、さらに複雑な感情を多く呑み込んだ大人の吠え声である。だから、あたたかで、したたかで、しなやかで、しっかりと新しい。逞しい魂をやわらかに弾ませている。さらなる“奇妙な日々―STRANGE DAYS”を堂々とポップに歩きぬくための新たなステージ、私たちが今作に聴くのはその熱い息吹と、やさしくタフな意志である。「素朴にゆく道」だ。「この道」は充ち満ちている、ココーテたちとの頑健な足どりのなかに。

深く鐘を打ち鳴らすようなオープニングから、「さよならメランコリア」へ。抑制されたトーンで語り出される始まりの曲は、それこそ人生のパレードである。だが、「ナポレオンフィッシュと泳ぐ日」に祝祭的な冒険心とは違う。もっと不穏な社会を生きぬくための、決してあきらめない魂たちにそっと寄り添う賛歌だ。かくしてアルバム冒頭から示される主題は、イエス／ノー、HAPPY/BLUE、始まり／終わり、生／死といったあらゆる二項対立、抗争状態を脱して、「身近な未来越えた／永遠のレポリューション」を探しに行く、魂の沸騰である。二項対立の超克というテーゼは、正義／悪、右／左の区別の無化というように、かたちを越えてアルバム『今、何処』に通底する。

いっぽうには、魂がある。2003年の名曲「君の魂、大事な魂」から大切に敷衍されてきたように、それは佐野が長年謳ってきた「約束」という主題を反響させている。「愛」や「信じること」をともにして、そして、風が変化と時代の象徴として、魂に対比される。時代の傾斜は「下り坂」、「最後の時」に「時が朽ちる」黄昏を示し、たとえば「彼女が恋をしている瞬間」と鋭く対立している。

だが、こうしたコンセプトualな構想設計を越えて、ここに響き出す音楽はポップで、いつもどこかやさしい。多様でありながら一体感に充ちたバンドサウンド、音の温かさ、やわらかさ、タッチの明朗さ、包み込むような質感は、詩の言葉の勇敢な平明さに十全に調和している。サウンドの骨格はしっかりと迷いなく、ポップ・ロックの多様な実りをふまえ、細部の意匠は煌びやかなアイデアを詰め込んでいる。ミュージシャン個々のプレイアビリティが自発的に織り込まれ、ココーテバンド十数年来の成熟と愉楽を証している。エッジをぬくもりでしめたようなアルバム全体の音像も、この時代に大人がひらく懐を感じさせる。堂々たる構えだ。」

「佐野元春は、やさしく広く語りかける。「すべては無常」だが、「愛していこう」と。諦念もシニシズムも超えた地平で、今作の本懐が明朗に明かされるのは終局手前、「明日の誓い」としてだろう。「それはただの理想だと人はいう／でも理想がなければ／人は落ちてゆく／それはただの希望だと人はいう／でも希望がなければ／人は死んでいく」と佐野はかつてないほどシンプルに、わかりやすく説く。この輝かしい平明さのなか、心は高らかにひらかれてある。」

「『今、何処』は、異例な時期に生まれ見出された、特別な傑作である。しかし、それはそこにとどまるものではない。新たに出かけて行くための、自由な心は今もここにあると思い出させるからだ。寄りはまだ更けきっても、明けきってもいない。佐野元春の気高い魂は、今なお元気に吠えている。」

私たちは
「自分の右手で自らの右手を掴む」ことも
「自分の眼で自らの眼を見る」こともできない

それはみずからの根拠を
みずから根拠づけようとするようなものだからだが
本書はその問いから存在の謎へと迫っていく
謎の源には何があるのかということだ
(本書ではその問いが繰り返されながら
次第に迷路のなかに入ってしまったようなのだが…)

まったく視覚をもたないひとに
「見る」という感覚を理解させることはできない
「見る」という感覚で何ができるか」は説明できても
「見る」という感覚とは何かを説明することはできない
そこには「見る」という経験が前提となっているからだ

つまり「私たちがいま手にしている
すべての感覚や経験・知識といったものは、
つねに「すでに与えられた何ものか」を前提として
成立しているのであって
それが成立していないひとに
それらの感覚や経験そのものを説明することはできない

謎の源には「すでに与えられた何ものか」があるのだ

私たちには言葉があり
その言葉によって経験を拡大・蓄積・深化させ
一度経験したことをもう一度言葉によって
繰り返し経験してみるという意識を持ちえていることで
「見ることを意識する」はできるけれど
そのことによっても「すでに与えられた何ものか」を
認識することはやはりできない

そのように認識しえない
「すでに与えられた何ものか」に対して
答えを与えてきたのが宗教だろうが
(「神」がそれを与えたもうたといったような)
それは認識ではなく信仰という態度でしかない

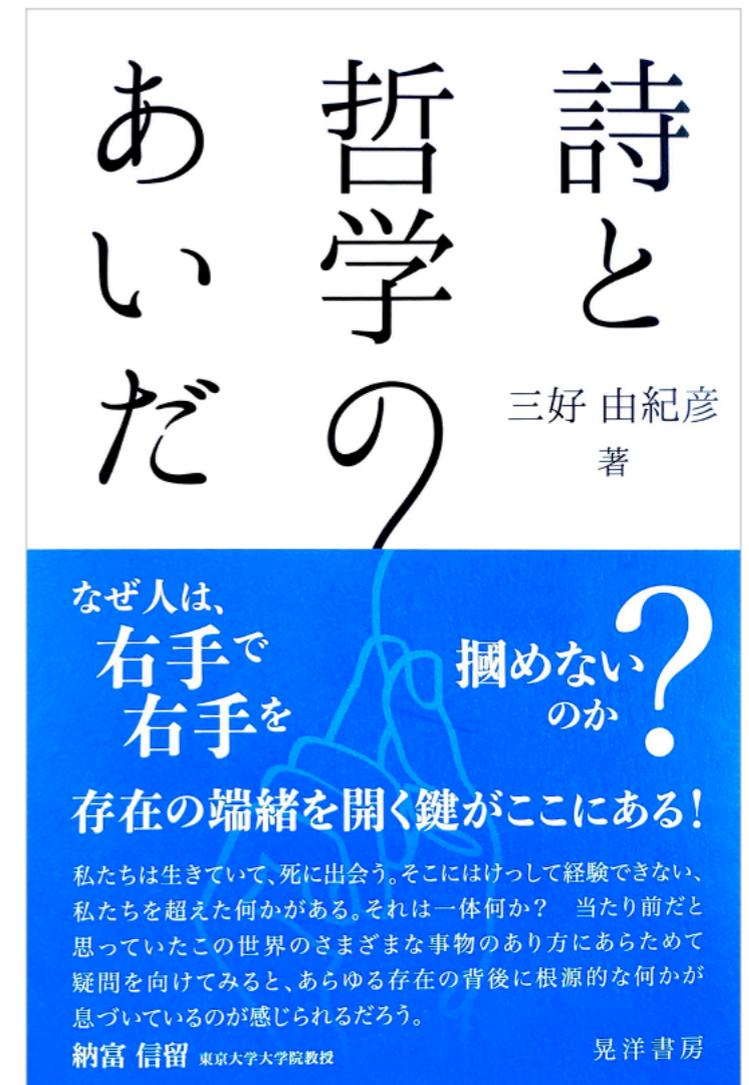
現代では宗教に代わりに
科学が信仰されるようにもなっているが
「すでに与えられた何ものか」について
説明することができないことには変わりはない

なぜ世界があるのか
なぜ私がいるのかを
説明することができないように

さて禅の話で
禅僧が月を指さしているのに
わたしたちはその指そのものを見て
月を見ないでいるというものがあるが

たとえ「すでに与えられた何ものか」である
月そのものを見ることもできないとしても
月を指しているのだということ意識し得るだけでも
「すでに与えられた何ものか」の謎への
はるかな旅をはじめることができる

たとえばポエジーの道として
あるいは神秘学の道として



■三好 由紀彦『詩と哲学のあいだ』
(晃洋書房 2022/6)

- 三好 由紀彦『詩と哲学のあいだ』（晃洋書房　2022/6）

（「はじめに」より）

「なぜ、私たちは自分の右手で自らの右手を握むことができないのでしょうか。これはじつにあたりまえのことです。何をいまさら、と思うかもしれませんが、でも、なぜそれが「あたりまえ」なのでしょうか。（…）」

これと同じような現実是他にもあります。たとえば私たちは自分の眼で自らの眼を見ることができません。（…）また同様に自分の舌で自らの舌を味わうこともできないし、自分の鼻で自らの鼻を嗅ぐこともできません。すべてはこの疑問から始まります。なぜ、私たちの存在とはこのような構造であったのか、つまり自分の右手で自らの右手を握むことができないのかと。

（…）

そもそも哲学とは、端的にいえばこの問い、すなわち「自分の右手で自らの右手を握む」あるいは「自分の眼で自らの眼を見る」ことを解き明かそうと挑み続けてきた学問なのです。哲学が存在の端緒を探求する学問である限り、その思索は必ずやこの難問に突き当たらざるをえません。なぜならば存在の端緒への問いは、最終的にはその端緒を問う者自身へと振り向けられるからです。それはパルメニデス以来、存在の端緒を問い続けてきたすべての哲学者たちに貫かれてきたことなのです。」

（「まなざし」より）

「ごくあたりまえの「見る」という感覚とはいったい何なのでしょうか。私たちは日々、じつにたくさんものを見ているわけですが、ではこの「見る」ということに関していったいどれだけのことを知っているのでしょうか。」

「あなたはこの視覚のない男性に対して「見る」という感覚を説明することがまったくできません。辞書を調べても、生理学の知識を援用しても、視覚のない男性に「見る」とはどのような感覚なのかを理解させることは不可能なのです。私たちはふだん、この感覚をあたりまえのように使いこなしているのですが、いざ説明しようとするとう困感せざるを得ません。ではいったいなぜ、「見る」という感覚を説明できないのでしょうか。

じつは私たちがいま手にしているすべての感覚や経験、知識といったものは、つねに「すでに与えられた何ものか」を前提として成立している、ということなのです。

たとえば前節であなたが「見る」という言葉を調べても、そこにあるのは「見るという感覚とは何か」の説明ではなく、「見るという感覚で何ができるか」の説明でした。」

「このように私たちの感覚や認識、思考の背後には、どうしてもそれ以上溯ることのできない「すでに与えられた何ものか」がつねに横たわっているのです。それはいかなる言葉や科学的知識を駆使しても、踏み込むことのできない領域なのです。そして私たちが「自分の右手で自らの右手を握む」あるいは「自分の眼で自らの眼を見る」ことができない理由も、まさにここにあるのです。なぜならば、私たちはいまここに存在した瞬間から、すでに自らの眼でもって世界を眺め、自らの右手でもって世界を握み始めていたからなのです。というよりも、私たちが何ものかを見たり握んだりする行為とは、この存在と一つのもの、存在そのものなのです。むしろ存在すること自体がすでに、世界を握んだり眺めたりすることなのですから。」

（「水平線」より）

「けっきょく科学は「見る経験そのもの」を説明することができないように、空間や時間、物質そのものが何であるかを説明できません。そして自然科学におけるこの原理的限界は、他の経験科学にも共通するものです。」

（「言葉」より）

「人間が手にした言葉とは、目前の出来事に対応するための個体間のコミュニケーションツールというきわめて限定的なものではなく、現実には眼にもしていなければ経験もしていないような遠い場所での出来事や事物。あるいはその瞬間には存在していない過去や未来の出来事や事物までも自らの経験範囲の中に収めてしまうという、まったく質的に異なったものなのです。」

「一人の人間ではきわめて限定された経験しかできませんが、言葉によってコンパクトにまとめられた経験を摂取することで、私たちは時間的にも空間的にもはるかに膨大な経験を「擬似的に」経験することが可能となったのです。すなわち言葉の第二の意義は、「経験の操作・拡張」なのです。

この場所、この時間にしか存在できない人間が、言葉によって限りなく自己を拡張することができる、つまり一人の人間のなかに人類の歴史があり、世界があるのです。」

「しかしこの言葉による経験の拡大、蓄積、深化という過程のなかで、言葉はさらに人間に驚くべきものをもたらしました。それが意識です。（…）」

　意識とは、いわば言葉による「経験の反芻」です。（…）意識とは一度経験したことをもう一度言葉によって繰り返し経験してみることなのです。

（…）

　反芻としての意識は、私が経験したものを、あるいは現在進行形で経験しているものを、もう一度経験し直すことによって、自らの世界を再構成していくことでもあるのです。」

ある日本の哲学者はこのことを、「私たちは見ることをさらに見ることはできないが、見ることを意識することができる」と言っています（山内得立『意味の形而上学』）。つまり私たちは自分の右手で右手を握むことができないように、見ることをさらに見ることはできないのですが、しかし「見ることを意識する」ことだけはできるはずです。そして「意識する」ことによって、さまざまな感覚や経験のなかに埋没していた「すでに与えられた何ものか」を、私たちは認識の地平にまで引き上げることができるのです。」

（…）

　けっきょく私たちは意識によっても「すでに与えられた何ものか」そのものに迫ることはできません。何の前提もなしに、純粹無垢なる視野からこの存在を認識し、思考することなど決してできないからです。認識し、思考すること自体が「すでに与えられた何ものか」であり、この何ものかであることをやめてしまえば、私たちはもはや何ものでもなくなり、小石一つでさえ認識することができなくなってしまうからです。

　前提なき前提、認識なき認識、経験なき経験……「すでに与えられた何ものか」への問いは、じつはこのような絶望的な二律背反によって縛りつけられています。そしてそれはたんに学的な問題ではありません。私たちが自分の右手で自らの右手を握むことができないという現実存在の構造、実存そのものの宿命なのです。（…）」

　それはウイトゲンシュタインの言葉を借りれば「思考の外側を思考する」ことであり、カントが言うところの「形而上学の最も本質的な関心事」なのです。」

《目次》

はじめに

まなざし

「見る」とは何か/すでに与えられた何ものか

カタツムリ

さまざまな感覚/感覚の絶対的私秘性

水平線

海辺の古代人/現代の宇宙像/「前提ありき」の経験科学

言葉

言葉の世界/意識の誕生/意識の分析とその限界/見ることを意識する

エポケー

エポケーという方法/死の経験/自分自身の死

渦巻き

生きている世界/生きていることの定義

遺跡

死を祀る宗教的建築物/意識は死後も続くという仮定/二つの可能性としての死

人工衛星

神が死んだあとの世界/道徳教育のための宗教/神の末裔としての科学

握手

はじめに行ないありき/「在る」から「生る(ある)」の哲学へ/神々の微笑み

あとがき